#### 円周率の天才

Y-m a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

#### 注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

円周率の天才【小説タイトル】

] ] ( =

【作者名】

Y m a

【あらすじ】

燥的な憂鬱が巻き起こすファンタジー 非凡な自分を模索するあまり、交差する人間の業に陥る青年の焦

### 前触れ (前書き)

内での出来事からすべては始まった アラサーと呼ばれ始めたのは成人式のあの日から...そうやって生き ていくのだろうとぼんやりしていた、 奇しくも成人式の帰りの電車

#### 前触れ

円周率...円周率は3

違うのだろうか?

円周率は だ... 様..御 様..

私は溜め息混じりに空を仰いだ...

円周率を何桁...いや、何万桁だな

暗記でき、暗唱できても生きた心地はしない...

円周率は3...いや、御 様だつ。

私は円周率の天才である」

終電間際の電車さえ、半端に見えるこの家路に

私は異人となったのだ...

吊革が揺れているのさえわかる

さてさて

私が何者なのか

誰もがわかるように

円周率のように伝えるにはどうしたらいいものか?

電車内を我が物顔で見渡してみる

恐らくなんらかのヒントが散りばめられているだろう...な

フフッ...

### 冥界への切符

3で意識すれば人は道を踏み誤ることはない...

そればかりだ...

成人式は勢いで四次会まで行ったが...相変わらず無茶な連れだ...

電車内が寂しく感じる

それよりも四次会まで参戦した自分が愚かしい

いや、四次会まで企てた奴らが愚かしいのだっ

自己正当化とまではいかないが... 私は自己顕示欲のようなものを見え隠れさせ

余韻に浸りたがっていた..

「お兄さんアラサーなんだって???」

耳元で囁くような声が聞こえてきた

一つ目の...これは坊主だろうか声の方を向くと

何というか...見習いの袈裟を着込んだ一つ目小僧が...

表向き無反応な私の内をノックした...

心臓が酷く高鳴る...

よ、妖怪:

微笑を浮かべ一つ目小僧は黙りこくった

### 下手な妖怪

沈黙が5分ほど続いた..

その間、 一つ目小僧はずっと私を好意的な目で見つめていた...

少なからず笑みを浮かべていた。と言わざるを得ない...

だ、だいたい

いう人間だっ。 一つ目小僧など...下手な妖怪に今更ビクつく男ではないだろ?私と

どうした?一つ目小僧めっ」 おいっ!ひ、 一つ目小僧っ!お、 俺はアラサーだぞ?それが

私は一つ目小僧の頭を張ったペチッと

私に言い返してきた。一つ目小僧は、顔を真っ赤にして

かないで...叩かないで...」 「叩かないで...叩かないで...僕には目が一つしかないのだから、 叩

下手な妖怪の下手な言い回し...

都会の風がいかにこの下手な妖怪に覿面するか

思い知らせてやる!

ペチッペチッ

私は頭を叩き続けた...

何度も何度も...

自ら光を放つような赤い、 一つ目小僧はさらに真っ赤になり、やがて 人型の雷球のようになった...

うなったら、その忌まわしい右手にとりついてやる」 「酷いっ!酷いっ!何度も何度も頭を叩いて...酷いっ !酷いつ!こ

ひっ!!

謂われてみれば。

そう言ったリアルな表現には弱い...都会人も、「とりつく」だの

引っ込めた右の手のひらが横にパックリ割れ急いで

その傷口が目玉になった...

その目玉に姿を変えたようだった辺りに一つ目小僧はなく

## 開き直りのアラサー

「うわぁーっ!

ここで笑うとこだぞ?とお笑い芸人向けのサクラに対する新人教育。

そんなニュアンスで遅れて私は発狂した...

目..目が手に..」

当たり前の話だが、 て私の居る車両まで飛んできた... 私の叫び声を聞きつけ、 車掌らしき人物が慌て

# 私に駆け寄ってきた それはそれは何事かと言うような面持ちで

「お客様、 如何なさいましたか?」

私は涙ながらに

自分の手のひらを車掌に見せた

ギョロギョロ..

ギョロギョロ...

うわっ
!!お*
おお客様。
これは
テレビの
. テレビの撮影か何かですか?.
かですか

おいおい...

これがサクラ営業の本番だったら...

いや、素人臭くて良いかもしれん...

「う、うん…そうだとも…マジビビり?フフッフフフッ」

私は半ば放心状態で車掌のそれに合わせることで必死だった

車掌は幾分かホッとした様子で辺りを見回した そのせいか

ですが、 意ではないし、これがテレビ撮影用の特殊メイクと言うなら話は別 : 駅所まで来てもらいますけど?それともガチですか?」 「カメラは見当たりませんが?お客様...私もね?オカルトの類は得 撮影許可なく...つまり、アポなしとなれば、些か場が悪い

そう言われてみたら...

ガチな方がまだ良いんじゃないか?

痴漢やスリじゃあるまいし...色々詮索されても...困るしな

そ、そうなんだよ。

Ŋ つ目小僧がさ?手にとりついてしまってさ?」

後ろを振り向いた..

すかぁ?私には目も鼻も口も...ないんですよ?」 「お客様...一つ目小僧には、 つ目なりにも、 目があるじゃないで

後ろを振り向いていた車掌がこちらを向き直した瞬間...

目、鼻、口のない顔が顕れた

凝視してしまった私は電車を乗り違えたのだと思わざるを得なかっ うっかり

ひぃっ...のっぺらぼうっ!!」

私は立ち上がり、自分の足で逃げることを余儀なくされた

「お化け列車だ...

乗客も車掌もみんな化け物だ」

成人式...成人式を思い出せば、幾分か落ち着ける...

### 面積や円周

7
4
C
_
_
_
L.N
だ
11
<u>. –                                    </u>
_
•
Z
~
_
_
$\stackrel{\cdot}{\sim}$
う
う
うぎ
うだ
うだ
うだ
うだ
۲

辞をやっていたが、 成人式では、知事だかなんだかが、 かなりナウかったんだった... 若者に沿った話し方だとかで祝

「君達はさ?生き残った尊いメンズだろ?もっと胸を張りなよ?」

だったか?

二次会では、このまま行くとセーラー服で成人式でなきゃなんない

とか...マジ受けたよなぁ...

三次会でラー メン食べて

四次会で... なんだっけなぁ...

思い出せない..

円周率なんだよ...円周率

円周率に固執してたんだ..

なんだったか..

四次会は確か肝試しに

廃校になった高校に入ったんだったか?

季節外れの肝試しだったが...

そうなんだ...

円周率の計算方法は

円周を求める際

円の面積を求める際と同じなんだよ...

直径× =円周。であり

半径×半径× = 円の面積。なんだから

そこから の値を求めるのは簡単なんだ...

しかし... じゃあ ってなんなんだろうって...アレ?

### チキン野郎

四次会で、 私は肝試し嫌いなことに気づいていた..。

身の毛の弥立つ虚しさだ...自分の知らない世界が開けるなんて...

おまえってホント、チキン野郎だよな?」

同級生なのに、 誰より頼もしいタッちゃんが、 私に一喝した..

グで来いよ?先に行ってるからな?うひゃっ、 わらぬ神に祟りなしだ。 込んでたよ...」 「良いか?知らない世界なんてないに越したことはないんだよ?さ わかるよな?もういいや、お前のタイミン 30分こいつと話し

# タッちゃんが廃校に駆け足で入っていったそう言うと

もうかれこれ、 ようのない事実だ... 30分くらいタッちゃんに口説かれていたのも隠し

しかし、 と思うことにした...。 他のメンツが先に廃校に向かってから、30分たったのだ

チキン野郎で結構さ...

身の毛が弥立つ...

きっとみんなすぐに血相変えて戻ってくるさ...

行くんじゃなかった

ってね。知るんじゃなかった

みんな戻らなかった...しかし、さらに30分たったにも関わらず

私は妙な開放感に救われたように みんなが廃校に向かってから一時間後..その場から立ち去り このお化け列車に乗ってしまったわけだ...

さわらぬ神に祟りなしか...

最初はピンとこなかったのにな...

# 化け物列車の車窓から

どんな良い夢も悪い夢もすぐに覚める...私は夢の中で目を覚ますのが得意だ。

しかし、夢は続いたままだ..

冥界に入り込んでしまったのか?化け物列車が単に化け物列車なのか?

それだけでも確認したい...

私は左の窓をのぞき込んだ

延々と続く田園風景..

見慣れた建物や店..

冥界には入り込んでないみたいだ..

よかった

次の駅まで耐え抜けば

元通りだ..

「あんた..地獄に落ちたのかい?」

ギーッギーッ

ギーッギーッ

26

包丁を研ぐ老婆の姿があった... 山姥だ...

山姥だの、鬼婆だのねぇ...しかし、どうだい?あんたの頭が人を見「私も長年生きていれば、謂われもない言い掛かりはあるもんだ...

損なってやしないかい?ヒヒッ...」

ギーッギーッ

ギーッギーッ

間と捉えるのはなんとも難しく... 電車の揺れを構うこともなく、 包丁を研ぎ続ける老婆をまともな人

ていると言いたいのか?そんなバカな...」 く つまり、 私の被害妄想であり、 極度の幻覚症状を引き起こし

化け物列車と自負したのは、 と言いたいところだが 他でもない私なのだ...

化け物だろうが、 ってやつか... こちらの精神状態を指摘してくる以上...郷に従え

違うっ 私は山姥で鬼婆だっ 八つ裂きにしてくれる!

ギーッ... ガタンッ

錆だらけの包丁を私に突きつけてきた...研ぎ石を床に乱暴に置き捨て

ちょつ...待て。 あなたは人間だ! !鬼婆ではない...」

私の説得も虚しく、 山姥はジリジリと近付いてくる...

ツ ヒッ」 ヒッヒッヒッ...セラピストさんのお肉はどんな感触かな?ヒッヒ 私は走り出した

相手は鬼婆、山姥なんだ説得は諦めよう...

「うわぁーっ!!」

駅耐え抜けばいいんだ

### 山姥の質問

後一押ししていれば...

えるんだねぇ...」 も長年生きていれば、 「 ヒッ ヒッ ヒッ ...なかなか逃げ足の早いセラピストさんだねぇ...私 こんなに逃げ足の早いセラピストさんに出会

山姥の速さには勝てず、

追いつかれた私は、 首根っこを掴まれ、 右のシー トに放り投げられ

た :

に...私の恐怖心が見せる幻だっ! なんなんだ?この列車は...一つ目小僧にのっぺらぼうに鬼婆

すると... どうだろうか

辺りは閑古鳥が鳴くほどガランとしていたかに見えたのに...

乗車率80%…といったほどか?

人間が大量に...いる

二重幻覚 (がら空きの車内に妖怪) ...

人集りを避けたいがあまり見えた幻覚だったのか?

「ちょっ...退いてくれませんか?」

シートに座ったのだった...私はそうだった...

奇しくも見知らぬ老婆の上に...

「す、すみません」

慌てて席を立つも

怪訝な顔をしてそっぽを向く老婆..

周りはどうやら、私の気違いじみた行いをそれぞれ知っているらしく

(こちらは妖怪と戦っていたのだと言うに..)

すっかり、萎縮していた..

一駅耐え抜けば...か

私は幻覚を見ていた..

なんて自己中心的な幻覚なんだ...

「ひっ!!」

右手にはまだ目玉が残っていた...

た時間に、乗客に何か失態を働いてはいないか?と気にならずには 右手にある目玉に集中したいものだが、 いれなかった.. 化け物列車だと錯覚してい

それが地獄だったとしても、 一度覚めた夢の続きを見るのが困難なように 悪夢だったとしても、 それは同じよう

発狂してどっか行きよったが、 「よぉ。 あんちゃん?人の頭ペチペチ張りよってからに、 どうしてくれるんや?!」 いきなり

身の丈60寸はあろうかという、 の熊みたいな...極道屋が 派手なスーツを着たスキンヘッド

私の前に立ちはだかった...

人はこういった現実を逃避したがるものだ...

しかし、まぁ...不幸中の幸いってやつだ

右手にある目玉に

なんとか集中することができそうだ...

フフフッ見たまえ!君の知らない世界の幕開けだ!!」

奴さんこれに度肝抜かれて、すたこらさっさだ。 と右手の平をこれ見よがしに曝した

ギョロギョロ

ギョロギョロ

?貸してみぃ。 「な、なんや?それは?手品かなんかやろ?笑わしょるなぁ...どれ 抉ったるわ。

ダメだ..

極道屋が私の細腕をむんずと掴み、 目玉に手をかけた瞬間..

また、 あの赤い雷球が顕れ、 極道屋の額に目玉が移った...

「うわっ...あれ?おい。 右手の目玉はどこに消えたんや?」

その場を走り去った... 極道屋の隙をついて

神の思し召しとでも言わんばかりに、 丁度、 駅に着いた頃だったの

| 目散に私は下車したのだった...

フフフッ...化け物の一丁上がりだ

#### 幻肢痛

時に、私の右手からなくなった目玉だが...

一抹の違和感を残している...

現実的な表現をするなら、 にでもしようか... あの極道屋にドスで切りつけられたこと

こんなとき人は妙に強気になる...

うまく切り抜けられはしたが、仮にあのまま極道屋にハマり、 ことのできた自分を想定してしまう... かく因縁を付けられ続けたにせよ、その苦難を乗り越え生き抜ける とや

どこか英雄伝のようなヘラクレス像を思い描く...

頭の中の友達はしきりに休むなっ!!休むなっ!!を繰り返す...そ のような偽りの強さに頼っては、 痛い目に遭うと...

丸裸にされた気分だ...

B O O O M . . .

携帯が鳴っている...

あっ...タッちゃんからだ...どうしようかな...」

私は急に我に返ったように、鼓動を高鳴らせた...

もしもし...タッちゃん?ごめん...やっぱ怖くていけなか...」

自分の不甲斐なさを晴らしたい一心...と思いきや...タッちゃんから の電話は逆に私を呼ぶものだった...

「た、助けて…ップーップーップー」

タッちゃん..

タッちゃんからのSOSだ...廃校で何かあったのか?

「いた、 に決まってる...タッちゃんだもんな...」 タッちゃんが一芝居でもうって、 廃校に来させようとした

私は強気だったのだ...

タッちゃん達の優しさに甘えたのかもしれない...

路についたのだった

右手の違和感が些かの痛みに変わったことに気づきながら、

私は帰

### 守護大名達の調和

家に着いた...

何の気なしにテレビをつけると、地方チャンネルのニュース (つま 地元の事件ってわけだ) が流れていた..

「物騒な世の中だ...」

と呟く私はすでにアラサーどころではなく、アラフォーやもしれな

ん? \_

#### 火事で全焼した

廃校より11人の焼死体が発見されました...

だって!!

ゃん入れても5人しかいなかったはず...いったい何があったんだ?」 あの廃校じゃないか?いや...待てよ...11 人は多すぎる... タッち

タッちゃん... あの電話はガチだったんだね...

私は僅かながらの希望を胸にタッちゃんに電話した...

プルルルル

プルルルル

「はいっ太刀川ですけど。

あれ?普通に出たな...

「あっ!タッちゃん?デコポンだけど?ニュー ス見た?あの廃校全

焼したんだよ?」

れんやった奴がユダとか、 ン何で来なかった?みんな半狂乱で大変だったんだぞ?デコポン守 「火付けたのは俺らだけど、焼死体に関しては知らないよ...デコポ 危なかったんだぜ?」

そんな...

廃校が全焼するなんて...タッちゃん達らしいや自分一人いないだけで

メンゴメンゴ...タッちゃんらしいやん?」

タッちゃんもなんだか疲れているみたいで、話を切り上げたかった のか...もしくは...いや...そんなことはないか...

なよ?おやすみ。 「デコポンもあんま付き合い悪いと寒い目に遭うからさ。 気をつけ

「うん、おやすみ。\_

いし 詳しく知りたいんだけど、タッちゃんに無理させるわけにはいかな

いいよな...

# タッちゃん達が悪ノリで火を付けたにせよ廃校の火事について、考えを巡らしてみた。

焼死体が11体も発見されたなんて...

タッちゃん達、気が気じゃないよな...

また火を付けなきゃいいけど...気に病みすぎて

あのとき...あのとき自分も廃校に行っていれば...

『次は御前だ!!悪魔より』

メールだ...

b 0 0 m

b 0 0 0 m

送り主は...あ、悪魔っ!!

ひっ!!!

何なんだ...メアドも知らないやつなのに、 既に悪魔と登録されてる...

また... 幻覚か?

だとしたら、悪魔の正体は...タッちゃん?

タッちゃんらしい悪ノリかな?

『こ、この悪魔めっ!!お前は誰だ?!』

と返信したところ...

返事が来た

b 0 0 0 m b 0 0 m

52

前となる...』 『悪魔は悪魔だ...次は御前だ!!悪魔の生贄となる柔肉の子羊は御

プッ.....なんかウケるよ。

戯にせよ。 私はまた異次元に迷い込んだのだと...仮にタッちゃんの質の悪い悪

これはもう異次元と捉えるしかない...

ಕ್ಕ ず、 たとえば...」 ザザー... あくまにはせいとどうをはんてんさせるちからがあ

いきなり、テレビが砂嵐になり

悪魔が話し始めた...

てやろう...」 「たとえば、そのべっど。せいとどうをはんてんさせて、うごかし

ズズズッ...

私を乗せたベッドが独りでに動いた...

たじょうたいだ」 「さらに、くうかんじょうでせいしさせる... いまべっどはらっかし

## 添え木2 (前書き)

わかには信じがたいデコポンの心情は天変地異を匂わせていた。 クルクルと激しく回転するベッド...突如現れた悪魔の仕業だと、 に

クルクル回るベッドに私は歯を噛みしめ、 しがみついた...

どうしようもない...

私達は落下しようとしていたのだろうか...

悪魔からの曲がりなりの浮遊感というプレゼントに...

私は歯を噛みしめるばかりだった...

その一言を最後にテレビは消え、 砂嵐は去った...

ベッドはクルクルクルクル回っていた...

歯を噛みしめる私に対し、 ベッドはクルクルクルクル回っていた...

と、飛び降りるしかない...

言っても10寸程度の高さではないか?

このままでは酔ってしまう...

「見てろよ?悪魔めっ!!」

意を決し、ベッドから飛び降りた私は...

こともあろうに、着地を失敗した...

足首を肉離れしたのだった...

傷のようで、 激痛が走り、 腫れ上がった足首のそれはまるで悪魔がとりついた腫 私は付け焼き刃の祈りを行い、 すぐに向き直った。

離れの痛み... 忘れるものか...」 「悪魔め...私のセーフティーライフを駆逐せんとす悪魔め...この肉

ッドでの私に酷似していた... 肉離れの痛みを、 歯を食いしばり耐える私は、 あのクルクル回るべ

くしからず...くしからず...」

悪魔は果たして去っていったのか?すべては、悪魔の算段であったのか?

そればかりが、 思考を留めて離さなかったのだ。

#### ピースエンピー

卑屈になれど、拭えぬ恐怖心...

悪魔が何をしてきても抗い得ない確信がある...

それはやがて、無垢への嫉妬に変わる...

ピュアへのテーゼ...

私は天使に出会いたいのだ...

悪魔を中和してくれる天使に...

の罰は...」 「例え...て、 天使を堕としてさえも...幸せにすがりたい...これ以上

まだクルクルと回るベッドに私は、狂犬病めいた反応を示した...

水を避けるような...

涎が滴り落ち...

カーペットを濡らすが...構いもしない...

いや、構い過ぎて忘れている...

その程度の仕業など、どうでも良い...

私は平和を愛しているのだ...

「 早 く 魔力よ静まれ!!なぜまだベッドは回転したままなんだ

!!

りにも和らいだ気がした... クルクルと回り続けるベッドに固執することで、寧ろ、 心が微少な

涎で濡れたカーペットを手で拭い...

私はそれでも部屋から出た...

b	b
0	0
0	0
0	0
m	m

## ジキル博士とフランケンシュタイン

家から出た私は、 フラッシュが揃ったかのような、 慌てるでもなく、 ポーカーフェイスを保ったままだ スペードのロイヤルストレート

ポーカーフェイスと言えば万物共通の悪癖、 と高を括るものだが...

考えすぎはよくない...

もう一つの人格は穏和なフランケンシュタインかもしれないからだ

そうものなら、 しかし、 ここでスペードのロイヤルストレートフラッシュを叩き出 人々は遠慮なく私の人生にハイド氏を探り出すだろ

まぁ、そんな心境だというわけだ。

バレるわけもない... テレビの突撃レポー トでもない限り、 部屋で回り続けるベッドなど

·...デコポン。\_

あつ... タッちゃん

タッちゃんは筋肉質であり、逞しく、 白いタンクトップにGパンを

履き

ラッパー が付けそうな極太のプラチナのチェーンを首から掛けてい

た :

相変わらずの粒みたいな瞳は...私には愛らしく見えた

やぁ... タッちゃん。

タッちゃ んは私の呼びかけに少し目を逸らし、 親指を立てた。

ダーをチョイスするブローはブローだ...わかるよな?」 信じてほしい...ホーミー同士悪さはやるかもだけど、サイコなマー 「デコポン...あのときデコポンが俺らに一言,WHAT-って言ってくれてたら...バカやらなかったよ...マジでさ。 S でも、 U P

んの話はdo ņ t m i s s i tなんだ。

絶対聞き逃せない この辺りのルールなんだ...

てしないに決まってる...」 「当たり前さ! **!タッちゃ** ん達はマジッパないけど、 絶対殺しなん

タッちゃ ティアだと... んは口を抑え、 涙を流した...私にはわかる。 これがホーミ

ガだと思い込んでる...デコポンは俺達のマムであり、 てほしいから、 「うぐっ...サンキューな?デコポン...だが、 この件には関わらないで欲しいんだ...」 コップは既に俺達をニ ハウスであっ

まさに、 私は男として、戦士としての自我が芽生えたことに気づいた.. スペードのロイヤルストレートフラッシュだ...

U
<b>₩</b>
かし
b
$\tilde{}$
ホ ー
۱,
-
_
ξ
T.
なんだ.
.6
h
+
ات
·. ,
・私はポー
14
IJ
ન•
私はポー
-
カー
刀
Ĭ
•
7
_
I
1
1
7
を
₩
へを貫いな
íĩ
VΙ
<i>†:</i> -
, _

オーライだよ?みんなの在るべき場所を俺が守ってみせるよ?」

私とタッちゃんはアー ムレスリングみたいな、 かたい握手を交わし

その後は無言で去った

互いの道を歩きだしたんだ...

#### 聖水の存在

信じるしかない... ひとつ問題がとりあえず片付いた...ことにしよう...タッちゃん達を

あのベッドは自分で治めるしかないんだ...

元在る場所...社会の掟..

ıί タッちゃ んは高鳴るアドレナリンを抑えるために、 しながら オートバイに跨

c o o l !! c o o l !! .

と耐え抜いていた..

タッちゃ ていた んの良き理解者、 カミカゼはタッちゃんの常に先回りをし

ゼはオー タッちゃ トバイのキーをさっと取り、 んのアドレナリンがあるボルテージを超えたとき、カミカ オー トバイをふかし温める...

タッちゃ いからな... んの急激なリクでオー トバイのエンジンがイカレてはヤバ

カミカゼはタッちゃんを最も理解する男..

私にもカミカゼみたいなホーミーがいたらな...

って、都合良すぎだ...

呪いには霊媒師の御祓いとか聖水とか...

はっ ・それだっ 近くの教会に行って聖水を分けてもらおう」

走り出した...教会に向かって 私はカミカゼのように速く...いや、 もっと...いや、 もっともっと速く

#### 精神と時の...

教 会 :

ಭ 日頃は辛気臭くて...むしろ粋がっていた私だが、 なぜだか古傷が痛

そんなときに神の仕業とか思い立つから呪われてるんだろう...

迷える子羊は何人も教会なるもので救われ、 な不幸を神の仕業と位置づけたんだろう... 仮に言うなら私のよう

神への冒涜ではないか?私が冒涜しているなど、 神にとっては...」

ただ、今抱える問題に集中した...私は深い溜息をつき

パッと見、 大きな門の向かって右側に、 洋館にあるような、 人が通るほどのドアがついている。 こざっぱりとしていて、それでいて

自分にとっては)で入り、 そこから、 私は我が物顔(少なからず、 更に教会の建物内にノックもなく入った... そう思うほどの奇行なのだ。

勢いを忘れると逃げ出しそうになる...

周りにはオペラグラスが神話を語っている... 教会内に侵入?し、 立ち尽くした眼前には十字架が掲げられ

しかし...見渡しても神父様?司祭様?はいない。

「悪魔と出会いましたね?」

背後から...背後から声がした...

心臓が口から飛び出しそうなくらい、

私は驚いてしまった...

#### 断罪

十字架に向かって並ぶ長椅子に座り、

様に伝えた.. 喉元まで出掛かった心臓を飲み込んだ私は、 コトのあらましを神父

聖職者なる振る舞いで、 目尻の下がった優しい目が鋭く光った...

話ではありませんか?神の御前、 ら、それを治めるために私の聖水が要ると?にわかには信じがたい 疇を優に超えています。 きか?思慮に困る限りですよ?簡単に言いましょう...神の御心の節 のではありますが、 「悪魔に出会い...ベッドが宙に浮き、止め処なく回り続ける...だか 神聖なる価値のあるこの聖水を汝に与え賜うべ 汝の訴えの真偽は神のみぞ知るも

私には神父様が何を言いたいのかさっぱり分からなかった...

さか魔神?私もにわかじこみの知識しかありませんが...そんな...」 神の御心の範疇と言うと...それほど強力な悪魔...つまり魔王...ま

取り出し、私の眼前まで運ばれた精巧な瓶の中では、美しく輝く聖 神父様はしばし考え込み、 なる水が波打っていた。 それを私に見せ神父様は話し始めた。 奥の棚に向かい歩き出した。 その棚から

して、 が違いすぎますね...あなたの見解が正しいと言うことにしましょう。 「 え え :: 500万円にてこちらの聖水をお譲りしましょう...」 仰るとおり小悪魔程度の悪さには思えません。 問題の次元

私は唖然とした...辺りを見渡し、 で訴えていた... 傍聴人はいないのか?と声なき声

私は健全な生活を大枚叩いて買わなければならないのか?

加減なことを言わないでください!!」 そんなつ! !私は困り果てた迷える子羊何ですよっ! 11

は首を横に振った..。 私は立ち上がり、 神父様に言い放った..が、 激は空を切り、 神父様

えなければ怠慢であると神は仰っています...」 「神は皆に平等なのです。 あなたなら一目置いて500万円すぐ払

最初の意気込みはどこへやら、 分が悪いんだろうか... 慣れない信仰に安易に手を出した自

神の裁きはまるで、閻魔大王との謁見に似ていた...

だきたい。 「怠慢ととられるのは耐え難い...この話はなかったことにしていた

私は神父様の返事も聞かず、急ぎ足で教会を後にした

# 自己神格化の代名詞

私はポケットに手を突っ込み、 イライラ、 イソイソと歩いていた。

神父?神父がなんだ?

私の何が神の恩恵を消費していたと言うんだ?

どうせまた、 なんたらが食卓に並ぶまで、などと私の存在を脅かそ

うと言うんだろう...

が そのなんたらが食卓に並ばなければ、 成り立たないではないか? お百姓様だろうがなんだろう

違うのか?

えるに決まっている...。 少なからず、 私が神から与え賜れたものを食すとき、 彼らはそう捉

私は食べることが仕事なのだと...

しかし、命はそれに左右されている...半永久的な現実は、私の思考よりは遅く

だ...ったのだが、 風が...ヒューッと吹いた...決して痛くもない、 いまの私にはあまりに重い仕打ちだった 頬を撫でるような風

あ

私は半狂乱になり、 辺りをのたうち回った...

何故だ! !神は神は何故私を見離した! っ...あ ゕ゙゙゙゙゙゙゙ っあ゛

私の中で、 天変地異が起きた。

が優しく感られた。 今まで優しいと感じていたことが厳しく、 厳しいと感じていたこと

自給自足?自己神格化?

これが自我なのか?

わからない..

そして...私は気を失った

### 未知との遭遇

メヲサマセ!!ワレワレハアクマダ! !メヲサマセ!!」

眩い光の元、 ました.. 何やら単調な話し方をする声にどやされ、 私は目を覚

銀色のタイツを全身に纏い、真っ黒で巨大な目はまるで、 サー大尉のように鋭く私を見つめていた... マッカー

アクマダー!ワタシガアクマダー!ワタシガアクマダー!」

辺りは柔らかいイメージを帯びた精密な機械群が立ち並び、 レイ...宇宙人が何やら操作をしていた。 他のグ

ぁ 悪魔?お前が人ん家のベッドをクルクル回してたのか?」

宇宙人はバカに長い指をプルプル震わしながら、 私の質問に答えた。

ュウテキニリヨウ...カツヨウスル...」 ソウダ。 オマエノベッドハドウリョクゲンニナッタ。 ハンエイキ

動力源になるのか...

寄りによって私のベッドが...

チイキニガイノナイドウリョクゲンニナッタカラ... シンパイスルナ 「シンパイスルナ?ワタシタチノチョウサノケッカ、モットモコノ

心配するなって言われても...

あっ...うぅっ...」

覚だろうか?) ば、 業しているのを見ているうちに、 宇宙人達が重力に関係なく、高所にある機械にふわふわ浮いて、作 体に意識が行かなかったというか...四肢五臓六腑のような感 体に感覚が戻ってきた (というよ

うおっ...なんだこれは?」

体中を縛り付ける物はない...

しかし、体が動かない...

金縛りのような...

内臓は無意識に動いているというの、に...

カッテニウゴケナイヨウナマリョクヲツカッテイル。 ワレラハア

そう言い残し

宇宙人はふわふわとマンションで言うところの三階に当たるだろう

か?

その高さまで行き、何やら作業し始めた...

もう...何が何やら

うちに帰りたいとも思えず(なんせ、 ベッドがクルクル回りっぱな

しだから)

出口を探すなど、そんな余裕もなく

魔力...魔力..

彼らの話に合わせなければ...

突破口をはつ
はっ
たりかっ
ったりか?紳士的に?いや.
し?いや.
を平
. 負けを平に認めよう
よう::

あ 悪魔よ!!私の負けだ。 さぁ...私を解き放ちたまえ!!」

1体の宇宙人が私の方を向き、 私の足を右、 左の順番で指さした。

「ドコニデモイケ!!」

そう言うと、宇宙人はまた作業に戻った...

確かに、私の両の足は動くようになった...

## 宇宙人の励まし方

・足しか動かねー つ なんとかしやがれーっ

私はとうとう...と言うか、案の定壊れた...。

勝負に出たのだ...

壊れたと言うのに

前向きな発想を本線に、 最悪の事態を...想定していた...。

積されていて...ひっ...いや、 て除去されたすべての,痛み,がお前等の手によってこの施設に蓄 「ひっ…あ゛ つ ! ! ! げ、 ŕ 激痛だけを伴うとかだろ?麻酔によっ 止せ?わかるだろ?わ、 私のベッ

ドが...む、無害なんだ。」

咄嗟の思いつきにしては、 そうな最悪の事態だ... 宇宙的で残酷で...ざ、 斬新だし、 有り得

は あ :: 止せ!!」 はぁ...はぁ...見てみろ?もはや、 拷問の意味もない...。 ひ

また、 し始めた…。 1体の宇宙人が今度は私の耳元までやって来て囁くように話

ガホロブマエニ、アンラクシサセテヤロウカ?イマノオマエナラ、 ワカルハズダ。 エガシヌノハソノアトダ。 「アンシンシロ?コヒツジヨ。 アンシンシロ?ソレトモ、 セカイハカクニヨッテホロブ。 オマ カクデセカイ

絶望の中に光を見た私は、茫然自失した...茫然自失...

人類と供に滅びたい...私を家に帰してくれ。

私はそう言い残し、 意識を失った..。

ッドでした... みたいな あれほど喚いた私なのだから、目が覚めたときには、 そう...私は楽観視していたのかもしれない。 地についたべ

そんな期待をしていた..

オキロ!ワタシタチハアクマダ!!」

がら、 眩いばかりの真っ白な部屋ではまだ幾体もの宇宙人がふわふわしな 作業していた。

あ、悪魔だ..

タチノナカマニナルチカラ。サァエラベ。 ヲトブチカラ。 フタツハミタイモノヲミルチカラ。 ミッツハワタシ 「 オマエニチカラヲヤル。ミッツノナカカラエラベ。 ヒトツハソラ

ち、力?

私は悪魔と契約を交わしているのか?

いや、待てっ

私なりにこの究極の3択を吟味しようじゃないか?

何々?

まず、 空を飛ぶ力か...奴さん方ふわふわ浮いてやがるな...確かに

うーむ...良い..

二つ目は見たいものを見る力...か...千里眼みたいなものか?

: 良い

最後に宇宙人になれる力...か

ぉੑ おい...なぜ、 私にそんなチャンスがあるんだ?」

宇宙人は無表情だが、 不思議そうな顔で私を眺めた。

シカナイ。コトワルケンリハナイ。」 ノベッドヲドウリョクゲンニスルニハ、 「ザンネンダガ...チャンスデハナイ。 コレハラクインダ...。 オマエニチカラヲアタエル オマエ

喜ぶ暇もなく、 私は現実に引き戻されていった..。

#### 周回遅れ

輝いている人間を見る度に私は、 ことがある。 私のようなものは常々思っていた

やがて、 るのだと... 終わりは来てそれでも生きようと願うなら、 私のようにな

人生はそうあるべきだし、そうあれば...多くの人が救われるから...

意図が含まれているが 輝いている人間の発するメッセージには常に多くの人を客観視する

私が望んでいたのは、 終わり...手中にあった輝きの終わりなのだ...

ろうか?」 「ときに、異星人よ?三つの力、 一度ずつ試させてくれはしないだ

宇宙人が少し笑ったような気がした...

イイダロウ... スコシハハナシノワカルヤツノヨウダ...」

違うさ...私は私を手のひらの上に乗せただけだ。

感は寸分もなく 私の体は嘘のように軽くなり、 縛り付けられていたかのような閉塞

体が浮き上がった...

私はバカ正直な人間です"とでも言わんばかりに体が浮き上がっ

ラヲホジスルダケデ、 ヒケラカソウガワタシタチニモンダイハショウジナイ。タダ、 「コレガソラヲトブチカラダ。 オマエガコノチカラヲカクソウガ、 スバラシイドウリョクゲントナル。

寸分の閉塞感もない私の感覚は寸分でも良いから閉塞感を...

# インスタントパラドックス

チキュウニモドレ。 「ヨシッ。 オマエガエランダトオリ、 ソラヲトブチカラヲアタエタ。

躊躇ではないが、反論の余地なく私は蒼い光に包まれた...

光から覚めた私は、薄暗い部屋の中にいた...

ブォンブォンとベッドが相変わらず回り続ける部屋

ディブオブプードル』 タッちゃんの薦めで、 ファンになったアイドルグループ『シェパー のポスター が貼ってあり...

タッちゃんはSOPを危険視すると同時に愛していると言っていた...

地球に飛来した隕石は、 タッちゃんが言うには、 地球側の石からの逆輸入だ。とか 油田は半年で完成するようになった。 とか

SOPにディープだった..

ブォンブォンブォンブォン...

すでに、 強く廻っていた... 動力源となってしまった私のベッドはタービンのように力

私はベッドより10寸ほど高く浮かんでみた...

て...世界が回っているってことは、 「タッちゃんが言ってたな。 インスタントパラドックスは神曲だっ 最初か現在が嘘ってことらしい

:

タッちゃんらしいや...

たの 「キラキラ夢を見たの 怖くて嘘をついたのに 優しくて嘘をついたのに キラキラ夢を見

私はまた一寸、また一寸と上昇していった...SOPの代表曲『インスタントパラドックス』を口ずさみながら、

# 聖痕現象と聖教徒の淫乱

尽に駆け回った...。 私は薄暗い部屋の窓からシャボン玉のように飛び出し、 空を縦横無

浮遊感は、 すべての人間に自分のできる限りの無重力を与えているかのような 重く…とても孤独で…前衛的だった。

ど、どんなカラクリなんだろうな... 異星人の奴らは、 私が力を持っているだけで良いとは言っていたけ

超高エネルギーを生み出すカラクリってやつが、 クル回転させることで生まれるんだろ... あのベッドをクル

まぁ...世の中の電力の総てはタービンだから...

要はタービンが回ればいいんだ...

八八八ッ見慣れた街並みがネバーランドみたいだね...」

を見つけだしやしないかと、 夕暮れ時の景色は炬燵に潜り込んだみたいに真っ赤で、 かなり興奮していた。 誰かが自分

んでるよ!!」 「あつ...えーっ へが空を飛んでるよっ ・知らない人が空を飛

小学生らしき少年が私を指さし、 しかし、 明確に他の友達に伝えていた。 あたかもスーパーマンかのように

オーラルセックスのような...いや、相手が小学生だからだろうか?

部屋に一目散に逃げ帰ったのだった...

穴があったら入りたくなるみたいに、

薄暗い

私のような産な奴は、

彼の少年の友達間での信頼を損ねる形になったか...

私は罪悪感の真っ只中にいながら...帰路を得たのだった...

#### 繁殖欲に着眼

私は小学生に怯えていた...

それは、 自分の与えられた力を認め始めたからかもしれない...

だいたいが、 あの小学生の少年...だけに見られたのか?

実は反芻児で、良い意味でトリ役というか...

皆は既に気づいていて、 答えを待っていたとしたら...

それは導かれるように、私を怪人扱い...いや、 たことにするやもしれない... もはや存在しなかっ

薄暗い部屋で、発起を隠匿することばかり、考察していたが...

思い出せ!!

私が小学生だった頃

何に心を奪われていたか?

UFOか?エイリアンか?なんだった?

ダメだ..

だからこそ、

怯えているんだ。

まったく思い出せない...

あの小学生がどんな動きをとるのかを...

自意識過剰になり、 のように一塊に重んじていった... 私は弱いものを探すように人道を逸れた虫けら

空を飛べるからなんだ?

もし、 空を"飛べなければ" 悩むことではなかったのに

行に出てしまった... 私は無意識に敬遠していた" 回転するベッドに突っ込む" と言う愚

バキッベキッ...

骨が折れる音がした

痛みがどこか遠くにあり、 内臓に刺さってやしないか?

砕けた骨が体内に残りはしないか?など

がら、 一丁前に医者のような判断をしながら...肉々しいイメージを保ちな 最後の力を振り絞り、 道路上に飛び、 降りたのだった...

## 薄れゆく存在感

痛みが迫ってくる...

違うことを考えたい...

ΙĘ が早く...早く私を見つけてくれさえすれば... 骨が何本も折れてるんだ。 痛いに決まってる。 あの異星人ども

うぉっ... デコポンっ !大丈夫かっ?!」

タッちゃん..

タッちゃ んの巡回時間になんとか重なった...

タッちゃ んになら、 すべてを話せる。

「デコポンっ! …誰にやられたんだ!!デコポンっ!!」

安心したやら、なんやらで私はタッちゃんの前で笑ってしまった。

アハハハハッ!タッちゃ...ゴフッ...」

吐血した...

痛みが襲ってきた...

ヤバい... うぅっ...

っ... ゴフッゴフッ...」

た。 私の痛ましさに、 そして、救急車を呼んでくれていた... タッちゃんは慌てふためき、 タイを取り出し

病院か..

どうしよう...説明...

「えっ?患者の状態?...かなり苦しそうです。 血も吐いてるし...な

んだろう...とにかく来てくださいよ!!」

タッちゃんが救急車を呼んでるうちになんか考え出さなきゃ...

## この大怪我の原因を...

ているんだ...ましてベッドがクルクル回転してる理由なんて... ベッドがクルクル回転していて、それに突っ込んだから?何を言っ

宇宙人の話をするわけにもいかないし...

外科と精神科を梯子するのだけはイヤだ...

私の存在感は意識的に薄れていった

# タッちゃんの仲間のカーニバル

一人はすでに紹介したけど、カミカゼ...タッちゃんは仲間を持っている。

タッちゃんの側近的な男

ードマークは坊主に生える一本線のモミアゲ...

次は、 させるほど... カルテ…物凄くフランクで、時にタッちゃんの自尊心を崩壊

トレー ドマー クのもじゃ もじゃ 毛は天パーだけど、 の略だってさ... カルテは天才パ

んで…次は、カード…

無口で口下手だけど、 る習慣がある... 的確に物事が運ぶ度、 カードをお星様と崇め

ドマークの金髪の七三分けは、 タッちゃんのお気に入り...

最後にカーニバル..

実は、 髪のサイケマン... タッちゃんが唯一仲間だと思っていない... 七色に染まった長

が減るからとか.. タッちゃん曰く、 俺がとやかく言わない方が、 カーニバルの犠牲者

そんな冷酷無比なカーニバルが、どこからともなく現れ、 んがあたふたしてるケータイを取り上げた... タッちゃ

「異星人の仕業です。 . はい..」 解るでしょ?またベッドみたいですよ?はい

ピッ ::

唖然とするタッちゃんを余所に、 カーニバルが私を見て屈んだ...

じゃないぜ?必ず、 「デコポォン?水臭いぜ?未知との遭遇には一人で立ち向かうべき 人間にも伝わる答えがあるんだ...」

社会の窓を全開にしていた... これからどこにいくやら、一張羅のタキシードを着たカーニバルは、

122

## カー ニバルライク

ポンだけだったんだぜ?宇宙人と契約を結んでないのはさ...デコポ ンは空を飛ぶだけの男になってしまったが... ワターシはウチュージ ンのナカァーマであるから、 の力、全部欲しいとか間抜けなこと言ったんだよな?あのな...デコ デコポンも宇宙人に会ったんだろ?デコポンのことだから、三つ その大怪我も立ちどころに治せるんだ

かりらずった目が高って帯のほどのに乗びられ私はタッちゃんの方を向いた...

タッちゃ んは目を逸らし場の悪そうな顔をしていた...

そりや... 良いや。 じゃあカーニバル先生?頼みます..

些かの寒気と共に、私の怪我は完治した...。カーニバルは頷き、私にウインクした...。

ジンのナカァーマなのは俺だけだ...タッちゃんは空さえ飛べないぜ 「八ツ八ツ八アーツ。 まぁ、落ち込むなよ?デコポンよ?ウチュー

タッちゃん?みんな契約したって言ってたじゃないか?えっ?

私はまたタッちゃんの方を向いた。

「... まぁ、 そう言うこった...デコポンよ?気を悪くすんなよ?じゃ

タッちゃん..

訳じゃない...「生きたい」―心だったんだ... タッちゃん...違う!!私は...私は出来心なんかで空を飛びたかった

去っていくタッちゃんの後ろ姿に私は声が出なかった...

大丈夫だ。デコポン!カーニバル様がついてるぜ?」

タッちゃんが正しい!!タッちゃんが正しい!!

違うっ!

\_\_\_

「ウワァアーッ!!」

私は猛り狂い、空に飛び出した...

「タッちゃん! !タッちゃん!!ウワァアーッ!

だ: 自分の力に恥じながら、 それでもその力こそが償いだと気づいたん

#### ララバイ

だ居た.. タッちゃ んが去っていってから、 空を飛んだけど、 タッちゃんはま

居たというか...確認できたというか...

間なんだぜ?」 実際に存在する宇宙科学を持ってしても駆逐できないウイルスみた いなものらしいんだ...そこで、 いんだ...宇宙人が言うには、悪魔ってのは宇宙人のことではなく、 「デコポン...違うんだ。 道を選び、 俺は宇宙科学を" タッちゃんと俺は二手に分かれたに過ぎな 使う"道を選んだんだ…宇宙人も仲 タッちゃんは宇宙科学を" 使わない

空を浮かぶ私の前に、 ったかのようなカーニバルの虹色の長髪が、 また空を浮かぶカーニバル... 私を見つめているかの 一瞬虹でも架か

ようだった..

しかし、 ル回転する一件は宇宙人の仕業だと解ったし... 頭は混乱するばかり、悪魔とは何なのか?ベッドがクルク

カーニバル…つまり、悪魔とは何なんだ?」

カーニバルは微笑を浮かべ、目を逸らした。

うだ?デコポン...まだ時間が掛かりそうか?」 「悪魔が何なのか?が解れば宇宙科学でやっつけられるってのはど

身震いがする質問だった...すべてがリセットされたような...自分ら しさを取り戻せたような...

「そんなアバウトなんじゃなくて、悪魔って...」

するとカーニバルの様子がおかしくなった...

急に苦しみ始め、 肌は青黒く、 目は赤くなり、 髪は真っ白になった

牙が生え、体は二周りは大きくなった...

ツマリ、コウイウコトダ。 アーツ!!」 ウチュウカガクノダイショウ... ウワァ

カーニバルは物凄いスピードで彼方へ飛んでいった

あれが...悪魔なのか...」

私は暫く、 空に浮かんでいた...いや、浮かびすぎていた。

目下に人集りができていた

### デコポンだっ!

アレ、 デコポンだっ!!デコポンだよ。

あの時の小学生だろうか...

近所では、タッちゃんと連んでるだけで名前が通るもんだし...な タッちゃんの人脈は計り知れない...

が...しかし、バレた...

宇宙人はバレようが、バレまいが構わないと言っていたが...

私に至ってはバレては困るのだ...困るはずだ。

八八ツ、 デコポンの奴死んじまったか?ありゃ、 幽霊の類だぜ。

# 同級生だった舘海の奴にまでバレた...

う男と皆に知らしめた奴だが... 素潜りの日本記録を持つ舘海は真っ白な肌にも関わらず、 海が似合

まさか、私が空を飛ぶとは思うまいな...

「おー いっ みんなぁっ ・オラは死んじまっただぁー つ

私が空を縦横無尽に駆け回っていると

体の自由が利かなくなった...空から光が伸びてきて、私を包み込み...

事もあろうに、 に拐かされている... 舘海の前で...これは拐かされている...私は宇宙人達

ぜ!!チクショーッ 「あーっ ・UFOだ!!デコポンがUFOに吸い込まれちまった !!不可解で奇妙奇天烈で…あーっ!!デコポ

迭されていくのだった。 舘海が私に何か言ってたみたいだったが、 無情にも私はUFOに更

## 凡庸、水面までの間に

光の海を... 舘海のやつに会ったからだろう...

まるで、素潜りをやり終えて、海上に顔を出すまでの浮遊の間...

そんな時間がこの私に与えられた...

記録だけで十分だろう...走馬燈など...

また、 眼前が真っ白になり、 ベッドに寝かされ、 私は視界を奪われた..。 意識だけが続いていた。

ザンネンダ...デコポン...」

間ってわけか.. 宇宙人にまでデコポンと言われる始末...カーニバルが言うとおり仲

ラヲヒケラカシタリセンオモトッタンニ、 ザンネンダ... デコポン... デコポンハナンヤカンヤイウテモ、 ワテツライワ...」 チカ

前に話した宇宙人とは違ったんだろうか

何やら流暢さに深みがあるというか...言葉尻だけでイントネー は酷いくらい単調だが... ショ

シャ アキマヘンヨ?シャカイジンナンヤカラ、 ロ?タシカニドウリョクゲンハカクホデキマスケド、 ナンカモウワカリマッ ワカリマ

解りまっしゃらず...

残念な私には解りまっしゃらずだった...

動力源って...どんな仕組みなんだ?悪かったよ。

私の半ばぶっきらぼうな質問に対し、 宇宙人はため息をついた。

ガヒツヨウナンデスワ。 ナ...マズ、ドウリョクヲウミダスニハイキトシイケルモノノオモイ 「ハァ...アンサンセッカチヤカラ、 カンタンニセツメイセナアカン

" オモイ"か..

確かに仮に電気があったにしても、コンセントにプラグを繋ぐこと で電力を得れると゛思えない゛としたら?

せっかくの発電設備も何もかも嘘になる...

太陽があるから、 暑いんだろうが、 太陽が熱いかどうかなんて私は

知らない...

ってことかな...

## to help

ッテシモタカラナ...」 ヲアンサンニムケサセヨウオモタンヤケド、 ホンマハナ?ジケンヲワンサカオコシテ、 マア、 ヒトビトノチュウモク アンサンガメダ

宇宙人は兎にも角にも残念がっている。分かるような...分からないような...

事件と私、どんな意味があるんだ?」

些かフランクな質問に宇宙人はまたため息をついた... 相変わらず、ぶっきらぼうと言うか...カルテほどではないにせよ

ルマワリヨルカラヤッ!!ッテハナシヤナ。 ンオキマシタ。 「イミッチューカナ?ジブンチノベッドガタイヨウヤネン...。 ハテ?ナンデデショ?アンサンチノベッドガクルク ワカリマッシャロ?」 ジケ

... 解りまっ しゃら...ないっ!!

なぜ、 私は自分の頭の堅さを呪った... それが動力になるのか

諦めるのはまだ早い...

私のクルクル回ってるベッドが太陽...ってことは、 UFOが動いて

いう即席の既成事実が必要なわけだな?道筋というか... なるほどっ エネルギーってわけか?」 !!宇宙科学は凄いなっ!!人間の行動によって生まれる何らかの 「つまり...つまりだっ!!ベッドがクルクル回転しているから、と

宇宙人は深く頷いた..。

ューズシキヲオモイエガイトッタンヤケドナ?ドヤ?」 ンレンノジケンヲオコシマクッテ、アンサンハ、トンデニゲルッチ ソウデスネン。ワカリハリマシタカ?ワテトシテハ、アンサンカ

ドヤ?って言われてもな...

どっちでも良いんだと最初に言ったじゃないか... 私だって羨望を受けたいに決まっ てる

私は空を飛び回り、 皆に夢を与えたい!!」

すると、宇宙人がまた、 深く頷いた..。

「ジャア、 アンサンニヒー ローニナッテモライマショウカネ...」

その後、私は宇宙人と私の演じるヒーロー伝について、 のだった.. 練り上げた

# to be hero

これは、 あくまでも演技だからな?デコポン。

だ。 その結果、 タッちゃんと来たら、宇宙人に対して一歩も譲らなかったとか... まぁヒーローには私が良いのではないかと提案したそう

と俺らの絆が試されるわけだ。 「しかし、 実弾をデコポンの心臓に打ち込むわけだから... 宇宙人共

場所はタッちゃんの部屋。 で埋め尽くされた シェパーディブオブプー ドルのポスター

私がヒー ビーボー ローになる為に計画を練っていた。 イらしからぬアイドルグッズだらけの部屋で私達は、 させ、

タッちゃん...でも、 実弾って大丈夫かな?宇宙人だよ?」

タッちゃんは満面の笑顔でそれに応えた。

?そこは完璧に大丈夫だ。 「おいおい...失敗したら、 それより、 俺がデコポンを殺したことになるんだぜ デコポンの心臓を撃ち抜ける

かどうかなんだよ。

だ、 だよな..

タッちゃんはホーミーだもんな...

ゃないか? W」 な なんだよ。 タッちゃん。 ゎ 私を撃つことが楽しいみたいじ

ホーミー 同士の冗談ってやつだな。もちろん、冗談だ

為だ。 「おもしれー 俺は歴史的なこの瞬間にヘビーな答えが待ってる気がするよ のは、 おもしれーけど、 それも俺らと宇宙人との絆の

:

それを落ち着かせることで一杯だった...タッちゃんの話は頼もしく、私の心は興奮し、

だね?タッちゃんはスゲーな?」

私達は夜通し、復活祭の計画を話し続けた...

タッちゃんの配役によれば、 を見せれば、 確実にうまくいくらしい... 舘海と私を発見した小学生にこのショ

び回ってればよ?自ずと注目されるんだからさ。 なわけよ...」 「だいたい、 細かい根回しは要らないんだよな。 デコポンが空を飛 要は俺の拳銃捌き

タッちゃ タッちゃ ことらしい... ・ん曰く、 んは珍しく緊張していた... これは集大成であり、 油断ならない始まりだって

ンは実弾を心臓にぶち込まれるわけだからな...デコポン?心から、 l i f e l i f e g o e s go e s o n だ。 onなんて言いたかないが、まず、デコポ

# 私とタッちゃんは

静まりかえり、 互いの右腕を斜めに押し当て、 絆を確かめ合った...。

ちかけていたとしても、 「良いんだ...タッちゃん。 歴史的な...へ、ヘビーな答えが待ってるよ 仮に宇宙人が単なる遊びでこの計画を持

タッちゃんは深く頷いた...

私の伝説が始まるなんて夢にも思わなかったが、 やれる気がする... タッちゃんとなら

のな?」 「ほら、 デコポン。 これやるよ。 SOPのハンドタオルだ。 俺愛用

タッちゃん...

タッちゃんから手渡されたハンドタオルには、 で書かれてあり、 桃色のタオル生地と見事にマッチしていた。 『S?P』と赤文字

「サンキュー だよ!タッちゃん! ・絶対大事にするよ!!そして、

絶対成功させようね?」

私達は計画の成就を予感せざるを得なかった...

った:。 少なからず、 あの時の私は浮かれすぎていたのか、 疑うこともなか

`当たるようにしてくれるさ...」

道を描くだろうと、結論づけた... 結局タッちゃんは宇宙人が巧い具合に私の心臓を打ち抜くような弾

らしめたいわけだからな...」 「当たって当たり前、 要は無敵のデコポン、 不死身のデコポンを知

タッちゃんはとても残念そうだった...

たんだけどな。 タッちゃん...私としてはタッちゃんがヒーローになるべきだと思 私も生半可に空が飛べるから...」

借りずに成り上がりたかった... ヒーローになりたかったよ...」 な真剣に、それでいて紳士的に思慮していたし、宇宙人の手なんか 「伝わってしまったか...俺はSOPに相応しい男になりたいと日が

タッちゃん...

私のヒー ローなんて名ばかりの... でも... 豊かなエネルギーを生み出す

私はエネルギーを生み出す...

ど...私なら...タッちゃ タッちゃん! ! お、 んだっているし、 オレやるよ!!お... 可笑しいかもしれないけ 宇宙科学だって凄いだろ?」

タッちゃんは親指をグッと立て、 私も親指をグッと立て返した...

無敵のデコポン

不死身のデコポン

それがヒーローの条件。 私は止まらない優越感を野性で誤魔化して

誰だってそうだ

ヒーローになりたいに決まってる...

始まる...私の復活祭が

### ポップインフレ

動物の力ではどうしようもないことを、さも当たり前のようにこな 宇宙科学ほどではないにせよ、我らが高度文明は素晴らしい...

してきたのだから..

我々人類も捨てたものではない。

木陰が巨大建築物となり...

馬が自動車となり...か?

素晴らしい..

そして、それに課せられる重圧もまた...

素晴らしい...

翌朝、復活祭へ向け心の準備をしていた。私はクルクル回転するベッドの傍らで眠り

へっちゃらだ。へっちゃらすぎる。

「ちゃんちゃらおかしくて、臍で茶を沸かせるよ!!」

自分への叱咤激励は何というか...言い得て妙だった。

当たらないように) カーテンを開けた... 私は居ても立っても居られず、床から跳ね起き(もちろんベッドに

「えっ?あれ?」

ザーッザーッと雨が...寝静まる町並みをつつくように

154

b

0

0 0 m b o o o m

それを見計らっ たかのようにタッちゃ んからのメール

生の前で撃たれるのが最大のポイントだ??』 『デコポン。雨天決行だが、忘れるなよ?舘海と第一発見者の小学

だ、だよな...

相変わらずタッちゃんは冷静だ...

私はカーテンを閉め、床についた...

雨天決行だって... 舘海や例の小学生は現れるのだろうか?

「いや、何度だってやってやる!!」

微睡みに更けていくのだった私は夢に入るドアを見つけたかのように

「よく見てろよ?」

パアンツ!!

タッちゃんの掛け声と共に銃弾は私の心臓を貫いた。

激痛だった...一瞬だけ激痛が走ったが

世界中の物好きに分け与えでもしたかのように痛みは消え去った...

タッちゃんの予想通り、 宇宙人がうまくやってくれたみたいだ...

:. 明け方

早々と目が覚めた私は

私を呼ぶドアベルで体を起こしたのだった...

ドアを開けた先には、舘海と例の小学生...

名前を俊哉君と言うらしい...が、 タッちゃんと共に立っていた...

舘海が私に握手を求めてきた

雨も強降りの中

こんなんで良いのか...

ったよ!!」 デコポン! !この奇跡に立ち会えるなんて俺素潜りやってて良か

色白なのにオーラは色黒...そんなイメージの舘海...

良すぎるよ!!スナック菓子持ってきたから! で済むよね?」 「お兄ちゃんって不死身なの?空は飛べるし、 !これで緊張しない 不死身だなんて格好

哉君はテカテカのホッペに抑えきれない躍動感を蓄えているかのよ うに... 太っていた 小学生にしてはデカい五十寸とちょっとはあるだろう。 小太りの俊

ありがとう! !二人とも!!タッちゃんもっ 絶対うまくい

ど冷徹に私の背中を押した 雨足は強くなる一方だったが、 タッちゃんはそれを感じさせないほ

「デコポン。さっさと空を飛べよ。これは遊びじゃない。ミッショ

ンなんだ。

タッちゃん...

ればっ! 厳しさの中にも優しさが見え隠れするタッちゃんの、 激に応えなけ

オーライだよタッちゃんっ!!」

## ナープ&オーバー

空を飛び回り始めた私はギャラリーを見回した...

合わせて3人しかいなかった... 視界は雨のため最悪で、 と言うよりは舘海、 俊哉君、 タッちゃんと

らず、 新しい出会いでもあるものかと、 楽しめていた.. 私の思考は悪条件であるにも関わ

「よく見てろよ?」

パァンッ!!

タッちゃんの持ってる銃はリヴォルヴァ ある小型の銃で、 飛ぶ前に見せてもらったんだが... 一式で、 トロな雰囲気の

当たらないだろうと言う、 抑揚させたのも言うまでもない。 何の根拠もない自信が私を、 私の気分を

のだが、案の定見事に命中...

仰向けにアー していた チを描いた私の遺体は宙に浮いたまま、 多量の出血を

わぁっ タッちゃ ん ! !それホンモノじゃ んか!?何してんだ

れ 俊哉君は戦慄き、 転んだ.. 周りを走り回ったが、 ぬかるんだ地面に足を奪わ

が起きるんだ。 「俊哉っ !タッちゃんを...デコポンを信じろっ!!これから奇跡

何を思ったか

すっ転んだ俊哉君を抱きかかえ、 舘海が語った。

舘海が想定したであろう奇跡は起きなかった...

宙に浮いたままの私の体は浮力を無くし、 地面に叩きつけられた...

「う、うぉーっ!デコポぉン!!」

タッちゃんだ..

地面に足を奪われ、 銃を投げ捨て、私に向かい駆け込んできたタッちゃんもぬかるんだ すっ転んだ..

「ち、チクショーっ!!デコポぉン!!」

タッちゃんはへたれ込み、空を見上げ叫んだ。

術なかった.. うなだれる3人...もはや、 宇宙科学に翻弄され果てた3人には為す

怖かったんだ...宇宙人相手にはコレしかないだろ... コレしか...」

緊張の糸が切れたように泣いていたタッちゃんは

雨足は一向に修まる気配はない。

私はどうなってしまったのだろうか

#### タイムオーバー

銃声をあざとくも聞きつけた住民が通報したらしい... 幽体離脱というやつだろうか?

私の目線は空を飛んでいるときと同じで

見下ろすように、復活祭の後を見ていた

タッちゃんが警察に連行された...

廃校が全焼した一件で疑いはかけられていたものの

タッちゃんの人脈がそれを許さなかった...

このままでは余罪まで着せられかねない...

タッちゃん..

おそらく病院へ…連れて行かれた血塗れで倒れる私の体は救急車に乗せられ

宇宙人にやられた。と言えば病院も取り合ってくれるはず。

カーニバルがやってたじゃないか?

…タッちゃん

どんな正義だろうと

人の気持ちが入らない世界なんて...

私は興味が持てない...

タッちゃんは悪くないんだ...

私が甦れば、 タッちゃんは無問題で解放される...

サイコなマーダーはホーミーじゃない...

あの草臥れた体に戻るべきなのか?

宇宙人は何を考えているのか?

雨足は治まる気配もなく、 救急車の赤いランプを頼りに私はフワフ

ワと後を追いかけていた..

しめやかに葬儀が行われていた...私は死んでしまったようだ...

運ばれた病院で、医者がタッちゃんを見るなり、

コレはダメですね...」

と即答した..

タッちゃんは泣き崩れ、 何も言わなかったが、 私にはわかる...

捉えざるを得ない 力がある(つまり、 タッちゃんがこの辺りを仕切っていた点からも、 医者は宇宙人など信じていなかったわけだ)と 嘘を真実に変える

タッちゃんは私を高層ビルの屋上で銃殺し、 地面に突き落とした。

という現実を突きつけられたのだった...

タッちゃんが悪い訳じゃないけど...

何故だか、 タッちゃんが選んだ道に見えてしまう...

の医者の舌を食いちぎってでも取り下げさせてやるっ タッちゃん! !ありえねぇー !俺だったらこんな仕打ち、 そ

カルテが診察室に乗り込んできてから、 話はややこしくなっていた...

を作ったみたいになっちまうじゃないか?だろっ?!」 「こんな馬鹿げた話が通っちまったら、 俺らがあの

しどろもどろするタッちゃんを余所に、 医者はカルテを窘めた

さえあるのだよ?」 ないほど...よほど高い場所から落ちたと見られる...死体遺棄の疑い 「 君... このカルテを見たまえ... 死因である胸の銃痕など気にもなら

カルテは押し黙った...

空が飛べるんだよ。 カーニバルみたいにさ。デコポンはさ。

カードが後ろから出てきた...

はあるが、 しくなりそうだ!!君たち出ていってくれ!!」 「空?止してくれ...私もね?直に回転するベッドを見せられたこと 人間界が管轄する問題ではないんだよ?あーっ頭がおか

カーニバルはこうなることがわかっていたのか、 現れなかった...

私はどうなってしまったのだろうか...

私が死んでから、二年がたった...

幽体のまま、二年間さまよい続けた..。

町の人々に助けを求めていたのが、 ーヶ月くらいか..

何を境にかは忘れたが、 願いは暴言に変わった..

しかし、 何を喚いてもきっと寒気を催す程度で、 変わり映えはしな

女風呂を覗いたり...

原発の様子を見たり...

売れ筋バンドのライブの裏側にも行った...

寒気がしたんだろう...

私は二年間、死ぬ思いで死んでいた...

カルテやカードだって...

もちろん、

タッちゃんの様子も見に行ったし

カーニバルだけ所在が掴めなかったけど...

二年たったんだ...

遭ってるし...何故、 「宇宙人の話なんて誰も信じない...タッちゃんは刑務所で酷い目に 私の意識はまだ存在するんだ?」

元に戻る体はもう無く、 私は何度も寺院や教会を訪れたが...

恐らく寒気がしたんだろう...

嚔をされた..

宇宙人と関わったからか?葬儀では癒されない霊体とでも言うのか?

かけたのか?体よく私を葬り去るための口実だったのではないか?」 「辛い...辛い...辛い...宇宙人は本当にタッちゃんにあの計画を持ち

最後にはタッちゃんまで疑う始末...

カルテやカードは、まだまだタッちゃんをリスペクトしてるのに...

私はどうなってしまったのだろうか...

カルテやカードのように、タッちゃんを支持したい...

カーニバルを探すしかない...

ッちゃんが好きだったからだろうか? 二年間何故か、 カーニバルを探そうとしなかったのは、 やっぱりタ

ッちゃんはカーニバルが裏で、 タッちゃんはカーニバルをホーミーだとは思っていなかったし、タ まってる... 何をやってるんだ?と思ってたに決

宇宙人と同等の力を手に入れた男だから...

そのサンクチュアリは大切にしたかった...

いろんな意味で考えざるを得なかった...

ェリーショップとか カーニバルが行きそうな場所…行きつけの美容室とか男物のランジ

虱潰しに..

他の仲間には二年間も付きまとってたのに...

どういうわけか カーニバルに至っては、 二時間で済ませたかった...のに

見つからない...

二年という時間の重みが体中を締め付ける...

「カァーニバール!!どこに行ったぁー...!

たまらなくなって、私は叫んだ...

タッちゃんだって歩み寄ろうとしてた...カーニバル...カーニバルはホーミーなんだ...

すると、 空から光が降り注いだ...

地震を感知する電気ナマズなのか? 私は魔法使いなのか?

そんな気分で、恐らくはUFOだが、 の箱船に選ばれた生命体のように、信じられないほどの満悦の笑み 今の私には救いの箱船...ノア

で吸い込まれていった..

カーニバルめ... 寂しがり屋か?... フフフッ」

# 著聞を糧に越する男

UFOに吸い込まれた先には、 タッちゃんがいた...

満悦の矛先が些か...狂っていたせいもあるだろうが...直立で立って いる嬉しさよりも不動な自分を嘆きたかった

タッちゃん?タッちゃんがどうしてここへ?」

タッちゃんはニヤリと笑い。 になった... モコモコと体を変容させ、カーニバル

?現状は把握できてるか?」 探してたのは俺だろ?デコポン?先入観はよくないぜ?デコポン

煮え切らない怒りがカーニバルへ起きたが、 ものだけに、 平常心を保てた。 如何せん煮え切らない

て死んだのかと思ってたよ?ハハハッ」 カーニバル...あれ以来姿を見せないから、 悪魔にとり殺され

すると、 宇宙人となった... カーニバルはまた体をモコモコさせ、 体を変容させ、 例の

テンガイコドクノミデアッタカラ、 「ゴメイトウ...カーニバルハアクマニオチタアトクサッテシンダ... ジケンニスラナラナカッタガ..

ジュウイチニンノニンゲンヲコロスコトデテニイレタワレワレトド ウトウノチカラ...ヤツニハツカイコナセナカッタヨウダ...。

か、カーニバルが殺したのか...ジュウイチニン...?

のの11人の焼死体は..

夕 : 。 イトフンデイタガ、 ヤツハタチカワヲタテニ、 、ショブンヲタチカワノチカラヲカリオコナッタワケダ...」 ケイサツハレンゾクサツジントハトラエキレズ、 ヤツニウタガイハカカラナカッタ... ヒトリマタヒトリトサツジンヲオカシ ソシテ、 ユクエフメ

そ、
そ
かか
な…

タッちゃん達... あの同窓会の四次会でそんなことがあってたなんて...

ダーには及ぶわけがない!タッちゃんだってあんな風に言ってるけ 「う...嘘だっ!!カーニバルだって不器用なだけで、 認めてたに決まってる...」 サイコなマー

宇宙人はどこか不思議そうな顔で私を見ていた...

カシ、 テキダ…」 「オマエガドウオモオウトカッテダガ、 オマエヲフッカツサセルノガコノケイカクノサイシュウモク キヅクノガオソスギタ...シ

な 何を言ってるんだ...

私はとても深い意味で我にかえった...

今更甦ってどうする?

二年だぞ?

葬儀も行われたし

タッちゃんなんか刑務所で酷い目に遭いすぎて...くっ

舘海は素潜りの世界ランクに登録し出すし

俊哉君は不登校続き...

カルテはキャバクラの呼び込み

カードはネット詐欺...

この世に未練はないよ...私はこの世に未練はない...」

宇宙人は相変わらず不思議そうな顔で私を見ていた...

「イヤ、 チガウ。キヅクノガオソスギタンダ...ヨミガエルンダー!」

#### カルテの愚痴

甦った...と言うべきか...呆気ないと言うべきか...

私はネオン街の道の真ん中で素っ裸で倒れていた...

そして、生まれたての赤ん坊のように、 何やら粘膜を全身に帯びて

いた

さすがネオン街...

クスクス笑う人は居れど、 いなかった.. 慌てふためいたり発狂するような人間は

お、おまえ...デコポンじゃないか?」

カルテだ...

メンソーレラブと書かれた派手な黄色のハッピを着ているが、 わらずのもじゃ毛は...相変わらずだった 相変

あぁ...甦ったんだ...」

カルテは発狂した

見だぜ?宇宙人の存在が公的に認知されるんだぜ?デコポン?カー は無罪だろ?サイコなマーダーなんて、タッちゃんじゃないよ...カ タッちゃんの手柄か…って手柄…か?とにかく…あー…タッちゃん ニバルの居所は知ってるんだろ?」 -二バルを探し出して、警察に突き出してやれば...おいおいっ大発 !カーニバルの手柄をぶんどる気なんだよ...って死刑になったら、

明もややこしい...タッちゃんはやっぱり11 湯水のようにカルテが話通したが...話はややこしいカーニバルの説 るみたいだし... 人殺したことになって

カーニバルは死んだよ...宇宙人から聞いた...」

カルテはヘナヘナと腰が抜けたように座り込んでしまった...

ルの力は知ってるだろ?!」 っ な 何が死んだだよ!!タッちゃんどうすんだよっ! !カーニバ

うなだれる私の背後から声が聞こえる

おH !さぼってんなよ?ちゃんと呼び込めや?!

どうやら、 メンソーレラブでのカルテの上司のようだ...

あっすみませんっ!!もうっデコポン。 話は後だ。 じゃあな...」

際の台詞:: 二度と会うことはないだろう。と言う風にも聞こえるカルテの別れ

私は安易に言葉を信じることにした

#### カードの期待

服..服を着ないと..

一人暮らしな私だが、 家族はある...既に死んで二年...

ある程度のサイクルが持ち治った頃か...

粘膜塗れの体を引きずりながら、ネオン街を見渡した...

/2?カードが働く会社が近くにあるな...

腐乱死体のような私は、 を感じるに至っていた... すでに怖いものはなく、 ネオン街の暖かみ

「あった…」

カードが働く、 あまり評判の良くないネット企業..

『チーフ』

出会い系からクレジットカードの制作まで

幅広くやっているらしいが...

ネット詐欺の汚名は付きまとう...らしい

私も幽体の頃はよく眺めていた...

ドがクルクル回ってるからね...」 「ダメだ...やっぱり止そう...私の家はまだあるかもしれない...ベッ

二年の時間はすべてを億劫にしていた...

勝手にうなだれた私は思いだしたように空を飛んだ...

あっ...もしかしてデコポン?」

カードの会社はビルの九階、 ドが頭からつま先までぴっちりした格好で顔を出した... その窓から待ちかまえていたようにカ

相まって、 ブラウンのスーツに真っ赤な色眼鏡が、 インテリ...かと思わせた... ネット詐欺と言う世間体と

: か、 カードじゃないか?黄泉の国から戻ったよ?しかし、

御覧の通りさ...何か服はないか?」

ニッコリとカードが笑い... 社内に入っていった...

うちの会社のTシャツと短パン...コレで良い?」

Tシャツをピンッと張り、私に見せてくれた...

の短パン 筆記体で胸元に" chief" と書かれた紺色のTシャツ...と紺色

かるよ...」 「うーん...突っ込みどころがないなぁ...でも、 ありがとう...逆に助

(^ -^)ノンカードは私に笑顔を絶やさず、手を振っていた

感じがした.. 空中で粘膜の上から着るTシャツと短パンは...カルテのときと同じ

また来るからな?」

「うん、 もあるんだけど?」 わかってるよ?デコポンも... 頑張って... デコポン... タオル

私はタオルも貰い 向かった... 夜の空をヨタヨタと飛んで、 あのクルクル回るベッドのある部屋へ

### カミカゼの隠匿

なんとか家までたどり着いたが...

そこには思いも寄らない客人が待っていた...

スキンヘッドに一本線のもみあげ...カミカゼだ

思わせた... 真っ黒なつなぎのビニールスーツを着ていたせいか最初、生首かと

いつもこの時間までデコポンを待ってたよ...」

そうなんだ... 幽体の頃、 唯一避けていたのは私自身の家だったのだ...

至っていた... 何故かクルクル回るベッドへの異常なまでの恐怖心からか、忘却に

それに伴い...カミカゼも忘れてたってことだろうか?

カミカゼ...

私達のホーミーだったっけ?」 た。そんなことはないんだが、 「…カミカゼ?変なことが起きた…私はカミカゼのことを忘れてい ふと気になった... おまえはいつから

やっときましたか?デコポンさん。 カミカゼがニヤニヤし始めた。 と言わんばかりの表情だった

初めからデコポン、 「フフフッ...思い出したみたいだなデコポン。 んについたのは、 カルテ、カード、 ここ最近の話さ...」 カーニバルだよ...私がタッち タッちゃんの幹部は

やっぱりだ...

カミカゼだけおかしい...

すべてタッちゃんより、早く優れた答えを出していた... タッちゃんはスポークスマンだと言っていたが...

本当にそうなのか?

動かしていたのも私だ...デコポン...ホーミーとは狭苦しい集まりだ 「デコポンが幽体だったとき、二年の時間を費やさせるように町を

そんなまさか... 幽体だったときだって...

$\boldsymbol{\tau}$
/J
_
=
カ ゼ
/J
ニュン しょうしょう しょうしょう しょうしょう しょうしょ しょうしょ しょくしゅん しゅうしゅ しゅうしゅ しゅうしゅう しゅう
1/
. –
•
•
おまえはい
മ
<u> </u>
Ŧ
0
⇒
Æ
: -
1+
IO
1 1
LΙ
·
つ
_
+_
t-
た
たい
たい
/—
たい何
/—
/—
何者
/—
何者
何者
何者

た悪魔になった... カミカゼはモコモコと体を変容させ、 あのカーニバルがなって見せ

が...宇宙人と同等の力を持っている...そして使いこなしていた...デ コポン...二年の間、 「私が完全体...カーニバルが失敗作だよ...半宇宙人と界隈では呼ぶ 私は生き残る道はないかと模索していたよ...」

半宇宙人...

いや、それより何なんだ?生き残る道とは...

「カミカゼ...言いたいことはわかる...そして完全体なことも... だのに何故生き残る道などと言うんだ?」

カミカゼは私の住んでいたアパー トを見上げ、 また私の方を向いた。

言う記述もないんだ...それだけで十分だろ?デコポン...お前が私に な歴史にも宇宙人の存在は確認されないけど、 かかった呪いを解いたみたいだ...カーニバルみたいに...」 「終わったんだよ...タッちゃんは宇宙人に逆らいすぎたんだ...どん 宇宙人に逆らったと

それよりも目の前にある肉の塊はおそらく...カミカゼだろうか?

## カーニバルの最期

私は無気力のまま、部屋にたどり着いた...

た : ドアノブをさわると、スタンガンほどの電流が勢いよく体中に流れ

気絶しかけたが...何とか持ち直した。

「こんな酷い静電気くらうなんて...ううっ...」

ガチャッ...

ドアが独りでに開いた..

もはや、宇宙人のものってわけだ...

私は躊躇なく、部屋に入った..

部屋に入ると二年前と全く変わらぬ部屋があり、 クルクル回っていた ベッドも変わらず

ザーッ

テレビがつきっぱなしだ...

砂嵐が映ってる...

「か、カーニバルお前…何だこれは?」

砂嵐から突如、廃校らしき映像に切り替わった...

タッちゃんが何かを見て驚いている

この死体の山はカーニバルが一人でやったんだぜ?」 タッちゃん。 カミカゼはまだしも、 俺やカードより情報遅いぜ?

カルテが自慢げにタッちゃんに説明していた...

が宇宙人にでもなってさ。 「タッちゃん仕方ないよ?ハッタリも底をついたんだ。 力つけなきゃ...さ?」 カーニバル

ハードもタッちゃんを宥め始めた

ば 馬鹿言うな!!マー ダーだろ?コレは?しかもかなり名のあ

を瞑り、 カーニバルはお手上げだ。 首を横に振った.. と言わんばかりに両の手を軽く挙げ、 目

のある奴らとは言え、コバンザメみたいなもんさ...タッちゃんと言 「ハッタリは底をついたが、 まぁ... 実力は元からあったんだよ... 名

うクジラに張り付いてたに過ぎないね...」

タッちゃんは、 カーニバルには何も言わなかった...

ダサいわ...」 火いつけるよ?それなら、 こいつらの死がバレた方がタッちゃん

カミカゼがライター に火をつけた...

ザーッ

また砂嵐だ..

れてんの。 今な?宇宙人に捕まって、ラストレター なるビデオレター を作らさ 「やぁ...デコポン...こんな醜い格好で御免よ?俺さ。カーニバルさ。

私の方を直視した形で座らされている...

『景はあのUFO内のようだ...

ポンはあの夜来なかったしな...わかってたんだろ?タッちゃん以外 うぜ?俺がやった11人の人間も... これで浮かばれるんだろ?デコ には教えといたはずだぜ?宇宙人っつって信じられなかったんじゃ 条件があったんだよな...デコポン... ないか?ハハハッ...デコポンらしい...なっ...」 「宇宙人との契約の中に悪魔になったら、 お前って奴は...まったく調子狂 腐った肉の塊になるって

フシューッ:

カーニバルはどうやら、本当に死んだらしい...

明るみにもでない。 闇の中の闇の取引..

兔 私がタッちゃんに会いに面会に行っただけで、 釈放された.. タッちゃんは無罪放

「あっ...ううぅっ... デコポンありが... とう... 助かった...ううぅっ...

夢かなぁ?」

変わり果てたタッちゃんを直視できなかった私...

最近気づいたんだ..

大切なものって最初からわかるものじゃないって...

でも、 ってても見つからないんだって思った...。 だからって最初っから大切なものって後からわかるなんて言

愛おしくも短い時間の中で...私だけが生き残ったのか...

タッちゃんつ!今度SOPのコンサー ト行こうよ?」

タッちゃんは顔がとろけたみたいに笑顔になった...

デコポン... ありがとう...」

あんなに頼もしかったタッちゃんが何だか弱々しく見えた...

でも、やっぱり頼もしいのかもな...

んだ…宇宙人に生き返らせてもらったけどね」 「タッちゃん...これからどうしようかな?私なんて二年も死んでた

タッちゃんはいきなり、 私から離れうずくまって震え始めた...

ううぅっ...宇宙人は...いません...この世には...いません...」

私はたまらず、空を飛んだ..

「ほら、 タッちゃん?宇宙人と仲良くなるべきだよ?」

右手をピストルみたいにして、 それを見るなり、 て撃ち始めた... タッちゃんは顔を真っ赤にし、立ち上がった 左手で右手を握り込み、私に向かっ

がいなければ、三発は要ったな?フハハッ...」 「バァンッ!!バキューンッ!!バキュー ンッ... デコポン... 宇宙人

私はそのまま飛び去りたかったが、タッちゃんの前に降りたった...

**!タッちゃん。** 私は復活したんだ!!」

タッちゃんはとろけたみたいに笑ってくれた...

## 型遅れの命

けど... ホルマリン漬けになったようなもんだ...」 タッ ちゃんは施設に入った... 国の管轄だから安心と言えば安心だ

何というか、 とでた: 「 呟 く」 と言うよりは「嘆く」ような独り言がポツリ

タッちゃんは国営のリハビリテーション学院なる施設に、 にと言うらしく、 まるで私から引き離されるように連れて行かれた... 国が是非

私はすっかり、 空を飛ぶことが日課になっている...

ただ、生き残った使命感がそうさせていた。自慢とか優越感とか、そんなんではない...

「空なんか飛べたって...もう俊哉君も驚いちゃくれないよな...」

定期的に宇宙人に拐かされるが、その度に

ソラヲトブナ!!

と怒られる...

ᅃ
せ
$\dot{\lambda}$
Ά,
<i>h</i>
45
<del>/</del>
タ
ツ
+
ちゃ
P
hi
1+
ĬΫ
宇
雷
Η
Ņ
か
Ē
<u>ب</u>
も認め
認
<i>X</i>
כט
5
ħ.
られて
٠.
l I
る
<b>බ</b>
עט
か
لر
かと::

タッちゃんみたいに地に足を着けた地球人というか... 悪魔になって死んでいったカミカゼやカーニバルへのリスペクトと

ジレンマは感じずには居れない...

そんな憂鬱な私の前に、 何とやらなゲストが現れた...

し、俊哉君...」

あの俊哉君が現れた

「デコポンっ!この町はもうダメだ!!」

デコポンはニックネームだし、ホーミーだとは思うけど...

私は俊哉君にムッとしていた...

## to be continue

いっそ俊哉君を叩き落としてやろうかと思うほど、 私の無念は増大

じ質問をしてるんだ...今まで沈黙を保っていた宇宙人が何故なんだ 「デコポンっ! !宇宙人が町の人間すべてにデコポンにしたのと同

同じ質問って何だ?

前置きにデコポンにしたのと同じ質問とでも言ったのか?

...で?どんな質問なんだい?」

多分、空を飛んでいる俊哉君を見る限り

たいか。 「馬鹿だな。 カードになりたいか。。 デコポン。質問と言ったら質問だよ。 カーニバルになりたいか。だよ。 デコポンになり

三択は三択だけど何か違うな...

僕はデコポンになりたかったから、 デコポンって言ったのさ...」

俊哉君..

私は俊哉君を誤解していたみたいだ...

宇宙人も趣向を凝らしてるんだな...

いっぱい...カードになった人達は...目を...目を抉った...」 でも…カーニバルを選んだ町の人達が…腐って死んじゃったんだ

カーニバルを選んだら、 宇宙人となり

私は知らなかったが、 カードを選んだら見たいものを見る力が手に

入るのか...

それよりも... 宇宙人はこの町をどうする気なんだ...

たんだい?」 「 そんな... 俊也君。 それじゃデコポン...私を選んだ人間はどうなっ

**後ろを指した** 俊也君が親指を立て

後ろを指した

「打倒宇宙人...それがデコポン派さ...」

打倒宇宙人を掲げる戦士達が空に浮かび上がってきた 士気を帯びているであろう...最早戦士と呼んでいいだろうか?

勢い立つデコポン派の戦士達に対し、 空から光線が乱発した..

「うぎゃーっ!」

゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ · つ!

ポン派の戦士達がすべて討ち滅ぼされた... 光線は戦士達に被弾し、蒸発させた。 100人はいたであろうデコ

私達の滞空地点より、更に上空から宇宙人が言い放った...

デコポン派が...殲滅した...」 「で、デコポン派が...空が飛べれば宇宙人に勝てると豪語していた

小学生だというのに、 一丁前の軍師のように落胆する俊哉君...

私よりも高齢な士気を持っていたんだな...

ることは許されないことなんだよ?素晴らしい教訓じゃないか?」 「良いんだ...俊哉君...これで良いんだ...誰に憧れようと人智を逸す

俊哉君はがっかりした顔で私を見た...

「それは宇宙人を油断させる為の演技ですか?デコポン... 宇宙人が 一人、二人油断したって、船内にはたくさんの宇宙人がいたんだか

ら...実力で勝つしかないんだよ...」

俊哉君...君って奴は.

から、命は大切にすべきだよ...少なからず...宇宙人から与えられた 力で宇宙人に勝てるだろうか?」 「俊哉君..私からはもう云うことはないが... 俊哉君もまだ若いんだ

俊哉君はムスッとした

... 売星奴だとか... 酷い言われ方されて... 宇宙人が憎くなったんだも ん...うぅっ...」 「だって...友達に飛んで見せたら、宇宙人の奴隷のお出ましだとか

泣き出した俊哉君を目の当たりした私...

俊哉君は私に憧れたせいで虐められたのか...

許せんつ!!俊哉君のお友達はなんて奴等なんだ!!」

俊哉君は泣きながら首を横に振っていたが...

私には何が何やらわからなかった...

空を飛ぶことはとても素晴らしいことだ。 の沙汰じゃない。 それを蔑むなんて、 正気

俊哉君..大丈夫。 お友達はきっとわかってくれる...」

から 私は俊哉君の通う学校に行き、 俊哉君のクラスに入っていった...窓

やぁ、 俊哉君のお友達っ?私はデコポンだよ?」

唖然とするお友達だったが...

気のせいかやけにでかい上に何というか... 異国情緒漂うというか...

は外国から来たから、生活年齢が俊哉と違っても仕方ない...」 「俊哉の仲間か?俊哉は太刀川さんを裏切ったから仕方ない...私達

み 身の丈60寸を優に越える黒人の男が私の首根っこをヒョイッと掴 持ち上げた...。

わっ... ちょっ... ちょっと...」

私は窓から放り出された...

「私達も良い大人だから、 俊哉のことは私達に任せればいい...ビバ

スーパーマン」

そのまま黒人は窓を閉めた...

もう少し話を聞いておけば良かった 俊哉君は特殊な学校に通っているんだな...

私はまた、 無心に空を飛び、 心に開いた穴を塞いでいくのであった

最近、 自負ではあるが鳥と話せるようになった...

ような気がする...

がなくなってしまったようだ... 空を飛ぶことばかりがすべてではないが、 私は空を飛ぶことしか脳

よいことさ。デコポン。 空は君を歓迎しているよ」

と隣を飛び去る鳶が話しかけたような気がした...

俊哉君が何故首を横に振っていたのかが、 情けないタイミングで閃

り難迷惑、 傷口に塩を塗るようなもんだ... 俊哉君には悪いことをしたな... 有 ノーサンキューってやつか...」

俊哉君の安否を気にしながらも、 どこか違う場所。 新たな始まりを

求めて私は空を漂っていた...

こんなときUFOに拐かされないかな...

今ならわかる。 タッちゃ んが日頃使いもしないような臭い言葉。 "

l i f e g O e s 0 "n なんて使っていたかを...

私だってカードみたいに見たいものが見たいし カーニバルやカミカゼみたいに宇宙科学を使いこなしたかった...

になってきた...」 も飛べないんじゃ...だいたいあの状態でどうやって断ったんだ?気 「ん?いや、待てよ。 しかし、 そうなってくると... カルテの奴は空

私はやっかみついでに、 とにした.. カルテの勤めるメンソーレラブに向かうこ

越えられるはずの小さな壁を最大の理由にして、 私の正義感や理想など語るまでもなく、 回っていたにすぎない... 空を好き勝手飛び

「それでいい...いや、それじゃなくちゃ困るよ...」

何羽もの雀が私にそんな風に語りかけてきた

... ような気がした

「...カルテのやつ、 タッちゃんみたいになりたいんだろうか?フフ

フッ:..」

## 軽蔑していた

私はほろ酔い気分ででもあるかのように、 ネオン街に降りたった...

が勤める?キャバクラ「メンソーレラブ」に行く気力はあった... カードの勤める会社「チーフ」に行く気力はないが、 カルテのやつ

ですよーっ! 「いらっしゃ いませーっ‐ !是非是非、 メンソーレラブにお越し下さい。 !メンソーレラブの女の子達は粒ぞろ男

相変わらずのもじゃもじゃ毛で...フフフッいたいた...カルテのやつやってるな?

「はぁい?皆さん。 メンソーレラブは最高のキャバクラだよーっ!

!

私がネオン街を飛び回り、 カルテのやつの真似をしてみた...

客引きって奴だ...

カルテのやつキョトントしてるな...

宙人は軽蔑されるに決まってるだろ?まして、 「おっおいっ!!デコポン!降りてこい!!ここは風俗街だぞ?宇 能力者じゃ...」

予想
に
反
U
7
:

ネオン街の人並みもカルテと同じことを物語っていた...

けないだろっ!!こんなの馬鹿げてるっ!!二度と手伝ってやらな いからな?」

「そんなバカな!!タッちゃんがっ!

!タッちゃんがっ!正しいわ

私は身を翻し、 ネオン街を抜けようと高度を上げた...

ヒュンッと何やらものが飛んできた...

•
丆
$\neg$
_
ポポ
/]/
<b>\</b> ,
7
- 1
÷
- 1
÷
<b>ブ</b>
・!!そり
1)
٠,
ゃ
.`
右
Ħ
1)
有り数
群
天比
『り難いぜ?.
VI
开
٣
7
•
丰.
$\overline{\mathcal{O}}$
う
)
_
$\equiv$
度
įΣ
来
小
ス
ح.
たい
· 6
るなっ
つ!!
- 1
•
- 1
. •
_

私の身を掠めたものは...カルテが飲み残した缶コーヒーの缶だった...

が体についたじゃないか?後でベトベトになるだろ?」 危ないだろ?!空き缶を... 少し中身が入ってるからコーヒー

ヒュンッとまた何か飛んできた...靴だ...

私の左太股に命中した...

「風俗なめんなっ!!デコポンの力なんか要らないんだよ!!はっ

一番高いビルより高く飛んだからだ...振り返りもせず、私はネオン街から抜けた...

何が風俗なめんなつー !だ...馬鹿げてる...」

そう...私は二度と来ないつもりでいる...メンソーレラブになど二度

カルテに冷たくされ、 私は空をトボトボと漂うばかりだった...

くせに...なんだなんだ...」 何なんだ?カルテのやつは...自分だって粒ぞろ男とか、 はぜてた

私の思考は陰鬱に堅く、 暗く懐古的に、 逆行催眠を喰らったように

人生の後悔ってやつばかりを強引に引き当てていた...

強い人間だと思われたい... ソサイエティブなスーパーマンになりたい... トラウマを凌駕した外観にとらわれない

゙ はっ!!そうだ…そうだったんだ…」

私は自分が現世にて、スーパーマンと呼ばれていることに気づいた...

度死んだというのに..

て蘇ったんだからな...そうだろ?宇宙人。 「つまりだ...カーニバルもカミカゼも蘇るんじゃないのか?私だっ

私は空から空を見上げ、 宇宙人に尋ねたが...

返事はなかった...

るから封じられたわけか?なんて臆病な…うっ…」 何なんだ... 宇宙人は?カーニバルやカミカゼは宇宙人の驚異とな

意識が半分乗っ取られたような...

意識が乗っ取られたことを認識する意識が半分あるって意味だが...

朦朧とする中、 脳髄に刻まれるような声がした

オマエニオクビョウアツカイサレテハコマル...ナノデ、 セツメイ

タリノハンウチュウジンハ、 ュウカガクヲモッテシテモ、 シテヤロウ。 オマエノシコウハスベテカンシカニアル。 ニクノカタマリトカシタオマエノナカマデモアッ ヨミガエリハシナイ。 ウチュウジントシテシンダノダ。 ソレヲワスレルナ。 ワカッタナ? タフ ウチ

突き放されたように半分の意識が戻ってきた...

私はスーパーマンではなくパーマンだったのだろうか?

頼りない力瘤を作ってみたが...怪力ではない私はパーマンですらな

b 0 0 m

b 0 o m

それは、 誰かからメールが来た.. カードからだった...

火の戦士さ...』 ンドリア細胞にデコポンの意識を繋げている...つまり、 力に目覚めるよ...宇宙人は空を飛ぶ力を与えた際デコポンのミトコ いとは思ったんだけど、デコポンの未来が見えたんだ...デコポンは 『僕が見たいものを見通す力があることは、知ってるよね?済まな デコポンは

Ń

火の戦士さ…って言われても…

『唐突すぎるよ?火の戦士ってなんだよ?』

私は俊哉君の顔が一瞬浮かんで消えたことに気づいた...

火の戦士なら、俊哉君も喜んでくれるかな?

象を起こすのさ... 因みに空が飛べるのは重力を感知する働きがある ことになるね...』 ミトコンドリア細胞が宇宙人の科学力によって騙されているからな んだ…デコポンのミトコンドリア細胞は無重力だと信じ込んでいる

ミトコンドリア細胞に重力を感知する働きがある... のか?

宇宙人がどこから騙しているかは知らないが...

カードに見たいものを見通す力があることに疑いはないようだ...

<sup>®</sup>おっ 火の戦士なんて尚更だよ...』 おいっ! 体を騙して飛んでるってわけか?ヤバ

どんな現実から逃れられたとしても...その変貌からは逃れられない 私はでも、既に普通の人間の生き方とはほど遠いものになっている... .. そんな気がする

る術があるんだ..』 コポンは火の戦士の力に目覚めるだろうけど...たった1%だけ逃れ 『デコポン...僕も特殊な能力を持っているからわかるよ...99%デ

あるのか?

火の戦士から逃れる術ってやつが...

私は必死そのものだった...

『底力に達しないことさ...それしかないよ。 6

底力..か わかるような... わからないような...

私はすでに、火の戦士に一歩また一歩と近づいているような気がし 身震いがしていた..

## 決して真似しない為

俊哉君..私はすでに次の段階に入ってしまったよ...

そんな気持ちで俊哉君に会いに俊哉君の小学校へ向かった...

校門前まで来た私だが、門は閉められていた...

飛び越えたかったが...私はよじ登り、校内へ入ろうとした...

ンテンポ判断を鈍らすことに、 こう言ったとき空を飛べると言う人間を超越した能力がワ まず気付くべきだった...

違うだろ...

おいっ!おまえ何してるんだ?怪しい奴め!!」

がたいの良い竹刀を持った...恐らく体育教師だろうか?

私を発見するなり、噛みついてきた...

言うか...」 俊哉君に会いに来ました...ヒー ローって言うか...相談役って

よじ登り途中の情けないポーズはあまりに説得力に欠けていたが...

問題はそこではなかった...

すから、 「俊哉か?鳥になった俊哉か?あいつはもうすぐ別の場所に引っ越 余計なことはせんでくれ。

な、なんだと?

空が飛べるから...空が飛べるからなのか?

厄介払い?臭いものに蓋?リストラと変わらないじゃないか...

俊哉君に支持者はいないのか?

私は悲しみの中に確かな怒りを覚えた

ばかり抱え込みやがって!! 「許せん!!腐った教師が!!学校経営の為に、年端もない外国人 --俊哉君こそ大切にすべき生徒だろ?!」

よじ登り、掴んでいた門が溶けた...

しまった... まさか

ひっ...ば、 化け物。 エックスメンは日本の話だったのか!」

私は場が悪くなり、飛び去ろうとした...

「これでも喰らえ!!」

教師が投げた竹刀が私の寸前で燃え尽きた...

## 火、水、土、風、雷

なっていた.. 火の戦士の力に目覚めた私は、 次の段階などと俯瞰する余裕もなく

「火の戦士か...やってしまったな...」

私は後悔の念は拭い去れず、ボケッと空を飛んでいた...

カードからメールだ...

気付いたみたいだな。 私が力に目覚めたことに..。

『デコポン...力に目覚めたみたいだね?』

やはりか..

カードの千里眼は誤魔化せなかったみたいだ...

私だって底力には頼りたくなかった...

だが、 仕方ない、 自分の運命だと受け止めるしかない...

あるんだ。宇宙人が飛行能力を与えた人間のうち、デコポンを除い 『そっか...デコポン...火の戦士になったデコポンに伝えたいことが よ?存在し合うだけで互いを否定する係属にあるから...』 後四人戦士がいるんだ...それは、水の戦士、土の戦士、風の戦 雷の戦士なんだ。デコポン...相性によっては争いは避けられな

な、なんだなんだ?

宇宙人が飛行能力を与えた人間は私以外、 消滅したはず...

ば 覚えたての力で使いこなせるかもわからない火の力を一体どうすれ

士の順に相性が良いんだ...逆に言うと戦闘においてデコポンにとっ て苦手な順番と言ってもいいね... | 概には言えないけど...』 『デコポンの為に言うと、 水の戦士、土の戦士、風の戦士、雷の戦

つまり、 仲良くしてないとヤバい奴順ってわけか...

やりにくいな...空を呑気に飛んでたからだろう...ツケが回ってきた

カード...私に苦手意識はないんだよ...』 『なるほど...水の戦士が一番私の能力を抑えてくるんだな...しかし、

b o o o m

そう、すでに私は水の戦士に対しライバル心を燃やしていたからだ...おそらく、カードからの返信だろうが、私はそれを無視した...

## 意外な水の戦士

だいたい、争う意味はあるのか?はて...水の戦士って誰なんだ?

カードからの返信を読むことにした。私は我に返り

ら... しかも... タッちゃんなんだ... 自分ではネクトンBと名乗り始め たけど...すでに水の力を使いこなしてるよ...』 『バカはよせ!水の戦士はデコポンより後に生まれた模倣戦士だか

たつ... タッちゃんが水の戦士?

私は震える指でカードに返信を打っていた	ネクトンBってなんだネクトンAは誰なんだ?	訳が分からない
---------------------	-----------------------	---------

送信した...

『タッちゃん以外は知らない奴らさ...しかし、 宇宙人には関連性が なってやしないか?教えてくれ』

『タッちゃんが?み、水の戦士なのか?他に私の知り合いが戦士に

そうか...タッちゃん以外はまだ見ぬ...なんとやらか...

『わかったよ。とにかくタッちゃんに会いたいな。居所知らないか

3

突如水柱が上がった

これは運命だよな

「タッちゃんだっ!」

猛スピードで飛んでいった...私は水柱の上がる方へ

b o

0 0 m

カードから返信が来たみたいだが...

## 発汗作用の疑い

水柱に近づくにつれて、空気が乾燥していることに気付いた...

大凡、 なるほど... そもそもミトコンドリア細胞の働きによる現象だから... 大気中の水分を集めたってことかな?

)かし、凄い集中力だ...

水柱が徐々に勢いをなくし、姿を消していく...

そこから、人影が現れた...

タッちゃんか...やっぱり」

タッちゃんの姿を見つけるなり、 ホッとする私だったが..

あれは誰だ?」

真っ黒に日焼けした身の丈50寸ほどの老人がタッちゃんに手を翳

「うぎゃーっ!

タッちゃんは頭を抑え倒れ込んだ...

技使いやがって、土の戦士は能力の無効化、 「タッちゃん!水の戦士が土の戦士に適うわけないやい?汗くさい 還元化だってアレほど

言ったじゃないか?」

バタリっと倒れたまま動かなくなったタッちゃん...

奇しくも銭湯屋の前での戦い...

私は恐る恐る タッちゃんと土の戦士の対立する場へ降りていった...

`…タッちゃん!大丈夫か?」

タッちゃんはピクリともしない...

ちゃんは今、ミトコンドリア細胞の使いすぎでダウンしてるがいず れ回復するだろう... 超回復を繰り返すことにより能力を高めている んだよ...汗くさいねぇ...」 「おや?汗くさ戦士の仲間か?さしずめ風ってとこだろうな...タッ

ち タッちゃ んめっ 超回復! ... 自分ばっかり格好付けやがって。

私もなんだか死ぬ気でやる気が出てきた

「フフフッ... 土の戦士だったかな?私は風の戦士ではないっ! !火

の戦士だぁーっ!!」

両の手を前に突きだし、気合いを込めた..。

徐々に熱を帯び始める両の手...

... はて?攻撃はまだかな?」

土の戦士は完全に私を嘗めていた...

「喰らえーっ!!」

来る... これは火が出るぞ!!

「うぎゃーっ!!」

土の戦士は炎を全身に浴び倒れた...

ツ

人が燃えてる ラー・」

炎を喰らった土の戦士の皮膚は爛れ赤黒く変色していた...

「そんな...無効化する力があるんじゃないのか?」

私は怖くなりその場から飛び去った

飛び出した..

自分の犯した罪から只、 只逃れたいが為に...飛び出した...

「仕方ないだろ?水の戦士の次に私と相性が良いわけだから...なぁ

鳥も飛んでいない...焼き鳥にでもされると思ったか?

「はぁ…」

昼下がりの真ん前から来るような...そんな錯覚をした日差しが、 しだけ味方をしてはくれたが... 少

ため息は深く積み重なる雲のように心を戒めていた...

押しつけちゃえばいいさ...人は...人と人とは電撃で繋がってるのさ ..俺は雷の戦士タツ...よろしくな?お前だろ?土の戦士を焼いたの 「よう...浮かない顔して浮いてんね?人には言えない傷跡は...人に

'۔

はだかった金髪のモヒカン頭の... 雷の戦士タツ.. 60寸はないが、 その分タフな体つきで短パン一丁で私の前に立ち

つ戦士よ...」 「お前が言うとおりなら...焼いたのはお前だな...タツ...雷の傷を持

タツは一本とられた。と言わんばかりの表情を浮かべ立ち尽くした...

昼下がりの陽が射し込む方へと私はその脇をするりと飛び抜けた...

## 風の戦士には気をつける

忠告させといてくれ。 な奴に会ってきたが、 い...気をつけろ?」 おいっ!!待て待て…土の戦士のことは良いよ…ひとつだけ 風の戦士だけには気をつけろ?今までいろん あそこまで羨望の眼差しで見てきた奴はいな

タツがわざわざ私を呼び止め、伝えてくれたこと...。

にわかにはわからないことだ...

変な忠告をするな!!短パンマンが!!」

また唖然とするタツ...

私は猛スピードで飛び去った...

余計な考えはないにこしたことはない。

風の戦士だって同じ戦士じゃないか?

羨望の眼差しにせよ。 タツが筋肉質で色白だからだろ...

そうだっ... カードからのメールを見よう

『タッちゃんは今、 は水の戦士にとっては、 銭湯の前で戦闘中さ。 天敵だってのに...タッちゃんも好き者だ 土の戦士こと大宇宙タナ

ちゃ タッちゃんにとっては、 ん苦しんでたよな 土の戦士は弱点になるのか..だよな。 タッ

土の戦士はタナーって言うんだな...

き上致し方ないことだったが... し知りたいんだけど。 『カード...私はそのタナーを燃やしてしまったんだ...ことの成り行 良いかな?』 して、 カード?風の戦士について少

メールを送信した...

ビリビリっと体に電流が走った...

「何が短パンマンだっ?何が!!びっくりして、 一瞬思考停止した

んだぞ?精神健康上全く持って良くない事態だ」

タツが私を追ってきた..

たとき...それは戦いの合図を意味する」 「やってくれたな?タツ... 力を持つ者がその力を力を持つ者に使っ

出す雷人間だろうが... タツもまたミトコンドリア細胞の特殊な働きによって、電気を生み

タナー でわかっ たんだ...

体は生身だとね

おっおい...敵意はないんだよ?軽い冗談じゃないか?」

私は静かに首を横に振った...

そして左手を翳し、

炎を放った

「うぎゃーっ!!」

タツは赤黒く爛れ、 真っ逆さまに墜ちていった...

私は自分が冷血な人間になっていることに気づいていた...

「タツよ?お前の理論が正しければ...傷を負ったのは私だな...」

私はその場から飛び去った...

私はひたすらに、飛び続けた...

こんな自分になりたかったのか?

火の力だって本当は欲しくなかったのに...

こんな自分なんて...

ヒューッ ヒューッ

ヒューッ ヒューッ

突風だ...君?怪我はないか?」

怪我はないが...空中で話せる人間は他に考えられない...

真っ黒なタキシードにシルクハット、 鼻筋から生えてきたようなま

ん丸のサングラス...

身の丈は55寸と言ったとこだろうか?

風の戦士か..

私は反射的に右手に力を込めていた...

「突然の突風だったが...心配ないよ...。 怪我はない...風の戦士だな

風の戦士らしき男は首を横に振った

じゃあ、 「違うよ...君が火の戦士さ...僕が風の戦士である前に風が吹いたの 何だって言うんだ?

さ...鎌鼬だって...多分だけど吹くかもね...」

「うぎゃーっ!!」

明らかに風の戦士じゃないか?薄気味悪い奴だ...

面倒くさい...試してやるよ

「鎌鼬?結構じゃないか?巧い具合に吹くと良いなっ !喰らえっ

私は力を込めていた右手から炎を放った

風の戦士らしき男は火達磨になりながら、

墜ちていった..

墜ちていく風の戦士らしき男に質問を投げかけた。

299

「お前は誰なんだ!!」

ターキーか.

防衛本能の引き起こした過ちだろうが、今はまだ罪の意識に苛まれ

私の自尊心は慣れない場所へ迷い込んでいった...

## ツーキー は上司

カー ドの返信でも読んで、 気持ちを落ち着かせよう...

確か風の戦士について聞いてたんだったな...

僕に宇宙人を紹介してくれたのがターキー氏なんだよなぁ... デコポ 言うかなぁ... 人間のできた人って言うか。頼りになる人でさ...実は、 ンにもいずれ、逢わせたいなぁ...良い人だよ...仲間想いのさ』 『実は風の戦士ことターキー氏は僕の会社チーフの上司で、なんて

バタンッと携帯を閉めた...

私は勢いに任せるあまり、 してしまったのか.. カードの上司に当たるターキー まで燃や

「ウワァーッ!」

私は雄叫びを上げた...

不甲斐なさすぎて、我を疑い始めたのだった..。

なんで...なんで私のような者が生きているんだ!!

自分の未来を自分の手で潰したようなものだな... 最良の人格者を蔑ろにしたようなものだ...

デコポン... まだだ... まだ俺を倒してないだろ?」

聞き慣れた声のする方を向くと...タッちゃんがいた...

ンとは言え容赦しないぜ?」 「全戦士を倒して初めて光の戦士となるんだ...だが、 いくらデコポ

タッちゃんはぐっしょり濡れたTシャツを脱ぎ捨て、 ぐっしょり濡

れたGパンをパンパンと叩いて見せた...

光の戦士って何だ?

私は訳も分からず、考えるよりも先に炎を放っていた...

チンケなチョロ火。かき消してくれる...うぎゃーっ!!」「フハハハッデコポン!!私は水の戦士ネクトンBだっ!!そんな

肉体そのものは生身だってことに気づけなかったんだ... 水を自在に生み出し操れる能力ではあっても

てやる... くっ... 風の戦士を倒しただろ?アレはカードの上司で最高 「さ、さすがだ...デコポン...光の戦士よ...最後に一つだけ教えとい

の人だ.....」

赤黒く爛れたタッちゃんの皮膚は見るに耐えず

?... フハハハッ」 「目を逸らすな?!デコポン!!don‐ t m i s s i tだろ

タッちゃんは真っ逆さまに墜ちていった...

だった... 私はまだ意味も分からぬまま... 涙が流れていることに気づくばかり

涙する私を揺すり起こすように、 くように響いた... 宇宙人の声が頭蓋骨を内側から叩

ダ... カイテンスルベッドイチダイニワレワレのナカマヒトリブンノ ナ?アト、 イホウガイイ... ルコトガデキルヨウニナッタワケダガ、 ノナカマトナッタ。 スベテノウチュウノチカラヲイノママニアヤ オメデトウ...デコポン。キミハコレデヒカリノセ チガツカワレテイル アクマニハナルナヨ?ワレワレモオマエモソレハオナジ ホウソクニモトヅイタチカラデアルコトヲワスレル ワレワレニハサカラワナ ンシダ。 ワレ ワ

わかっ 宇宙人の長たらしい話が、 た : その一言一言が頭に蓄積されて行くのが

我を治したいっ」 やった!早速タッちゃんの怪我を治して...いや、戦士達すべての怪 「わ、私が宇宙人と同等の力を手に入れただと?やった!それなら、

頭の中にいる宇宙人が微笑んでくれたような...

そんな気がした...

が、
私はまずタッちゃ
うちゃ
・んの怪我を治すため、
地面に降りたっ
た。

タッちゃんは俯せに倒れ込み、グッタリしていた...

ひかし、治すと言ってもどうやって治したら...

と疑問符を浮かべたのも束の間...瞬時に閃いた。

私はタッちゃんを呼び起こすようにタッちゃんの体に触れた...

タッちゃん...タッちゃん...タッ...

「おいっキミ?何してるんだ?」

や、やばい警官だ...

どうなんだ?警官に宇宙科学なんて言って通用するのか?

ります故」 いや...喧嘩ッス。 単なる...大丈夫ッス。こいつタフだからすぐ治

そんなこんな出鱈目を言っているうちにタッちゃんの傷は癒えた...

だな...これでチャラだよな?」 れたのか?光の戦士ってやつか...あの拳銃...二年前のやつのお返し 「うっううっ...お、俺は死んだか?デコポン...デコポンが治してく

私はそれに快く頷く...

奇跡を目の当たりにした私とタッちゃんだったが...警官にはまった

「怪しい奴らだ...署まで来てもらおうか?」

私はそのときパッと光を放った

「タッちゃん今のうちに飛んで逃げよう...」

私はタッちゃんの返事を聞くまでもなく、 飛び立ったが..

## 心から諌めて

「逃げろっ!!デコポン逃げろっ お前がこの町を守れっ!!」

私が言うのもおかしな話だが、あの時のタッちゃんは冷静さを欠い ていた

「だ、ダメだ!!タッちゃん...」

光から覚めた私はタッちゃんが警官にしがみつき、動きを抑えてい

るのが見えた..

やめろ!公務執行妨害で逮捕するぞ?」

どうしたらいいんだ..い、いけない..

タッちゃんは...タッちゃんは...

何なんだ!!

士なんていらないさ!!」「そ、そんなにこの力が欲しいならタッちゃんにやるよ!!光の戦

私はタッちゃんに向かってありったけの想いを込めた...

体から、絶対的な自信は消え...寒気がした...

自分は死んでしまう...そのくらいの恐怖が私を襲っていた...

うぉー おっ... おー おっ... あーっ...」

タッちゃん...イヤだ...

私はタッちゃんを知らなすぎたのか?

これは宇宙において絶対の法則なのか?宇宙人の言ったとおり

タッちゃんが...タッちゃんが...悪魔になった...

ひっ...ば、 化け物:. わ、 私は悪い夢を見ているのか?」

いっそう強く...頑なに..

「タッちゃーんっ!!

ノシューッ...

タッちゃんは... タッちゃんは... 死んだ

私の光の戦士と言う称号と共に..

私は空をぷかぷか浮かんだままだったが、悲しみに暮れている場合 ではない...警官はまだそこにいるのだから、 てまで作ってくれた絶好のチャンスだよな...逃げるなら今しかない... タッちゃんが身を挺し

:. でも、 て吐いていた... まぁ しかし... 肝心の警官は肉の塊になったタッちゃんを見

ョウクンニシロ。 タキデイルヨウダガ、 リョクヲアタエルチカラモソナワッテイルカラナ。 「デコポン。 オマエハヒカリノセンシノチカラヲタチカワニアズケ マダオマエノモノダ... ウチュウジンニハノウ キヲツケロ。 +

また...宇宙人が話しかけてきた..

言えるんだ... な、何が教訓だ...タッちゃんの偉大さを知らないからそんなことが

タッちゃん亡き今、誰がこの町を守るって言うんだ...

うぉーっ!あ、悪魔になってやる!!」

私は有らん限りの邪気を集め、 悪魔になろうとした...

「オマエガアクマニナルノハタイヘンムズカシイ...アキラメロ...」

321

警官の嗚咽がこだまする中...私はなんて純真な心を持ち合わせたの か?などと、 思いたくもない自己顕示を余儀なくされた...

デコポンなんて愛らしい呼び名もイヤだ...

イヤだ.. これほどの邪気でさえ...いや、 この程度の邪気しかでない...自分が

私は見たいものを見る力を使い。

タッちゃん以外の戦士の居所を特定し、 傷を癒した..

ッちゃん...この町は良くなるよ...」 私は揺るぎない...そうだ。 決して揺るがぬ天使となったのか...タ

なるわけじゃない... タッちゃんだってそれを知ってるから... 無理をしていたのは、自分でもわかってるつもりだ...だけど、

私は現金な奴だ...。それで良い。

私は無情にもタッちゃんを置いて飛び去ったまだまだ警官はゲーゲー吐いているようだが...

# 自己判断に対する宇宙の法則

ウイダ...」 「ダメダ。デコポン... タチカワニチカラヲアタエタコトハダメナコ

定期的に私が感傷に浸ろうとすると

宇宙人が話しかけてくるようになった...

そして...

教訓ってやつだ...

デコポン...思い切ってこのベッドで一晩過ごせよ...」

注ぎ込まれた... 私の家の回転するベッドには、 悪魔となり死んだタッちゃんの命が

その前に、元から私の回転するベッドに居た宇宙人の魂は... 俊也君 のところへ行ったとか...

タッちゃんは毎日毎日私に話してくる...行かなかったとか

は生き続けていた... なんたる憎々しい待遇やら...逆に笑けてくるやら...タッちゃんの魂

出される立体的なタッちゃんの虚像はなんだか...切なくて慣れるの には些か時間が要りそうだ...

クルクル回転するベッドがまるで映写機みたいに、

ベッド上に映し

せなら、 「タッちゃん...毎日毎日タッちゃんは...無茶ばっかり言って。 カミカゼとかカーニバルの魂と話したかったよ...」

などと愚痴をこぼしたり...

ワレカラノハカライダ。 「チガウゾ?デコポン。 タチカワハシンダノダ...」 コレハキョウクンヲワスレナイタメノワレ

宇宙人がタッちゃんより先に諫めてくる... あぁ... 私は心底ナーバスだった...

宇宙人となり、宇宙科学の力を持ち合わせても

使い道なんて本当にない...

それを無理強いして使おうものなら...

は力を正しく使うべきだ。 「デコポン。 カミカゼやカーニバルのこと忘れないでくれよ?お前

私には不可能だと思えていた、悪魔化の手段が色濃く見えてくる...

勘違いしていたのか..

私もタッちゃ んもカミカゼやカーニバルも

変わらぬ野心を胸の内に隠し持っていたんだな...

クンニシロ。 ノチリヨリヒクイ。 「チガウゾ?デコポン。 キョウクンニシロ。キョウクンニシロ。 オマエガアクマニナルカクリツハウチュウ キョウ

け賜れた..か? リピートにリピートを重ね...宇宙人は私に宇宙の法則なるものを授

それなら、タッちゃんなんて忘れたいよ...

宇宙人の洗脳は私の脳内に刻まれつつある...それでも

#### つしとら

タブー に興味がある..

何をいきなりと思うだろうが...

毎日宇宙人に頭ごなしに正されていると...気が滅入る

考え方が悪いのか?

悪夢のような無限のループに陥るようなタブーがあるはずなんだ...

だからこそ、タブーを避けたい

タブー に興味があるのはそのためだ

いや、待てよ?

興味がある程度ではダメだ...

違うか...興味程度に在るからこそ丁度良いのか?

ダメだ...タブーらしきタブーも見当たらないのに...タブーを発した ような無限のループへ入り込んでいる...

タブーを考えていただけなのに...

「ダマレッ ノネンシュツガタダシクオコナワレテイルトイウコトダガ...」 ワレワレモハイリコンダトイウコトダ... シカシ、ソレハエネル ·!オマエガムゲンノループニハイリコンダトイウコト

じゃあ、ダマレッ!!ではないだろ?

出されていると認知されるだけであって、 しかし…私が無限のループに入り込んだからエネルギーが正しく捻

エネルギーは正しく捻出されている...よな?

タッちゃんともベッド越しに話しているし私は人の死に痛みを感じなくなっている...

カーニバルもカミカゼもどこかでエネルギーを生み出しているなん

ナンデモイイガ、 イミモナクソラヲトブナ!!」

そう...私は空を飛びっぱなしだ...

無意識のうちに私はそれでも、空を飛ぶことに罪悪感を持っていた

宇宙人もそれに気づいているんだろうな...

青天の霹靂とでも言うべきか...

これは... タツの仕業だな...

しかし、私はタツに会いに行くのだった私は何かを忘れている...

私はタツの元へ急いだが...もう一人浮上してきた...タナーだ...

効化するけど、 「タツ...わかってないんだろうかい?俺っちはおまえ等の攻撃は無 傷までは癒せないぞい?」

体中に電気を帯びるタツは、 タナーの意見には納得いかないようだ...

なただっ!!」 「話の判らない人だな...私の傷を癒したのはター キーではない... あ

タツのその台詞を聞くなり、 い土塊を生み出した.. タナーはグッと手を突きだし、 どす黒

らしめるしかないな?」 キーが傷を癒したに決まっとるやい! !この土巨人で少し懲

土塊が見る見るうちに巨大な人型を成していく...

ゴーレムってやつか?

タツが電撃を巧みに操り、 巨大な鳥を作り出した...雷鳥か...

息絶え絶えに死を待つばかりだった私を癒したのはそなた達ではな いか?!その偶像対決。 「止めたまえ!!私こそそなた達に癒されし戦士だ!炎に蝕まれ、 私も肖ろう…出よ!!風魔神!!」

ターキー まで現れた...

は風で魔神を作り出したようだが...肉眼では見えない...

て、知らんぷりとは、 「黙れ黙れ黙れ!!俺っちは怒ったぞ!ターキーよ?癒すだけ癒し 格好付けてるおつもりかい?やれっ土巨人よ

土巨人が風魔神を殴った...

突風が吹き荒れる...

やりましたね?風魔神の鎌鼬で切り刻んでやる!!」

細切れにされたタナーのゴー ムが崩れ去った...

やっぱり... やっぱりお前が俺っちを癒したのか...」

タツが生み出していた雷鳥が姿を消した...

どだ。 「そのようだな...ターキー素直になれとは言わないが...見苦しいほ ニヒルにも程がある。 気高い人格者とばかり思っていたのに

すると、 ターキーもどうやら風魔神を収めたようだ...

したのは一目瞭然ですが...仕方在りませんね...」 「良いでしょう...私が被りましょう...あなた達のどちらかが私を癒

3人は一瞬私の方を見た...

「光の戦士が生まれた以上...あれも生まれる。」

タツがそう言い放った頃合いに3人は各々が方へ散っていった...

#### 助言の意図

だった..。 タツの助言が示唆すること...私はそのことばかりで、 頭がいっぱい

あれって何だ...

タッちゃんが死んで、 れるのか? 水の戦士が不在だから水の戦士が新たに生ま

それとも、 士が生まれるのか... 私が火の戦士から光の戦士となったから、新たに火の戦

飛行能力のある人間に限るはずだ...

はっ !

何か能力に覚醒したとしたら... まさか...見たいものを見る力...つまり、 スティールアイの持ち主が

違うか..

ものが眼のレンズと共鳴し、 スティー ルアイには霊的な干渉が作用されていて、実像を映し出す 情報を得る仕組みになっているわけで

あり::

そこから、 超能力に発展するわけがない... クテキカンショウヲムシシタノウリョクヲミニツケルダロウ...」 ヤツルチカラ... テレパス、サイコキネシス、テレポート... ナドリガ 「イヤ、ソレガセイカイダ... スティー ルアイヲショジスルモノガア

宇宙人の干渉を許すわけにはいかない!

超能力という分野が開けた以上

私だって光の戦士となった以上...

勝手にダイレクト送信しやがって...

また... 宇宙人か...

遠方で何かが爆発した...おそらくUFOだろう...

「うおーっ!!」

ドガーンッ!!

### 宇宙人の正体

勢い余り、 頭でも吹き飛ばされやしないか? UFOをサイコキネシスのようなもので爆破した私は...

強制的に肉塊にされやしないか?などと

高を括っていた..

はできるのだが... スティールアイの力で、 他の宇宙人、 つまりUFOを確認すること

キタガ... サイニナル、 ニイレルマデニヒャクネンハカカル...ヒャクネンハヒカリノセンシ トシテイキナケレバナラナイ... アクマニナッタモノヲアマタニミテ コロスナラコロセ... ワタシハコトシデヨンヒャクナナジュウハッ ハナシテモキリガナイホドダ。 モトチキュウジンダ... コノセンレンサレタカラダヲテ コロスナラコロセバイイ...」

... 言葉に詰まり、 内で弾け、 体中に不快感を知らせる... 本来なら出るはずの出るはずであろう想いが胸の

宇宙人は寿命にさえ勝てる...500年近く生きていても、まだ自分 の年齢を把握している...

地球人と宇宙人の境界線は100年もあるのか...

庸に思えているのだろう... 途方もない幸福が訪れ、そこに殺意があることさえ、 宇宙人には凡

ュウジンニナッタ...ツウショウ、ツチノユウシャダ...」 ... サイショカラウチュウジンダッタウチュウジンガ... サイキンチキ 「キヲツケロ... ワタシハチキュウジンカラウチュウジンニナッタガ

土の勇者..

土の勇者って... 火の勇者とか居そうだが...

セニュ シカイナイ... ホラ、 「カンチガイスルナ?ユウシャトヨバレルモノハ、 デコポン?コロスナラコロセ... コロスナラコロ ツチノユウシャ

膝がガクガク震えていた...土の勇者とは?

生粋の宇宙人にして、地球人になった土の勇者.. いまいちインパクトには欠ける出逢いだが、 決して油断ならぬ存在

すべての戦士達の根元..

宇宙科学の立案者..いや、 創始者か...それに当たる生命体

地球に引っ張られたとでも言うのか?

ζ 「やぁ!デコポン。私が土の勇者タベルだ!! !よろしくな?セックス最高!!」 やっと...やっと血肉となれた。宇宙岩石から生まれたタベルだ 1000年の時を経

裸だった... 快活な笑顔が眩しく... 頬のてかりが印象的だった... 土の勇者タベルは私と同じ身長でありながら恰幅がよく...何より全

# 七つの価値を行き来する勇者

勇者タベルが更に話しだした 私が剰りの出来事にたじろいているのを、 察してか否か

も良いかな?」 球人になれてさ。 するようなことは言ってないよ...わかるだろ?僕は嬉しいんだ...地 ではないよ?って胃袋を意味するって意味じゃないし、胃袋を意図 ンプ。 コンプリートの意だよ?意って意味の意であって、胃袋の胃 「デコポン君のおかげでやっとコンプできたよ?昆布じゃ なくてコ フフッまだまだ言い足りないけど... 本題に移って

私はされるがまま頷くような... 木霊というか... なんというか... 呆気 にとられていた...

が提唱...いや、君には腹を割って話そう...僕らにとってはそれが常 軌であり、抗うべきではない価値なんだ...たとい、 は地球人だけど元は...元来は宇宙人だって意味でね?僕ら宇宙人? ってもそれから逸脱することはないんだ...」 あっ、 そうかい?じゃ話すけど、僕ら宇宙人?まぁ、 どんな気分にな 今のところ

私はただ頷くばかりだった..

ろうか? この空気に文句があるとするならば、 照りつける真夏日ってとこだ

舘海なら真っ赤になるほどだ..

はさっきも言ったけど、 「ゴホンッ... それでは、 何度言っても足りないくらいだ...僕らのように岩から進化 決して逸脱することはない絶対的な常軌だ 本題を今から話すからね?本題って言うの

低限の手段だからね?そういう僕なんかはわざわざ地球人となった けど、デコポン...君の場合は既に光の戦士なんだから、 わけだから、 であろう本題は君が腐った肉畜生にならないための最善.. いや、 したわけじゃないだろ?君達はさ...。 良いかな?」 かなりのギリギリな宇宙旅行を体験してるわけだけど それが強みなのはわかるんだ 今から話す

ならぬ私だ 前言を些か訂正したい... 一目置いて、 今文句を言われているのは他

勇者と言うよりは皇子か?

肝試し...に似たものだろうか... 現在..私は少し笑ってしまった... カジュアルに縮小された皇子の軌道

事な話を今からするんだぞ?君が光の戦士になった以上血肉の騎士 なっ : デコポン !!笑い事じゃないんだぞ!?とても、 とても大

我らが宇宙人を駆逐せんと動き出すんだ...きっと君の仲間であった がウイルス化するんだ...それに憑かれた人間は血肉の騎士となり、 カーニバルやカミカゼ...そして、タッちゃんまでも... 血肉の騎士と いう八番目の価値により...敵となり蘇るんだ...」

えつ?タッちゃんが蘇るのか?

カーニバルも?カミカゼも?

私は嬉しくなった...

八番目の価値ってなんだい?」

ポン... 君が八番目の価値に達したおかげで私は土の勇者となったわ らが敵視する...本当は管理したいんだけど...ウイルスが生まれたん けだけど、その代わりに血肉の騎士という異常再生を可能とする我 士、土の戦士、風の戦士、雷の戦士と七つの価値があるんだ。 デコ 「そうなんだよ。 世の中には、 宇宙人、地球人、 火の戦士、水の戦

こ、これは本題ではないか?

私は八番目の価値であったのか...

どんな注意をしたらいいのか..

それより...血肉の騎士はウイルスなのか...

らね?」 ... 血肉の騎士の感染者には気をつけて、君が感染する心配はないか 「おっと、 マザーシップから呼び出しだ...デコポンまた会う日まで

そう言うなり、勇者タベルは目前で姿を消した... ワープだろうな...

何が本題だったのだろうか?

### ミルキー 騎士道

を指すものではないのだが... 血肉の騎士とはウイルスのことであり、 決して...私達のような人間

具体的に血肉の騎士とは何なのだろうか?

私は家路につき、事態の深刻さに気づいた...

ドが止まっている... ベッドが止まっている...終いにはオーラを放っていたであろうベッ

「もう...始まっているのか?」

タッちゃんが...タッちゃんが復活した...

タッちゃんが黄泉の国から帰ってきたんだ…。

「うぎゃーっ!!」

突然の叫び声にびっくりした私は尻餅をついた...

声のする方を見ると、 タッちゃんが窓の際にしゃがんで立っていた

業ってやつかと思わせるほどだった... それは猿か蝙蝠かのような狡猾な格好で... これが俗に言う悪魔の仕

俺は知っての通りホーミーを大事にするからさ...デコポンとはこれ ったのによ?台無しだな?台無しだな...デコポンよ?まぁ...良いよ。 ベッドトークな日々はさ。俺にだって宇宙人になる準備ってのがあ っきりにせよ、 「デェコポォン?辛かったぜ?デコポンみたいなつまらない奴との 血肉の騎士のクレイジーさを教えといてやるよ...」

タッちゃんが目を瞑った...そう言うと

禍々しい空気が辺りを包み込んだ...

なんだ...前にもこの空気感じたことあるな..

ヒッヒッヒッ...久しぶりだね?私だよ鬼婆だよ?」

私のベッドの上には...あの帰り道に見た鬼婆が...

... そんな

私はすでに血肉の騎士に出会っている...

「さらばだデコポン!」

タッちゃんは去っていった...鬼婆を残して

### 消極的な一面

しかも、 鬼婆とは言え、 今となっては光の戦士だ... 私はこの地獄から一度抜け出しているんだぞ?

恐れるに足らずだな...

士のウイルス性はそのようにできているからね...私もかつては宇宙 たがあの時別行動をとらなければ、カーニバルのような半端な宇宙 人だったのさ...」 人では血肉の騎士の感染者11人も殺せなかっただろう... 血肉の騎 「ヒッヒッヒッ...あんたが力を付けているのは百も承知だよ...あん

鬼婆が... 宇宙人だった..

: まさか、 血肉の騎士の感染者は回転するベッドを介して、 移動で

だ? な 何が鬼婆だっ!それは私の恐怖心ではないか?実体は何なん

鬼婆は包丁と研ぎ石を取り出し、研ぎ始めた...

せる...カラスが光り物を集めるように...もっと正確に...もっと鋭敏 ヒッヒッヒッ」 の戦士から生まれた恐怖心はさぞ屈強な血肉の騎士を産むだろう... に...さて、光の戦士よ?恐怖心を拭い去ることなどできようか?光 「そうだよ...恐怖心とは人の記憶、血肉の騎士はそれを元に再生さ

鬼婆.. 鬼婆の言ったとおりだ...

わけか	この辺
; :	この辺りは既に血
	肉の騎士
	に侵さ
	侵されている
	ると言
	っても
	過言で
	ではない
	•

どうする?悩むことさえ恐怖心を生み出しやすい...

... どうする?

血肉の騎士...捕らえたりっ!!」

鶴の一声とでも言うべきか?

鬼婆が砂になって消えていった...勇者タベルだ...

ではうまく働かない...が、 る強い意志を持ちたまえ。 心を喰らうインテリジェンスウイルスであるから、消極的な恐怖心 「デコポン…消極的構えとは中々見所ありだな?血肉の騎士は恐怖 君はそうあるべきだ。 しかし退治とまでは行かないな...確固た

なぜかまだ、 全裸な勇者タベルは的確な指摘を私に授けた...

ありがとう...勇者タベル。心強いよ...」

ぞ?ハッハッハッでは、 というわけだ。つまりだ。デコポン君は恐怖心に負けてもいいんだ 血肉の騎士に成長するんだ...それを打ち倒すのが7つの価値と我々 のだ...恐怖心を喰らうと孤独に押し潰され...やがて一塊の文字通り 「当然だとも。デコポン...血肉の騎士とはあまり長くは続かないも さらばだ!」

私はしても、 相変わらず、 相変わらず良しとすることにした... 本題を濁す男だ...勇者タベル。

# 遅れる幸せと奪われる不幸せ

士を生み出すようで... 私のような、 素晴らしい?戦士の抱く恐怖心はより強力な血肉の騎

勇者タベルの計らいで、 光の戦士としての行いを制御されている...

を生み出す方が早く退治し終えるんだよ。 「悪く思わないでほしい...こちらで巧い具合に調整して血肉の騎士

と…わざわざベッドを回転させて、 勇者タベルは通信してきた...

しい嘘って奴だな	優	
って奴だ	L	,
って奴だ	l'	١
だ	嘘	ľ
だ		
だ	7	
た	_	
な:		
:	た	
	た	
	た	

いくら、 れる血肉の騎士を毎回退治していては身が持たないと言うわけだな.. 勇者タベルと言えども私の生み出す恐怖心...そこから生ま

定期的に怖い話でもしてくれるのだろうか?最終的な血肉の騎士に なるまでに一体何回怖い話を聞くのだろうか?

なんだか腑に落ちない甘さだが...私の潔さが伝わるなら良いだろう..

き来する際に絶対血肉の騎士の働きが不可欠なんだ...」 因みに...デコポン君。 僕も血肉の騎士なんだよ?七つの価値を行

出た...怖い話が..

君の出番はそうだな... 最後に一塊となった血肉の騎士を討つときに 騎士が完全に駆逐されるまで、 .. スポットライトを頼もうかな?ハッハッハッ... 冗談だよ。 む五属性の戦士達が血肉の騎士に感染した者達を退治するからね? 「でも大丈夫だっ。 デコポン君が平常心を保てば... 私と俊哉君を含 光の戦士は秘密だな?」 血肉の

恐怖心...なのか?

私は打ちひしがれていた...

いておくれ?」 「むむっ、 強力な血肉の騎士が現れたようだ。デコポン君安心して

ベッドの回転が止まり、勇者タベルの虚像が消えた...

私もまた血肉の騎士のように孤独に押し潰されかねないような...

どうなっているんだ?

## 警察犬的座敷犬

強力な血肉の騎士...

気になる...

も良いから見せてくれー…」 「あーっ!頭ではわかってても気になって仕方ない!!見るだけで

スティー ルアイを使い勇者タベルの同行を追った...

いる:: これはどうやら、 チワワの目線のようだ...飼い主に抱き抱えられて

『シェパーディブオブプードル感謝祭』

そこに現れたガチのヒール..

飼い主がびっくりしてチワワを落とした

「タッちゃん!!」

ピュンちゃんが叫んだわっ!!プードルなのに...」

チワワかと思ったのだが...プー ドルだったか..

水たまりに移る犬はしかし...目のクリクリした小型?のチワワだっ

熱狂的なファンなんだろうな...

飼い主の目線にしよう...

タッちゃん...あら、イヤだわ...私まで...」

どうやら、 まで刺激しているようだ.. 光の戦士のスティー ルアイは強力らしく、 脳内の言語野

それはさておき...

タッちゃんを水の球体に閉じ込めているのは俊哉君..

想いを頼りにSOPに会いに来たのだろう... タッちゃんはすでに常軌を逸しながらも、 人間のとき一番強かった

SOPのリーダー、 ピュンが自慢の腹筋を見せたときタッちゃんが

壊れたらしい...

まだピュンは腹筋を見せている...

変わり... 水の中で溺れゆくタッちゃんはその名の通りネクトンのような虫に

やがて、光る砂となり天に昇っていった...

俊哉君が丁寧にお辞儀した...

ピュンはやっと、Tシャツを下ろし、 すかさず勇者タベルはピュンやその他のメンバーに握手を求めていピュンはやっと、Tシャツを下ろし、俊哉君に向け拍手をしていた。

*t*:

タッちゃん...

腹筋を見たら天に召すべきだよ...

たようだ... 私は先程のチワワ (プードル?) の飼い主から涙を流させてしまっ

あれあれ...どうしたのかしら?涙が止まらないわ...」

私の目線に戻ったとき、 私は既に大丈夫になっていたが...

# カーニバルの凱旋

地肉の騎士に感染し、 醜い姿に変えられたにせよ...

カーニバルのような美意識の持ち主は不死鳥フェニックスとなるら

カミカゼは風神..

ば タッちゃんに至っては、 控え目な性格と揺るがない意志さえなけれ

ネクトンではなく、 水竜リヴァイアサンだったと言うが...

地肉の騎士とは...

タベルも鬼になったり天狗になったり、 「…と言うことだ。デコポン。おまえは御子様だってことさ。勇者 やりたい放題なのが実状だ

手乗り文鳥サイズに小さくなった不死鳥カーニバル...

私の手のひらに頻りに乗りたがった...

私がタッちゃ と窓際にフェニックス...炎が立ちこめた... んの早すぎる死を受け止めきれず、うずくまっている

それがカーニバル...現在火の戦士の臨時の代行を行う勇者タベルの お墨付きの感染者?だ...

私が火の戦士のままだったら...戦うことになっていたかもな...

巨大化はできないよ...カーニバルはホント、 柔軟だよな...」

ってきた... カーニバルは私の手のひらから、 そっと浮き上がり私の眼前までや

理する技術が完成しそうなんだ...勇者タベルが言ってたよ...」 だったな...デコポン?ここだけの話だ。地肉の騎士を有効利用し管 「柔軟ねぇ... ハハハッデコポンもそう言えば、 あの世から蘇った口

有効利用か..

とか? なんたらの戦士だのなんだの七つの価値に依存するよりは...ってこ

いやいや、弱気になるな...

勇者タベルは何か秘策を練っている..

#### 次の世代

んだ!!」 「うわぁーっ竜だ!」 ··水の... 水竜だ!!この町はどうなっちまった

舘海の声だ...

私は慌てて窓から顔を出してみた...

舘海がヒョウ柄の海パンを身につけ、 ような意気込みで、 水竜を仰いでいた.. あたかも素潜りでもするかの

水竜... タッちゃんが蘇ったのか?

まい 「ワハハハッ凄いぞ?俊哉君!! 僕のブリザードには勝て

竜に放ち、 上空には勇者タベルと俊哉君。雪男となった勇者タベルは冷気を水 カチコチに凍らせてしまった...

のはなしだよ?」 ! タッちゃ ん酷いよ!?僕のリヴァイアサンを凍らせる

悔しがる俊哉君を見ると、 ンやデジモンではないかと思うほどだ... なんとも...ゲー ム感覚というか... ポケモ

「 早 く、 した氷の彫刻さ。 魂抜きをするんだ。 皆さんに涼んでもらおう!!竜の形を

それを聞くなり、俊哉君は両腕を突きだし目を瞑った...

「ブラッドバック...ブラッドバック...マイペイン...ブラッドバック ミートグッバイ...」

呪文のようなものを唱える俊哉君..

っ お ー いつ!俊哉君。 びっくりしたじゃないか?」

舘海が詠唱中の俊哉君に手を振り声を掛けている...

「ブラッドバック…ミートグッバイ…マイペイン…ミートグッバイ

しかし、まだ詠唱中のようだ...

まぁいい...舘海は無事みたいだし...なんだか、 たいだな.. 人も集まってきたみ

ヴァイアサンとなるわけか... 水の戦士の放出される水力に血肉の騎士を含ませることにより、 なるほどな... 俊也君そのものがリヴァイアサンになるのではなく、 IJ

俊也君!オーライだ。 その辺で詠唱は止めたまえ。

ていった..

しゅ、俊也くーん!!」

「うぎゃーっ!!」

転がすように俊也君を地面に置いた舘海の両腕は力なく垂れ下がり、

それを受け止めた舘海の両肩の骨が外れた

# カミカゼの要求

あの後、 勇者タベルは脱臼した館海を見事に治して見せた。

が身を怪物化する最大の要因であることに気付かないんだよ...」 は欲望のままに人間に戻ろうと躍起になっているが...それこそが己 ミーに見えても、 「デコポン。いくら温厚そうに見えても、過去に繋がりのあるホー 地肉の騎士に感染したことに変わりはない...彼ら

勇者タベルは窓辺までやってきて、 私に注意を促した..

勇者タベルも地肉の騎士を使っているのに...

俊也君も...

よっぽどの自信があるようだ...

カーニバルにせよ...カミカゼにせよね...

私はホーミーを裏切らないさ。

「カーニバルやカミカゼは、平常心を保てているよ。大丈夫さ。

勇者タベルは残念そうに首を横に振った...

った...同じ意見だった。 肉の塊となったターキーはいつ、地肉の騎士に感染するやもわから も渋々ながらカミカゼに風の戦士の称号を与えざるを得なかった... 違うんだ...デコポン。 いからね...カーニバルにお願いして焼いてもらったよ...」 私もデコポンと同じ意見だ。 しかし... ターキーがカミカゼに倒され、 いや、そうだ

てんな... ターキー が悪魔にっ

カミカゼが風の戦士の代行に?臨時の?

体どんな手を使ったんだ?」 そんな... ター キーほどの男が悪魔になるなんて...カミカゼは

勇者タベルは肩を竦め、 私の返事にも答えず、 背を向けた。

「デコポン...私も血肉の騎士に感染しているんだ。 気をつけたまえ」

飛び去っていく勇者タベル...

置き去りにされたような...

私は宙ぶらりんの気持ちを預けられた局のようだった...

### 浄化の必要

俺は雷の戦士タツだ...人より多く痛みを知り、 雷の戦士になった...

仲間を幾人も集め、 宇宙人と交渉したこともあった...

血肉の騎士についても、 誰より早く取り組んできたつもりだ...

俺の左腕は血肉の騎士に完全に乗っ取られている... 雷神の腕だ...

俺は地球人として、雷の戦士として血肉の騎士を駆逐した後は左腕 を切り落とすつもりだ...

が持つ特有の細胞でね...」 の騎士の感染者が...狙っている。 てはやはり、地球人に勝ってほしいんだが...血肉の騎士とは宇宙人 「雷の戦士タツ。 君には敢えて伝えるが、 彼の騎士は麒麟に化ける...僕とし 君の座を奪う優秀な血肉

勇者タベルと名乗る血肉の騎士の化身.. しているらしいが. 地の勇者。 俺には真実を話

野暮は止してくれ」 れてきたじゃないか?記憶にないのか?どんなに仲間が宇宙人にな いたいんだろ?俺らは血肉の騎士を受け入れ、 ても、 わかっている。 俺は地球人に拘った...。 勇者タベル... おまえは絶対的な中立の立場だと言 左腕を雷神に譲り渡すことでな... 破滅と再生を受け入

勇者タベルは薄気味悪く笑った...

粋の宇宙人のさらに上を行く、隕石だったんだ。僕こそ、隕石であ された最低な地球人さ!!」 る絶対的存在価値を捨て、宇宙人となりミトコンドリア細胞を注入 「違うっ!!違うぞ?雷の戦士タツ!!左腕を捨てただと?僕は生

勇者タベルは私の口を右の手で塞いだ...

くるであろう麒麟を倒せ!!」 雷の戦士タツよ。 お前は全身全霊、 雷神となり、 これからやって

体中に血肉の騎士が入り込みミトコンドリア細胞を食い尽くし始め

「う、ウゴゴァ…アァア…」

気を失った俺を地面にたたき落とし

勇者タベルは飛び去った...

それは宇宙社会においてタブーとされている。 フフッ...宇宙人になった奴らはすべて血肉の騎士に感染しているが、

血肉の騎士を取りただされるのは、 俺のように知りすぎた奴ばかり

痛みを知りすぎたようだ...

## ジャオの錬成師

血肉の騎士に感染した者は、 体が変質し化け物となる...

必ずしも前例のある化け物とは限らない...

つ目小僧にせよ、 のっぺらぼうにせよ、 山姥にせよ、

前例があれば、歴史に身を委ね振る舞う?こともできようが...

目の前にいるジャオの錬成師というゴムの化け物...

不老不死の域に達したという生き字引... 血肉の騎士に感染し、ゴムの性質をひたすらに研究し尽くした結果。

「光の戦士も、もう何代目やろうか?」

ジャオの錬成師は私に耳朶を引っ張らせてみせた。

伸びた..

るんよ。 わしは、 斬られても燃やされてもな...」 ゴムやから...伸びたら縮むのではなく、 伸びたら元に戻

パッと手を離し、 耳朶を弾き出した...

ジャオの錬成師は元から福耳であり、元に戻った耳朶はふくよかに ブラブラ揺れていた..

「それってこじつけじゃないか?ゴムは伸び縮みするものだよ。

私は謹慎生活による陰鬱な感情も手伝っ
て
か
、否定的になっていた

させ、 それでも恰好の話し相手だと思ったのも隠しようのない事実だ

それ故に、 些か問題発言だったことは否めない...

た人間は思いのままに体を操れるんやよ?」 ンプタワーのように組織立つひ弱な生き物やが、 「おまえさんは、 血肉の騎士のことをわかっとらんな... 人間はトラ 血肉の騎士を備え

そう言うなり、 ジャオの錬成師は帰って行った...

に感染したようだな...」 「ほほう...噂では左手のみの感染だと聞いていたが、 どうやら完全

私の住む家の前では、雷の戦士の座を狙う。 ことを雷速の騎士と謳うルーチン 麒麟に化ける、 自分の

それを迎え撃つ現雷の戦士タツが熱き戦いを繰り広げていた...

タツはいつの間にやら、 ても感染者が雷の戦士ということになる... 雷神と化していて、 これではどちらが勝っ

不可抗力に過ぎんっ!!お前と一緒にするなっ!!雷槍っ!!」

タツは蒼い雷の槍を生み出し、投げた

目にも止まらぬ速さ...ゼノンの矢とでも言うべきか?

ルーチンの右肩に突き刺さった...

「うぎゃーっ!!」

ルーチン...雷速を謳いながら、なぜ避けられないのか? 空中戦ながら、ルーチンはうずくまった...

こなせなければ意味がない。 「付け焼き刃の雷属性の馬並野郎が...いくら素早く動けても、 使 い

わなわな震えてうずくまったままのルーチン...

エの座を与えようぞ?-	ヒョッヒョッヒョッ安心しなされ、
	ルーチンよ。
	麒麟に雷の戦

スッと雷の槍を握ったかと思うと槍は霧のように消えてしまった...

ジャオだ...ゴムの錬成師ジャオが現れた

「ジャオ様... 忝ない。 ジャオ様の忠告通り、 雷槍を投げてきたのに

:

ジャオはルーチンの側に立ち、 タツを見据えた...。

「勇者タベルにこれ以上好き勝ってやられては困るのだ... どうや? このルーチンを馬として使ってみる気はないか?」

突然のジャオの要求に唖然とするタツ...

思い出したようにタツは嘲りだした

ハッ...それじゃまるで茶番だ...わざと俺の雷槍を受けたみたいじ ないか?」

ジャオは目を瞑り首を横に振った...

「お主も感染して日が浅いようやな...雷神とは言え心力のある雷.. わしから見れば電力でしかない...。」

ジャオは腕を伸ばし、 タツの左腕を掴み、 掻き消した..

「うぎゃーっ!!」

うずくまるタツを余所にルーチンに跨るジャオ...

おるぞい?」 「左腕...返してほしくばわしの元へ来るんやな...良い返事を待って

ジャオはルーチンの腹を蹴り、 ルーチンは駆け出した...

うずくまるタツを私はただ見守るばかりだった...

## A i d e a **b** o r n s r е а 1 У

デコポン...う、 腕が...」

悲痛な眼で私を見つめるタツはうずくまり、 左腕を抑えていた..

どうしたものか..

錬成師ジャオはタツに対し、取りにくるように言っていたし...なん か位置的に勇者タベルと同等か、 はたまたそれ以上の力を持ってそ

うだし...

わかったよ...左腕を再生させるから...」

私は窓越しに、 タツの左腕をタツの細胞に呼びかけ、治した...

何というか...血肉の騎士が手伝ってか。異常なまでに手応えがなか

の戦士って奴は...血肉の騎士にも感染してないのに...」 「わっほいっ!!ありがとうっ!!デコポン... なんて凄いんだ... 光

キャラに似合わず、喜び哮るタツだったが...

本当は痛みを拭う程度になるだろうと踏んでいたのだが...

が立たない.. 理想通りの形が反映されてしまった...これではジャオの錬成師に顔

「ていやっ!!」

私は、タツの左腕にある催眠を掛けた。

みるみる内にタツの左腕は消えてしまった...

いか?タツ... 君はジャオに呼ばれているんだぞ?ルーチンと手を組 「すまない...ジャオの力の方が私より数段上のようだ...良いじゃな

み雷の戦士を更なる高みへと昇華すべきさ...」

タツは一瞬、 取り戻したようだった... 私の行いを見抜いたように見えたが...すぐさま自分を

悪魔になるところだったよ...ジャオの放つ。諷し、 には不必要な事実だ...デコポン。 ライドを著しく傷つけた...いや、 「...だな。デコポン...危うくターキーのように、 ありがとう...」 この話は光の戦士であるデコポン ジャオへの怒りで は風の戦士のプ

やがて、 タツは飛び去った。 私はター の死を著しく悔やんだ..

カー ドの上司であり、 人格者であるターキー がなぜ悪魔になったの

カ :

カミカゼもジャオに選ばれた勝つべき男だったのか...

私は不甲斐なさを憂鬱でかき消すようにしばらく、 夕日を見ていた

i

ドンドンドンドン

ドンドンドンドン

誰かがノックしているようだ... 夜も深まる頃、 私の家の窓が揺れた..

誰だろうか...タッちゃんかな? タッちゃんがまたもや、 蘇ったかな?

ないか...タッちゃんは絶対的死である肉塊となった後蘇った訳じゃ

ない:

アレは...

「デコポン。 俺だよ!!カミカゼだよ!!開けてくれ!!」

カミカゼ。

カミカゼも絶対的死を与えられている...

俊哉君のリヴァイアサンでわかったんだ...

血肉の騎士に感染したものは...もはやこの世のものではないのだと

あれは、 私の知るカミカゼではないのが現実だったんだ...

ャオ様が仰ったんだ...。デコポン詳しい話がしたい。開けてくれ! 「デコポン... お前の力があれば、 ターキーを蘇らせられるって、ジ

ドンドンドンドン

ドンドンドンドン

すまない..

カミカゼすまない..

お前なら私でもまだ悪魔にできる...

ていやっ!!」

見つけていた... 私はタツの腕を治した要領で血肉の騎士を操るコツのようなものを

催眠さえも...

だったじゃないか?』 『カミカゼよ... お前は悪魔だったじゃないか?風神ではなく... 悪魔

ドンドンドンドン

ドンドンドンド...

窓を叩く音が止んだ

カミカゼが悪魔になったことは確かだが、 やけに静かだな...

「うぎゃーっ!!」

これだ。 静かだな...と思えば カミカゼが戦慄き悪魔となった。

!デコポンっ! ! あ、 っ!うぎゃーっ!

私の力があれば、ターキー は蘇るらしいが..

そうだな... 予想はつく

キーを具現化することはできなくもない... 血肉の騎士はすでに、 この町に蔓延しているから、 塵となったター

だったらなんだ?

だったらなんなんだ?

私はカミカゼが風の戦士になったことに憤りを隠せなかった...のだ

スミン

風神から悪魔へスライドさせることは容易だった...

カミカゼの断末魔も止み... 私は窓を開けた

やぁ?デコポン。

そこには、 カミカゼのらしき肉塊と勇者タベルがいた

染したものは、どんな形であれ根っからの化け物であるとな...やが ポンのおかげだな?よくぞ...心の目で見抜いたな。 血肉の騎士に感 て、最終段階に入るが、 て良い...では、 またこ」 血肉の騎士が行えることはもうないに等しい...デコ 先にも言ったとおりデコポンは何もしなく

「期は熟した。

勇者タベルはカミカゼの肉塊を焼き消し、 飛び去っていった

## 土の勇者として...

勇者タベルが何の気なく、 テレビを使って、妖怪退治の様子を見せてくれたり... ベッドを回転させ私と更新をとってきた

私は光の戦士という枠に欺瞞さえ抱くほど... 例えるならハンズフリ な貴族か

頻りに狩りに出たがるプリンスか。と言う気分だった...

デコポン...僕はデコポンに一つ嘘を吐いていた。

かけてきた... テレビから勇者タベルがユニコーンに跨り、 (どうやら、 ゴムの錬成師ジャオとは話は付いたようだ) 私に語り タツとルーチンを従え

通信手段であり、昨今では視聴者の心身や自尊心への気配りを徹底 志の疎通を可能にしている... し、一方的でありながら、あたかも電話機ででもあるかのような意 しかし、テレビと言うのは、視聴者には反論の余地のない一方的な

パーと言えばカーのような..

こそが、 コポンに土の勇者として、理性的に接してきた...けれど、 ころだ...これで僕達の面目も躍如されたよな?...デコポン、 「デコポン聞いてくれ。 隕石から堕ちた騎士...血肉の騎士なんだ...」 僕達の手の内はもはや、デコポンの知ると 僕は...僕 僕はデ

血肉の騎士はウイルスだと勇者タベルは言っていたが、 とは隕石から生物化したものを指すのだろうか? 血肉の騎士

話について行くしかない... 何が嘘なのやら...すべての経験から得た知識を上手く組み替えて、

勇者タベルは土の勇者ではなく、 血肉の騎士だったと言うわけか...

化す:.。 「血肉の騎士に感染したものはやがて、 僕がその際の引力になるのさ...」 集合体となり一つの生物と

騎士と呼ぶからだろうか? なるほど...勇者タベルが血肉の騎士の核であり、 ルスと呼ぶ意図は、 最終的な形態がそれら感染者の集合体を血肉の 血肉の騎士をウイ

流暢で便利な言葉には、 逆にマイナスの言霊が宿ると言うわけだ...

デコポン...」 ンのような光の戦士に倒されるなら本望だよ...今までありがとう.. 「デコポン... つまりだ... 僕はもうすぐ勇者ではなくなるが、デコポ

親指なんか立てやがった...勇者タベルの爽やかな笑顔..隣のタツもだ。

やがてテレビは砂嵐となった...

宇宙人は宇宙人と言うだけで、 きるからな... 血肉の騎士に感染していないのは地球人と俊哉君とタナー...か 血肉の騎士に感染していると推察で

「はぁ...」

私は溜め息混じりに、テレビの主電源を切り、 を巡らすことになっていた。 半ばシュー ルに考え

はて... 医学書などうちにあっただろうか?

## crazy girl

「デコポンさん...妹の俊美です...これから血肉の騎士との戦いに備 デコポンさんに俊美を預かってほしいんです...」

髪を輝かせ、 俊哉君から紹介された俊美というまだ、 私を見て笑った... 七歳だという少女は栗色の

アハハハッ隠れメタボみっけw若禿以下だよ!隠れメタボ!」

私を指さし笑う俊美ちゃ んを制したのは俊哉君だった...

て、デコポンさんは見るからに小太りじゃないか...って...もう...デ コポンさん。 俊美っ! すみません...こんな妹ですが、 !若禿の方が質悪いだろ?!ってか、 血肉の騎士を打ち倒す そうじゃなく

俊哉君..まだ若いのに..お兄ちゃんだからか..しっかりしてるな..

ナーしかいないけど、 「しかし、 俊哉君?血肉の騎士に対抗できる戦士は、 大丈夫なのかい?」 君以外にはタ

俊哉君は困った顔をした...

だの言って発狂しまして...悪魔になりってな具合で...でも、 よ...実は俊美を預かってもらおうと訪ねたんですけど、わしは戦う 「タナー?あぁ...土の戦士のおじいちゃんですね...彼は死にました たぶん

血肉の騎士なら、
倒せますよ僕
人で。
水の戦士ですし

タナー...

俊哉君もかなり逸脱した感性を持っているようだ。

私も危なかったようだが、 変なプライドがなくて良かった...。

ででも戦いの様子を見るからさ...」 「わかったよ...俊哉君...俊美ちゃんは私が守ろう...そして、テレビ

どうも私の発言に不満があるようだ...

赴くのよ!」 「アハハハッテレビ観戦するつもりだわ。 この隠れメタボ。 私達も

うことになりますね...」 「残念ですが、デコポンさん。 妹は嘘が吐けない質でして...そうい

大丈夫のようだ。 一瞬、自分は悪魔になってしまったかと思ったが、どうやら、 まだ

...わかったよ...」

俊哉君は淡々と予定や場所について話し、 愛くるしい俊美ちゃんを

置いて去っていった...

メタボぉ... なんで悪魔になんないの?はぁ...」

私のスピリチュアルな戦いが切って落とされたのだった...我慢だ...血肉の騎士を滅するまでの我慢だ...

俊美ちゃんは俊哉君がいなくなるなり、 黙りこくってしまった...

騎士が最終段階に入るみたいだけど...家に居ても良いんだよ?」 「俊美ちゃん...予定では、 明日の夕暮れ時に町の公民館前で血肉の

俊美ちゃ んはちっちゃな背中を私に見せていたが、 振り返ってくれ

ちゃ いや ю : 悪魔になったのに肉塊にならないの...フフッ わたし血肉の騎士に感染してるし...なんと、ど直球の悪魔

J	ľ
ナ	J
t,	ĵ
:	•
:	

悪魔だと?いや、まてまて...

つまり、 これにも意味が二分する訳があるんだ...

んだ...悪魔となり、 「俊美ちゃん?血肉の騎士は悪魔になって肉塊になるわけではない 肉塊になるのは宇宙人や戦士...宇宙人も血肉の

騎士に感染しているけれど...」

話の途中で俊美ちゃんが悪魔になった...

どす黒い肌となり、 牙は突き出て、 目はまっ黄色に輝いていた...

?私はなぜ肉塊にならない?悪魔だろ!?わたしは悪魔だろ!?」 「それではコレはなんだ?なぜ、 宇宙人は悪魔になると肉塊になる

ドガーンッ!-

私の部屋が吹き飛んだ...

悪魔とは言え、 まだまだ未熟な力が暴発したようだ...

あってね。 ると肉塊になるんじゃないかな?」 「俊美ちゃん...私もよく知らないが、 たぶんだけど、地球人から宇宙人になった奴が悪魔にな 宇宙人の前に半宇宙人てのが

## 私は吹き飛んだ部屋を一瞬で直して見せた

化け学でしょ?肉塊になる前に変貌する悪魔は科学的な過剰状態... つまり、 「アハハハッ。気障な奴...違うよ。これはあくまでも化学的な悪魔。 バードースしたときの悪魔に好きなときになれるけどね...」 オーバードースね... わかるかしら?まぁ、私は意図的にオ

悪魔から少女に戻った俊美ちゃんは、 してくれた.. 私の暗い常識を悉く打ちのめ

そうか...俊美ちゃん...凄いな...」

またちっちゃな背中を向けて座り込む俊美ちゃん... まるで何もなか ったみたいに..

バードースするわ...私達はお兄ちゃんがそれを倒すのを見守るだけ。 「予定どおり、明日の夕暮れ時、町の公民館前で勇者タベルがオー

保険とかじゃないから勘違いしないでね?」

それ以降二人が話すことはなかった

うのではないか?と疑わずには居れなかった... 夕暮れ前、 公民館に行く途中、 私はあまりのアバウトさに予定は狂

小学生だし...何か凄い力を隠し持っているんじゃないかい?」 「ねえ?俊美ちゃ hį 俊哉君ってさ。 そんなに強かったかな?まだ、

俊美ちゃ んは私の方は向かず、 淡々と質問に答え始めた...

たのはお兄ちゃんのナイトメアの所為だと思ってるの...そんな素振 ベルはあんなふうに核心を避けたがる人だから、自分を地球人にし にしてナイトメアと呼ばれる魔法を使えるようになったわ... 勇者タ 「持ってるわ... てか、 見たことあるでしょ?お兄ちゃんは水の戦士

ナイトメア... 悪夢?

オーバードースを促す力か?

あれのことかい?」 「はっ!!そう言えば、 俊哉君はリヴァイアサンを操っていたね。

俊美ちゃんは頷いた

の...私も...お兄ちゃんに作られた悪魔よ...」

いや...待てよ..

そのナイトメアがあるからってどうやって血肉の騎士(この場合は、

化身と言う意味で)をどうやって倒すんだ?

騎士の感染者を集めて、地上最凶の怪物となるんだよ?感染させる 力があってもどうしようもないじゃないか?」 「俊美ちゃん!!それじゃダメだ!!勇者タベルはやがて、 血肉の

俊美ちゃ んは振り返り、 私の脛を蹴った...

化していて、ちょうど今日の夕暮れ、 タベルのだけど、計算によると勇者タベルのストレスはすでに極限 お兄ちゃんが血肉の騎士を使って、 魔になっちゃうのよ。そのまま放っといたら肉塊になっちゃうから、 「違うっ!! 町が清浄しないでしょ?」 お兄ちゃんがすることは抑制。 引力にするの...だってそうしな 勝手にオーバードースして悪 私達... ほとんどは勇者

脛を押さえうずくまる私を後目に、 俊美ちゃ んは歩き出した..

すべての血肉の騎士を吸い込むブラックホー な なるほど... わかるような気はするよ... ルに化けるわけだ...」 つまり、 勇者タベルは

ないで...」 「そうよ。あなたが問題視してるのはその後みたいだけど...気にし

私はいったい何のために光の戦士になったのか...

意図もなにもない、恐怖心に急かされたのだ...

そう思うしかない...か

さが逆手となり、まるで自分のものかのようだった... それは胸焼けしそうなほど、不思議な夕日だった...。 暖かみや親し

なんか...ストーブみたいだ」

私は公民館前で立ち止まり、思わず漏らした...

世界中がこの夕日を見ているのかと思えばの胸焼けだが...

時間が悪戯に止まってしまったかのようだった...

その夕日の右部からやや下部辺りに黒い点が見えた...

残念だわ...予定と少し違ったみたい...勇者タベルはもうすでに...」

その黒い点は次第に大きくなりながらも、 いにのっぺり張り付いていた... 夕日に広がる焦げ後みた

気持ち悪くなり、 私は公民館の窓に張り付けてある火の用心のポス

に目を奪われた...

立っているのが昨今の主流だ るドキュメンタリー。 シェパー ディブオブプー ドルのピュンがパー ソナリティを勤め上げ かけでアイドルが何気にやっているこういった公務活動がやけに表 『ワタシレスキュー体質』と言う番組がきっ

引き連れてるわね...ダメだわ...お兄ちゃんはもう...」

俊美ちゃんの声に引き戻され、 私はまた夕日の方を見つめた...

黒い点は渦のようになり、 迫ってきていた... 私でさえも事態を飲み込める範囲にまで

ね? ヮ゙ アレは?俊哉君は勇者タベルをブラックホー ルにできたんだ

無理矢理言葉を絞り出したのが悪かったか... 俊美ちゃんは泣き出し てしまった

「なんで?なんでなの?!お兄ちゃんがなんで公民館に先にいない !もう終わりだわ...何もかも...」

俊美ちゃんはすぐさま泣き止んだ。答える術もなく、黙り込んだ私に呆れてか

そして、 とりつかれたかのように、 悪魔に化けた...

「俊美ちゃんが戦うのか...」

私はそれしか考えられずにいた。

横から首根っこを捕まれたみたいに、 まれるように飛び去っていった... 俊美ちゃんは黒い渦に吸い込

あれは... 化けたのか?

わからない..

取り残された私...黒い渦は確かに私に迫ってきていた...

黒い渦が無常にも迫り来る...

は 話が違うじゃないか?私は戦う必要はないと...」

誰が言っていたのか..

そう言っていた張本人が今、 黒い渦となって迫ってきているのに...

私が...私が戦うしかないのか...」

とうとう私の眼前までやってきた。 ?羽虫か?のように、意志を持って私の前で止まり、 黒い渦は...何やら群をなす鳥か

すぐさま私を避けるように前進しだした...

フッと私の中で何かが終わり始めていた

なんなんだ... この虚空は?

血肉の騎士だろ?"アレ"は...

私は思わず自分の頬を撫でてみた...

いくら避けたとは言え

一粒でも"アレ"が付着していないものだろうか?

私は光の戦士だぞ?

どうやら、頬に血肉の騎士はついていないようだ...

私は緊張の糸が切れたように、尻餅ついでに倒れ込んだ...

そうだ...そうだ...

私は戦う必要はなかったんだ。

きっと私の知らない戦士か何かが現れて倒すんだろ?

木の戦士か?氷の戦士か?砂の戦士か?

なって気絶した... 笑って更に力が抜けた私はコンクリー トにキスをするように俯せに

## 軌跡 (前書き)

デコポン...二人の掛け合いがまるで火を起こしたかのような夢...目 梯子を使った曲芸を見せるピュン。マッチー本火事のもと。と叫ぶ を覚ましたデコポンが見たものは、あまりの現実だった... 気絶したデコポンは、タッちゃんの生涯のアイドル、シェパーディ ブオブプードルのリーダー。 ピュンと火消しをする夢を見ていた。

翌朝、私は公民館の前にまだ居た...

らったが... ちょうど、 植え込みの木の隙間から漏れる陽射しの所為で一瞬面食

私は気だるさをはねのける様に一声あげた

火の用心、 火の用心、 マッチー本火事のもと!!」

空を仰いだ私は視線をゆっくりと前に降ろした...

何やらでっかい石っころがそこにはあった...

「なんだ…血肉の騎士はどこへ行ったんだ…」

いや...血肉の騎士が吸い尽くしたんだろう...

早朝だからだろうか?人っ子一人いない

周りを見渡した..

「デコポン…デコポン…」

誰かが私を呼んでいる...辺りには誰も居ないんだぞ?

... こぽん... デコポン... 」

幻聴か?

私は耳を澄まし、 声のするらしき方へ近づいていった...

どうやら...と言うか。 ころから聞こえてくる 今となっては案の定だろうか?でっかい石っ

も忘れてしまう隕石なんだ...ごめんねデコポン...君の町は破滅して くりと僕は地球を新しい段階へ運ばなきゃならないんだ...」 しまった...僕みたいな地球外物質が飛来したら...ね?ゆっくりゆっ ... こぽん... やっと気づいたみたいだね... もうすぐ僕は人間の言葉

私は隕石を蹴飛ばした..

右足に走る激痛..

疲れていて、 ていた 痛みに対する怒りもなく、 些かの気持ち良さに変わっ

人はいないけど...そんな...」 バカな?私の町が破滅しただと?建物は元のままだし、 Ų

息も絶え絶えに、 私は必死で隕石に話しかけていた...

...そして、研究成果を経て地球は新しい段階へと回り出すんだ...」 「デコポン...最後のお願いだ...僕を学会に売ってくれ...宇宙学会に

が、学会..

走馬灯のように今までの異常な体験が頭を駆け巡った...

学会?数多ある学会の中からなぜ?宇宙学会を?」

なぜ?って...僕は地球外物質だから...わかるでしょ?」

私は足を痛めない程度に、隕石を蹴り続けた...

えを隕石ですと紹介して信じてもらえるのか?」 宇宙学会...う、宇宙学会にどうやって話を付けたらいいんだ?おま 「わかるわけないだろ?おまえはすでに、疫病を蔓延させたんだ。

話は見えている...

私が伝えなければならないことは、 超常現象のことではなく、

隕石

が
飛
来
Ü
t
Ξ
上
:

どんな誤解を受けても、それ以外は報告してはならないんだ...

でも... あまりに犠牲が多すぎて...

私は涙が止まらなくなった...

地球人として、喜ばしくてもこの町に住むものとして町人として... これほど惨いことはない...

「頑張って!!君ならできるよ。 僕はそれだけの知識と経験を与え

たんだ...か...ら...」

それから、何度も話し掛けたり、 なかった... 蹴ったりしたが...隕石は返事をし

私の葛藤はそれと同時に片付いた

石の上にも三年…とは行かなかったが…建物があれば、人は移り住んでくるものだ…

誰かが不審に思い。 いか?と丸一日、 隕石の上に座って待っていた... 隣町ないしどこかしらからやってくるのではな

に 奇しくも公民館の前でだし、 もっと信頼できる血の通った人達に預けるべきさ... 簡単だろう...宇宙学会になんて届けず

おー っおーっ...できたか...こりゃまた小さいのう...例年に比べて

ゴムの錬成師ジャオが現れた..

私が座っている隕石を撫でながら、 語りかけていた...

何故だ...ゴムの錬成師ジャオは何故、 血肉の騎士に取り込まれなか

ったのか...

主が今期の受信者であるようじゃが、 思い起こされ、辻褄が次第に噛み合ってくる。そして、出来過ぎた たようじゃな...」 文明が人を傲り、また隕石を呼ぶだろう…デコポンと言ったか?お しなさんな…やがて隕石は朽ち果て、町に人が満ちる…歴史は再び 「お主、 石の声を聞いたか?学会がどうとか言ってあったろ?気に 今までより些か我慢がなかっ

淡々と話すジャオには、 この巨大な輪廻を目の当たりにしてきたのだろう... 生気が感じられず、 おそらくは幾度となく

現実のようで、 それは単なる悪夢。 覚めない夢はないんだ...

「ゴムの錬成師ジャオ...私のような受信者はどうなったんだ?幾度

もこのような輪廻はあったと聞くが?」

ジャオは私の問いかけに操られるように着飾った派手な編み込みの された麻のマントをとった

地肌に纏ったばかりのマントであった為か...

させ、 そうではない...

ジャオの体中に人の顔が無数に張り付いていた...

る...受信者は血肉の騎士を選ばずワシを選ぶ...生きながらえたいや りだろう?」 ら死にたいやら...ワシが血肉の騎士に取り込まれない理由がお分か 「バカな奴らじゃて...お主みたいに隕石に座っていたのは始めてみ

マントを羽織ったジャオは私に背を向け歩き出した...

デコポンとやら...良かったら?ワシを殺してくれんか?」

躊躇なく私は真空の刃を生み出し、 を切り裂いた.. 右から切り下ろすようにジャオ

はこんなんじゃなかったんだがなぁ...」 「ハハハハッありがとうよ?伸びたじゃないか?すぐ元に戻る... 昔

に思えた.. みるみるうちに傷が塞がっていく...それは伸び縮みするゴムのよう

飛んでいった... やがて、隕石は砂のように風化し、 タンポポの綿毛のように町中に

不思議なものだった...

眠りにつく瞬間を見つけられないように、 まして町が蘇る瞬間だ...

隕石が風化しているのを見ていた内に町に人が戻っていた...

ルか...おっ、

カードじゃないか?

b o o o m

b o o o m

ているんだ?今、 『デコポン...この町で起きたこと...いったいどれだけの人間が覚え ターキー氏が目の前に現れたよ...』

クード...カードも生きていたんだな...

私は強い鬱と対面したようだ...

話掛かってきたんだよ。 「で、デコポン!!タッちゃんがメンソーレラブに行きたいって電 どういう風の吹き回しだ?」

私を求めて、公民館前までやって来た...例の半被を着たカルテが野生の勘だろうか?

そう言えば...私達はよく公民館に集まっていたな...

野生の勘は訂正しよう..

習慣だ...

アイドルなんて無理だって気づいたんだよ。 「ハハッカルテ。 タッちゃんがやっと現実を見だしてくれたかな? きっと」

私達はただ、大人としてそうだ...思い出したぞ。 大人としての義務感に苛まれていただけなんだ...

きっと、そんな不安定な気持ちが幻を、リアルな幻を見せたんだな...

「デコポン。妖怪大戦の間どこにいたんだよ?よく無事だったな?」

どこにって...まったく私が張本人と言っても過言じゃないだろうに...

私は家にいたよ。 そして、ここは最終決戦場だ...」

カルテは首を傾げていた...

伴だからw」 カで起きたことだから...俺らの話とは違うだろ?いくら毎日つまら らず釣れないな...じゃっ、 ないからって...家でゴロゴロしてるからだよ...デコポンって相変わ 「デコポン…何が言いたいかはわからないけど、妖怪大戦はアメリ 俺これから仕事あるし、 タッちゃんと同

私は覚束ない相づちを返しながら、 携帯を開いた

時事をいち早く知るには、 携帯が手っ取り早い...

『アメリカ各地でYOUKAIと呼ばれるモンスターが多数発見さ FBIや国防省が動き出す。

: か。

カルテのやつまさか...蘇った口か?

小気味の悪い笑いがうっすら浮かんだ...

だったかのように、 何もなかったかのように、 町は『いつも通り』を着飾り、 させ、 血肉の騎士など向こうのゴシップ 回り始めていた..

ないか... 私は少なからず二年は死んでいたし...こんなに平和なら...銃殺じゃ

殺人罪が立証されないまでも、 殺人未遂ではあるわけだし...

病院側はいったい何を考えていたんだ...

、や... タッちゃんは逮捕されたか...

やばいな...」

まるで生き字引にでもなった気分だったが...計算はずれる...

しかし、解決し平和になった事件はあった

それが私に対し、この町が望むこと

うか? そう言えば、 わたしはまだ光の戦士としての力は残っているのだろ

一つ目小僧とか...出ないかなぁ

「フフッ…」

私は浮遊感に苛まれていた...

奇しくも死んでいたあの二年間と似た境遇だ

しかし、訳が違う...

私は早速、
_
つ目小僧を呼び出し
て
みた

「おんや...自分?いつぞやのワレやないか?」

冷や汗がブワッと涌いてでた...

そうだった..

宙人の仕業.. あの化け物列車のアレは血肉の騎士の影響ではなく... おそらく、 宇

地球人を妖怪のように見せていただけなんだ...

私が望む一つ目小僧と言えば...この厳つい極道屋ということになる

えてらっしゃいましたね...」 「あっ... ハハハハハッ。 に 二年以上も前の話なのに...よ、 よく覚

どうしたものか...

私はこれ以上何も考えられない...

どつき回すとこやが...時効や時効...」 らあかんで?悪いもんは悪いんや...以後、 あんさんな?自分が加害者やからって、 都合の良い風に解釈した 気いつけや...ほんまなら

はて... これでは光の戦士の力がまだあるかどうか... 図りかねるな...

私の独断と偏見としては、 地球人 半宇宙人 宇宙人と進化していった者達らしく、最終的な 宇宙人とは言え、勇者タベルのように隕石から生まれた訳じゃなく、 うがないわけだが... 血肉の騎士に感染していたとしか言いよ

私の単なる飛行能力にさえ、 いのだ.. 血肉の騎士が作用していないわけがな

故に、 れたブラックホールにより吸い尽くされた... 町は勇者タベル...いや、 血肉の騎士を浄化する為に生み出さ

例外として、代々の光の戦士。

そしてゴムの錬成師ジャオが生き字引としてか?生き残る...

しかし、 光の戦士は私が初めてこの周期を確認したようであり...

例外と言えば、ジャオなんだろうが...

ベタに円盤型のw」 「私は何だと言うんだろうか?どれ... UFOでも浮かべてみるか?

私は天に両手を翳し、念じてみた...

ルの自由度があり 感覚で言うなら、肉眼では確認できないであろうマイクロレヴェル の微粒子、つまり原子レヴェルの新たな融合。そこは地球外レヴェ

できないわけがなかった...としか言えないだろう

UFOが…直径100寸程度のUFOが浮かび上がった…

宙人を配置しよう... あそこに...UFO内に...そうだな...私が拐かされたときのような宇

私はコンダクターのように、繊細でエレガンスな気分に浸りきって

悦と呼ぶには余りに愛おしく...

心の傷が癒えていくのが、 しかとわかった

はっ!!何をやっているんだ...これじゃ、 いずれ新たな土の勇者が飛来する...」 私が原因になるだろ?

私は急いでUFOを消し、 血肉の騎士を浄化した..

「うぎゃーっ!!」

どこからともなく叫び声が聞こえた...

なんだろうか...血肉の騎士はすべて浄化したのに...

ことはできないんじゃぞ?つまり、おまえのような光の戦士が念じ から逃れ生き残っていたのじゃが...まさか、念じるとはな...」 ない限り、血肉の騎士の感染者のいくらかは、 「言ってなかったかな?血肉の騎士をこの地球から完璧に消し去る あのブラックホール

後ろを振り返ると、ジャオがいた...

まだ、 な。 「ゴムの錬成師ジャオ...と言うことは、 ジャオあなたが生きているのが何よりの証拠だ...」 この町には居て、 私の念力により…つまり、 血肉の騎士の感染者はまだ ľ はない

ジャ オはしわくちゃの顔を笑顔にして、 私の問いかけに答えてくれた

ワシは伸びて縮んだんじゃ...それじゃ、 また逢うその日までな?」

ジャオは砂のように消えた...死んだのか?伸びたのか?

私は血肉の騎士をこの町から消しされたのだ...

穏やかな時間が流れた..

血肉の騎士を淘汰しきったのは...もしかして、 いだろうか? 私の思い込みではな

私の目の届く視野内では、発見されないだけではないだろうか?

それでも良いか...

今日はカードの計らいで、 ターキー氏と話す機会をもらった...

現在町の喫茶店にいる...

当人たっての希望であると、 カードは言っていたが...

世辞に決まってる...

を異常化させる悪性の地球外ウイルスだと?」 「ふむふむ… 血肉の騎士は細菌であるというわけだね…しかも、 体

まだ、 答えてくれていた.. オーダーも来ていない中、 ターキー氏は私の切り出した話に

その話と言うのは、 血肉の騎士の危険性についてだ。

わけだが.. 人を堕落させ、 欲望のままに体を変態させられると言う旨を伝えた

私の淡い期待からは、 若干逸れた回答が返ってきていた...

じゃないか?病気や怪我、肢体の欠損部の再生。劣化した臓器の再 そう言った結論が出たのかもしれないね...しかし、どうだい?その 血肉の騎士を有効利用できれば、自己治癒を著しく促進させられる い?人を見損なっては駄目だ...私はそう思う。思惑が高ぶりすぎて、 「デコポン君。 内科医にとっては、 欲望を具体化すると言う表現は極端すぎやしないか 夢のようなウイルスじゃないか?」

いる いせ:: 氏はすでにあの血肉の騎士が起こした惨劇を忘れて

血肉の騎士が有効利用されるなんて...判断を鈍らせるだけなんだ

絶対に…無欲な人間なんて居たとしても一握りでしょ?忌むべきは 血肉の騎士そのものなんです。 「そんな...夢みたいなこと...血肉の騎士は人の欲望のみを狙います。

目を閉じた.. キー氏はやってきたコーヒーを一飲みし、 しばし考えるように

だろうか?私も半ば軽返事で済ませていたが...少し考えてみないか い?もう少しわかりやすく頼むよ。 「デコポン... 血肉の騎士とはなんだい?アメリカで流行っているん このままでは君の虚言でしかな

私は冷や汗が溢れるようにでたことに気づいた...

旦それに気を向けることで落ち着くためだ...

そうなのか...私以外、 血肉の騎士を知るものはもういないのか...

アメリカ...そうするしかない...

変人奇人扱いで終わっては...

行ってるでしょ?そのYOUKAIが変態する要因として、 では血肉の騎士というのが有力だっただけですよ...」 「アッハハハッ... そうなんですよ。 アメリカで今YOUKAIが流 私の筋

失敗だったか...ターキー氏は少し不機嫌になった様子だった。

ドに言われて仕事を紹介しに来たんだ!!真面目な話をしなさい! 「バカにするのも大概になさい!!君はニートなんだぞ?私はカー

!

そうだったのか..

カードはそんな根回しを私に...

私はター キー氏を睡眠状態にさせ、 その場を去った

血肉の騎士...さんざん否定はしたが...私の体内には血肉の騎士が必

自分を戒めた.. 喫茶店から抜け出した私は、 心にぽっかり空いた穴を埋めるように、

クードとはますます、距離が開いた...

私の伝手の中で、 信頼できそうなのは、 カードとカルテ...

わからない...

大したことは起きないだろうが...

光の戦士の力があるからと、驕り高ぶりは良くない...

社会人として振る舞わなければ...

「アッハハハッ!!どうだいベイビー 達?俺はついに鳥になったぜ

?

どこからともなく声がする...聞き覚えのある声...

タッちゃんが空を飛んでいる...

タッちゃんすげーな?マジで空飛べるんか?マジックかと思った。

\_

カルテがメンソーレラブのだろうか?女性陣を連れて来ていた...

体どんな件で空を飛ぶやら飛ばないやらになったのか...

私はまた...タッちゃんに頼りそうになった...

このまま去るのがいい...」 「ダメだ...私はニートなんだ。 タッちゃんはとても楽しそうだし...

私はそそくさと、その場を後にした

!デコポンじゃないか?何やってんだよ?」

制御できない力...そんな後ろ向きな考え方だから、 てウイルスに気付くんだろうか? 血肉の騎士なん

タッちゃんは溌剌として...空を飛んでいた

うんだからな... これはまだまだタッちゃん派の勢力は衰え知らずだ 「デコポン。見てみろよ?タッちゃんあり得ないだろ?空飛んじゃ

な?」

昼下がりの町並みは不思議に見えた。

ックな人がごった返していたからだ... 帰宅するには少し早く、 出勤するには遅すぎる時間帯にビジネスル

営業中だろうか?外回りか?

しかし、 下を向き、 何より不思議なのは、 なかったことにしたいようだった点だ... タッちゃんを見上げる人はすぐさま

何故だ?

人が空を飛んでるんだぞ?

あー 凄いじゃないか?タッちゃんは病魔に冒されているのかい

:

カルテはムッとした..

つくってるのさ」 のボディ ヘリウムだろ?タッちゃ んはターキー さんの依頼でモニタ 「違うだろ?デコポン。僻みにもほどがあるぞ?アレはアメリカ製 として今仕事してるんだ...平和ってのはタッちゃんみたいな奴が

しまった...血肉の騎士はタブーとは言え、 私の会話のベクトルはま

さに血肉の騎士のそれだった...

病魔に冒されているのかい?だと...いかれてる...

「 悪 い:: 少し具合が悪くて口走ってしまったんだ...ネガティブすぎ

カルテは首を横に振った

ウムのモニターにはいらないよ。体がヘリウムに変化するんだぜ? とにかく、デコポンはどっか行ってくれよ。 「ダメだダメだ。デコポンみたいなマイナスイメージはボディヘリ

私は仕方なく、どっか行くことにした...飛んで

お おいっ! ・・・ちょ、 デコポンもボディへ持ってんの?」

私は呼び止めるカルテを無視するように飛び去ってしまった持ってない...

「うつ… ぐうつ…」

いきなり胸が締め付けられるように痛みだした

バカな..

やはり光の戦士としての寿命は、とうに過ぎていたか...

脈打つ心臓はやがて、 体中に熱を持たせ、 私はゆっくりと地に降り

た :

はぁ はぁ...どうしてしまったんだ...私はもうダメなのか?」

うずくまり

私は電信柱に張り付けてある「融資致します」 たチラシに引き寄せられるように、 這った。 と電話番号の書かれ

ゃんにボディヘリウムなしに空なんて飛べるのかって聞いたんだよ 副作用として心臓病になったり、後天性のダウン症を引き起こすと 知ってるか?ミトコンドリア細胞。 かでさ。ミトコンドリア細胞が体に負荷をかけ過ぎるらしくてね。 したらさ、 デコポンっこんなところにいたか?探したんだぜ?あの後タッち 天然の飛行能力はアメリカではもう病人扱いだとさ...

う、うざいっ...

何がミトコンドリア細胞知ってるか?だ...

私はあの地獄を知ってるんだぞ?

怒りのあまり

カルテの奴を眠らせた私は、 確固たる後悔を味わうことになる...

これがアメリカナイズされた血肉の騎士の末路か...

UFOを作り出した...

そこに乗り込んだ私は、気を失ってしまった

## UFO内

転換していた.. 目が覚めると辺りは真っ白で、 一瞬私はまた拐かされたのかと責任

しかし、 なかった... その思いは力として発揮されず、宇宙人が生まれることも

辺りは真っ白な二次元のままだ...

無意識ではダメなのか?意識すると良いのか?

私はどうやら、 余程の袋小路に、 はまっているらしい...

にかく最底辺に叩きつけられたような	すべての思惑がエゴに感じ、
たような	自分はど畜生のなれ果ての果てのと

それでも私はUFOの中にいる...

力はもしかすると失われたのか?意識よりは意志なのか?

物体の難解さ...

比例するだけの意志が必要となるわけか?

いや、そもそも力を失ってしまったのではないか?」

私はUFOから外を見たいと念じてみた

すると... 丸い窓が現れた

「なんだ...違ったか」

上の空とは言いたくはないが、 上の空であった...

私は淀む気持ちを抑え

そこから信じられない景色が見えた 窓を覗いた

タッちゃん!

手前で眠るカルテの直線上にタッちゃんが血を流し倒れていて、 女

性陣があたふたしていた..

そんな... ボディヘリウムの効き目がきれたのか?

゙ よ、よし...行ってみよう」

突き動かしたのだった 私は自分の力がまだ健在であることを認知するためにも、 UFOを

# 謎の飛行物体

プランなことに気付いた。 タッちゃんの倒れているちょうど真上にUFOを停めて、 私はノー

しまった! !どうしたものか...ええいっ!どうとでもなれだ。

私はタッちゃんを光で照らし、 吸い込んでUFO内に取り込んだ...

タッちゃんはどうやら、ボディヘリウムの効き目がきれて地面に叩 きつけられたわけではなく、ボディヘリウムの要求に体が堪えられ 内出血したように体中が紫色に変色していた...

どうやら、 血のようで... 流血していたのは、 口や耳や鼻などから垂れ流れてきた

だ... これは、 張...そして破裂させたんだ...くも膜下出血の全身バージョンみたい に渡そう...タッちゃんの仕事もそれで達されるだろうし。 「最悪だ…血液中のミトコンドリア細胞が活性化しすぎて血管を膨 私が治すわけにはいかない...アメリカの医療スタッフ

私はアメリカまで飛び、 ボディヘリウムを開発した、 アメリカ本社

の校門前にタッちゃんを置いた...

ホーミー の命を託したのだった...

.

胸焼けがする...

ボディヘリウムを開発した会社 (アメリカ本社) にタッちゃんを任 せてはきたが..

胸焼けがする..

人は考えを巡らせるとき、考えがまとまったと判断するのは、 胸

心臓だと言うが...

どうやら、 アメリカ本社は芳しくない印象を受けたようだ...

日本の一キャンペーンスタッフを越えて大出世さ!!なんだこの胸 くその悪さは?!」 なぜだ!?最高の研究材料じゃないか?タッちゃんだって、

UFO内で私は有らん限りの声を張り上げた

人は常に願うものだ...

天から金銀財宝が降ってきやしないか?

石油でも掘り当てて石油王になれやしないか?

すべての人類に愛されて、大富豪になれはしないか?

など..

しかし、どうだ?この胸焼けは?

「治れ! !治れ!!私は爽快感に満ち足りたい!!」

やがて、 私の行き場のない願いは一つの存在感を生み出すことになる

それは、奇しくもゴムの錬成師ジャオだった

### プリオン

相違点がある

昨今の情報社会において、 の個人情報へのアプローチが可能な時代に... 事件性を示唆することにより、 外部から

鬼 保護されるべき個人情報へのアプロー 協調性のなさは、相違点となり、 やがては集団心理の主軸として、 猜疑心を生み、 表向きには興味や関心として、 チを可能にしてしまう.. 言うなれば疑心暗

起きた異変はまさに集団心理...お主への罪の仮借故の事故...民族精 関心があり、 神に則り、 物事が自分に向けられた悪意に見えるんじゃよ。 つまり、 デコポンよ?今の閉鎖的なおまえの感性では、 人は思いやりで体を維持するものなのじゃ」 歩み寄ろうとしておるのじゃ。 太刀川.. 皆、 お前について タッちゃ すべ んに ての

嫌悪感の最終地点は決まっ
7
Ļ
人
人道的な救いに満ちているが

いきなり現れたジャオは、 大きな嚔を二発した...

発目で私の注意を引き、 二発目で生理現象であると思わせた

ジャオの後ろには幾人もの人間が見えるものだ...

っている。 ことにはついていけないんだ!!」 なんて思ってない!!いつもいつも... タッちゃんのやる

情けない言い訳じみた返答をぶつけた 私はそれでも、 ジャオのした嚔に依存するような大声で、 なんとも

言え、 .. ワシなら日本支社に連れて行き、 んの安否は気にならんか?いくら、 「おーっおーっ 威勢の良いことじゃな...してデコポンよ?タッちゃ にわか仕込みの信頼など如何様にもならんと思うのじゃがな 製造元であるアメリカ本社とは ことの成り行きを説明するもの

冷や汗がでた...

私は盲信的にアメリカ本社にタッちゃんを見つけさせれば、 んの命は保証されるとばかり思っていたが... タッち

いたいのか?あちら方だって対応力くらい備えてあるさ...」 つまり、 タッちゃんは死に、尊い犠牲のように弔われると言

私は心許なくなり、 どんどん声が小さくなった

の気持ちになれと言っておるんじゃよ...」 「そういう意味ではない...タッちゃんを丸投げされたアメリカ本社

そうだな... これではあまりに任せっきりだ...

大切なタッちゃんなのに...

わかったよ。 ちょっとタッちゃんの様子見てくるよ。

ジャオはにっこり笑ったそれを聞くなり

もちろんじゃ、タッちゃんも喜ぶじゃろう」

だった 真っ白なUFO内は、 人の温かみに飢えていたかのように嬉しそう

業だと謳われるが、 ボディヘリウムを取り扱う会社。世界各地に支社があり、本社はア ルニクスか? メリカにある。 表向きには、各国の天才を集結させた超エリート企 実のところはガリレオ・ガリレイ...いや、

わかりやすく言うと、まぁ... 思想犯だろう

まず大前提として

鉄の塊が空に浮くのは、 勢いがあるからである。 と言ったところか?

キャピタリズムの基礎と言っても過言ではないが...

そうではなく、 まりなのだ 鉄というのは磁力に左右されるものだと提唱する集

# 私は丁度かつぎ込まれる寸でのタッちゃんを見つけた

Н s sia? h 0 o k up?What-S why?

どうやら、 人の作業員が私...ではなくUFOに気づいたようだ

カルテみたいにもじゃもじゃした髪の毛は天然のブロンドがプリン 黒髪が入り交じっていた

白衣から覗くジーパンは意外だったが、 新品そのものだった

n cki n d u s w h ? F \* y?Rus c k i n s i a y o u u n d e r

人が顔を真っ赤にして怒っている...

ツルツル頭に銀縁メガネの男だ

「大変なことになった...しかし、 タッちゃんは大丈夫そうだな...引

き返すとしよう」

タッちゃんなら、もう大丈夫だろうな...

言っても本物の天才達だからな...

栄の利いた...ラッキーボーイだろう... 円周率を数えるのが面倒で、 御 様なんてほざいてた私などは、 見

いや、運ではない...巡り合わせだ...」

少し天才達が小さく見えた気がする

私が念じて生み出したUFOに嫉妬していたんだ...

それでは、どうやって生み出したんだ?根拠は?テーゼは?ハハ

. 私などここまでじゃないか?」

ひょっとすると、予知する力が人より弱いのかもしれない...

偶然まったく、 その場に居合わせたラッキーボーイなのかも...

動けと念じたんだ!!」 !UFOが生まれたときに傍にいて、空が飛べて、動き出すときに 「ひゃあーっはっはっはっ !!ラッキーだ。 大幸運、 超幸運だつ!

私は名もなき達磨だ...

手足などなくとも...幸運が助けてくれる

タッちゃ んのようなリアリストになりたかったな...」

行き場をなくした私は..

算段を考えるばかりになっていった... 予想通りにやがて飛来するだろう隕石を迎え入れ、 妖怪を浄化する

### 対隕石

これからは、 私の隕石に対する防衛手段のことばかりになるだろう

私にとって隕石はまったくもって悪いものではない...

それは利潤を満たすものであり、 これほどの劇薬はない... 老廃物の効率的な循環を保つ上で

しかし...何事にも問題点と言うものが生じる

世界は隕石の飛来によって再生するのだから

これでは、 私にとって地球は体内、 つまり胃袋の中というわけだ

胃袋の中にいて、 飲み込んだ薬が胃袋で溶け、 まれるわけだ... 世界がどのように再生していくのかを頭に叩き込 染み渡るような

私こそが世界の循環を知っているのに... まるで井の中の蛙

るものなのだ... 隕石は魔法のように人を動かすのだから、 動いた人間こそ世界を知

よって...私の独断と偏見により、 隕石は悪意となっていくのであっ

た

#### 金の盾

コードネーム『金の盾』

戦場において、 われる材質だが 鉄や鋼はまさに硬度を求められ、 実際に防御力を問

金に至っては、意味が違う。

金と言うのは硬度も去ることながら、希少価値が高く戦場では、 つけるからにはそれなりの覚悟、 しまう... つまり必要以上の気力を消耗して 傷

よって...対隕石の最初の手段として、 の強化を行うことにする 地球を覆うシー ルド、 大気圏

後はそのデータを元に私の力を使い、 既に隕石の軌道から落下地点はアメリカによって解明されていて、 いわけだ... 大気圏を濃厚に強化すればい

隕石は意志のない地球外物質の塊 それ故に、 強化された大気圏に気づくことはない

私の作る大気圏の盾は、 価値さえも帯びている 鉄や鋼のような硬度に加え金のような負荷

Tードネーム『金の盾』

果たして...隕石は金の盾の価値を知っているのだろうか?

ある訳ない...

私は少し広めに大気圏を分厚くしたから、 大丈夫だろう..

アメリカの宇宙開発局のデータを理解する方が大変だった

いくら、 スパンは洒落にならないほど大変だった... 光の戦士の力を持ってしても、 大気圏に細工を施すまでの

まず、隕石の軌道

大気圏の厚みを調整する準備をした を知りたいわけだから、 これは計算はすでにされていて、要は大気圏のどこを通過するのか 私はコンピュータに独自のコネクトを結び、

る大気圏濃度を濃いくする 隕石の軌道を映したディスプレイに則り、 軌道と大気圏の接点にあ

まぁそれで終わりなんだが...

私の頭は熱を帯び、意識は混濁していた...

後は、 見たいものを見る力で隕石の様子を追跡すれば良いだけだな

「どれどれ...隕石は今どの辺かな?」

私は目を瞑り、宇宙空間へと視界を移した

ば、バカな!

無数の隕石が群を成し、 こちらに向かってきていた

割り出した課題に過ぎない...どうしたものか...今から練り直して間 「流星群だっ!!しまった...あのデータは研修生が過去の事例から

に合うか?」

コードネーム『金の盾』

どうやら、次の段階にレヴェルを上げなければならないようだ

隕石の接近に伴い妖怪騒動が起きているのは事実だし...

コレはすでに...

隕石の飛来を止めては、 ではないか? 私が体験した、 あの再生が起きなくなるの

と言う考えが頭を過ぎった...

勇者タベルのようなものも現れなくなるだろうし...いや、 るであろう再生を妨げた場合.. な模倣的再生かどうかはわかりかねるが...少なからず、 隕石ができ そのよう

「どうする?私の力で再生するよりは、 いのではないか?」 隕石に任せた方が自然で美

懸念すべき点はないはずだったのに、 石に名前を付けたくなるほど、 いきなり愛情がにじみ出てきた... 事態は一転し、 一石一石の隕

このまま隕石を...見過ごした方が良いのか

未然に破壊しても良いだろうし...

でもダメだ...

格好付けてコードネームなどと企ててみたが、

蛇足に至るか?

私は自然治癒に賭けてみることにしたのだった

# atmosphere

和感が残る 金の盾も取り外し、 通常どおりの大気圏となったわけだが、 妙な違

あそこまで考え抜いた結果、 隕石のデータは過去のもので

しかも、隕石は一つではなく流星群..

半ば諦めも手伝った感は否めないか...

# 流星群は地球を襲い

大損害を受ける...が、 隕石は地球に根ざし地球をより強靱な星に作

り上げるだろう

「オッケーっ!ストライク!!」

私は町中で人の目も気にせず叫んだ...

この後すぐ...隕石が...流星群が降り注ぐ

<b>~</b>	:	:	
	•	•	
<b>\</b> <i>J</i>	;	:	
1	:	:	
L	:	:	
$\overline{\mathbf{u}}$	:		
2	•		
:			
<b>\</b> /			

人の目は白くなり、 私を蔑むようなヒソヒソ話がこだました...

ださいね」 「ハッハハッ皆さん流星群が地球に到来しましたよ?お気をつけく

すると、皆ドッと笑い出した

リカとか行けよw」 「アハハハハッ真っ昼間に流星群拝めるかよ!見たかったら、

目を閉じてスティー ルアイを使った

流星群は大気圏で見事に消化され、 宇宙の藻屑となっていた

そ、それもそうですね...」

とんだ赤っ恥をかいたものだ...

あの疎外感...なかなか忘れられるようなものではない...

こう思うようにしている そんなこと光の戦士という誉れな力を手に入れてからは、

疎外感など誰しも一つや二つ持っているものだと、 つつあるのだ ew-talkと言い、 ポジティブな会話法として現在主流となり アメリカではf

英語において、 うという動きもある いニュアンスの表現を排他的に用いることにより格差を緩和させよ fewやoftenなど日本語ではあまり使われな

場の交代でしかないという見方が強く、あまり世の中からはよく見 もちろん、苦手を克服するのが何よりだが、近年、苦手克服とは立 られない傾向にある。 ニマムなモデルも、 リアル思考なモデル社会では懸念されたりと... 最近では、一世を風靡したバランスのよいミ

世の中はつまらなくなっては来ている

とまぁ、 私が立ち直るまでにかなりの世論にかじり付いたが...

要は、病は気からと言うわけだ...

この罪を購うようなものはないだろうか?あぁ...何か気休めでも構わないから

らかされて辛かったもんじゃ...そんなときはコレ、ムキムキガム。 一噛み、 ムキムキになるっちゅー 発明品じゃ。 ミント味じゃ。 「苦しんでおるようじゃな?ワシもこんなつまらんUFOにほった また一噛みする度にミトコンドリア細胞が筋肉に作用し、 ホレッ」

ジャオに渡されたガム... 薄緑色のムキムキガム... フラボノガムみた いだな..

ジャオは頷いた

数日本ででも出回っておるようじゃな...」 「そうなんじゃよ。 最近ミトコンドリア細胞に働きかける商品が多

早速、食べてみた...

口の中にミントの香りが広がり鼻からスーッと抜けていく...

そして、 右の二の腕がパースが狂ったように膨れ上がった...

かもしれんが...羅列されたに過ぎんと言うかな...」はっきり言って理解不能じゃったな...成り立つと言えば成り立つの 「空気を肉に変えているというかな... 化学式を見せてもらったが、

なるほど...ジャオは博識なんだな

## インスタント

軽い...右腕が軽い...

本当に空気みたいだが、意味が違う

ずっしり肉の重みはあるのだが、 転車を片手でひょいと持ち上げたくなるような軽さ 自転車...窓から見える走行中の自

キムキガムに嘘はつけんぞ?何せ世辞などは言えぬからなw」 「ほほう...お主は右腕を一番大事に使っているようじゃな。 このム

楽しそうにジャオは私の腕を撫でた

で : 個人差があり中にはそれをそのまま持続させるタフネスもいるとか ジャオの話によると、 ムキムキガムの効き目は一時間だそうだが、

時間の夢であるはずのムキムキガムがそんな結果をもたらすとは..

日常生活に話を戻してみて、

か? 地球の食文化を宇宙に伝える手段となるのではないか?...いや、 インスタントフードも民族精神によっては宇宙に通ずる画期的食品、

宇宙食をモチー フにしたインスタントフー にしかないからな ドか...お湯なんて地球上

まぁ...それぐらい今右腕は力が漲っていると言うわけだ...

のか?体への負担云々より、治安とかさ」 「コレは凄いガムだな?出回っているとは言うが、安全性は確かな

ジャオは少し考え込んだようだが、すぐさま私を見つめ話し出した

たとい、 いかの?」 「治安か...お主からはその言葉がでるようじゃな...世の中性善説。 傷害事件に至っても、それは善意だとワシは思う...おかし

わかるわけないだろ?傷害事件の増加=治安の悪化なんだから...

ませた 私は一時間は持続させるはずのムキムキガムの効き目を10分で萎

#### C 0 ntents o f a pplication n

心感で満ちておるようじゃが、 「納得いかないようじゃの?今、 ムキムキガムは夢の商品でのう...」 お主の内情はムキムキガムへの疑

夢の商品か..

現実問題..問題がある 夢..憧れ..ウルトラマンのように怪獣を打ち倒すことが憧れでは、

?怪獣か?違う…きっとウルトラマンはラストヒー それではジャオよ?ムキムキガムを持っていない人間はどうする ローなんだ」

察しのいいジャオのことだ、 私の心情を読みとってくれるだろう

ボクシングもその昔はアンダーグラウンドな格闘技であったが、 やスポーツにまで昇華された。 「ラストヒーローか..確かにウルトラマンは古いな..安心しなさい。 ムキムキガムはすでにその域じゃよ

は最後には使命感に至るというか...ウルトラマンと怪獣の違いは憧 れと使命感ではないか?と言うか 私の言うラストヒーローと言うのは... つまり、 強さへの憧れ

いせ、

まぁ、 意味は同じか.

?危険な商品じゃないか?」 じゃあ、どうだ?ムキムキガムによって食中毒が起きたらさ

ジャオは少し困った顔をした

えるものが生まれるのじゃ」 もそのくらいは考えつく、夢を語るものある限り、それに異議を唱 「どうやら、 ムキムキガムはお気に召さなかったようじゃな...ワシ

殺伐とした空気がUFO内に流れた

を怪獣と呼ぼうじゃないか?それを私達が取り仕切ると言うのはど そうだ!!ムキムキガムの力に負けて、 暴力に走るような奴

浮かべていた ジャオは玩具を取り上げられた子供のようにつまらなそうな表情を

「なっ?なっ?」

しかし、私とて最早、引き下がれない気でいた

# ギルティセンス

には信頼が必要だ。 「では...テストをしよう。 わかるかな?」 人が人を裁くのであれば、 人と人との間

テストか...

ぁ私はそのつもりで挑もう ムキムキガムを気に入っていると受け取って欲しかったのだが、 ま

わかった。そのテスト受けよう...して、どんなテストだ?」

でどうじゃ?それに耐えられたら合格じゃな...」 ワシがムキムキガムでムキムキになった部分でお主を叩く。 それ

な、何だと?

きゃならないのか? ムキムキガムを気に入っていると受け取ってもらうために叩かれな

馬鹿げてる...いや、待て待てあのヨボヨボのジャオが一体どの部位 を鍛えていると言うんだ?

はっ!わかったぞ!

そう言う意味か...

良いだろう。受けて立つよ」

これはジャオにとっても試練になるな...

らな... ましてムキムキガムで意図的に膨れ上がった部位なんて、ジ ヤオのような賢者には耐え難いものがある 自分が一番酷使している部分で叩くなど、ジャオの美徳に反するか

ジャオは徐にガムを噛み始めた...が...

ジャオの体にはまったく変化がない...な、何...変化がない

何だ?ジャオはフラボノガムでも食べたのか?

と食べたのか?」 「変わり映えしないが?ジャオよ?いったいムキムキガムをちゃん

ジャオは深く頷いた

「無論、 く落ち着いておる...1分間に1、2回深くゆっくり力強く動いてお ワシはムキムキガムを食べた...その証拠にワシの鼓動が酷

心臓が... ムキムキになったのか?

ジャオ... なんて奴だ

な!!」 「バカな! !私だって右腕より心臓を酷使しているはずだ!!バカ

ジャオは左胸に手を当て、 私に問いかけた

な?」 「さて...ここで矛盾が生じたな?心臓ではお主を叩けない...わかる

裁けないと言うわけか..

またもや

は変な顔をジャオに向けていた UFO内に流れる殺伐とした空気...少しでも面白くならないかと私

のじゃよ...恐らく現れはするじゃろう...裁きし者がな」 「誤魔化しても無駄じゃ...お主はそのような賊者になる必要はない

UFO内の殺伐とした空気はやがて、蔓延していく。

今回の血肉の騎士の正体は...それだと核心した

### 人+口=?

UFO内はなかなか快適にリフォームされた

ジャオの発案でミトコンドリア細胞が異常な人間をピックアップす る装置を生み出したり、 私の脳味噌はオーバーヒートしていた

ていると言われておるに...お主の作ったこの装置は正確なのかの?」 「80000人か...売り上げは総計でも7000000人は購買し

さぁ... (、\_\_ ゝ´ )

それはわからないが...7000000人がボディヘリウムやらムキ 訳じゃないと受け取るしかないよな... ムキガムを購入したにせよ。 7 000000人が一斉に使い始める

入れ替わり立ち替わりしてるのさ」 「80000人が常に同じ人間とは限らないだろ?泡ぶくのように

ジャオはいささかつまらなそうだ...

らできるじゃろ?」 「しかし、 これでは事件性までは追及できんな...白か黒か...お主な

白か黒か...って、それを決めつけるのが良くないって話じゃなかっ たのか?

ジャオが何を考えているやらさっぱりわからんが...

が把握できていない故に、安易に分けるのはどうかと思うが?」 「白黒はつけたいが、数多ある商品の使用方法に則った善悪を、 私

ジャオはさらにつまらなそうなオーラを放った

じゃ。 「良いんじゃよ...これは余興じゃて、 女性の胸を触ったら黒とか、 そんなんで構わん」 お主の独善的線引きで良いの

女性の胸...か

「じゃあ、 それにしようっ!!出歯亀ついでに見に行っても良いな

どうやら、少しジャオの機嫌が治ったようだ

「良いのぅ...つまり、ミトコンドリア細胞に著しい異常があり、 女

性の胸を触っている人物が黒くなるわけじゃな?」

私は頷いた

よな」 「まぁ、 これくらいのことなら簡単だから、 すぐ機能を追加できる

すべく、念力を込め始めた 私は早速、ミトコンドリア細胞異常発見装置に白黒判断機能を追加

「ぐつ...がぁつ...あ つ

UFOのリフォ ームに力を使いすぎたのか?

私の頭はどうやら限界に達していたようだった

## 採掘場は聖地

頭を酷使しすぎた所為か、 まるでお告げかのような夢を見せられた

夢は頭に優しい

様々な出来事を自分の身の程程に要約して教えてくれるから...

私の右脳はそのとき宇宙一明晰だったに違いない...

「デコポンwおまえ土下座しろよ?ここは聖地だぞ?」

た荒れ地と言うか... 仮面ライダー の戦闘シーンに出てきそうな砂利が山のように積まれ

タッちゃんは神話に出てきそうな神々の出で立ちで、ローブを左肩 から掛けて着ていた...

葉っぱでできた冠をつけ、 タッちゃんは土下座し始めた

でさ?」 タッちゃん...何やってんだよ?こんななんの変哲もない場所

タッちゃんは土下座の姿勢を崩さぬまま顔だけ私の方へ横に向けた

切なことに気付かないんだよ?」 地だけど、ここは神様が住まう大切な土地。 「ここはな?良質なアルミニウムが採掘されるんだ... 荒れ地は荒れ 人は先を急ぐあまり大

心の底からバカにされたような...

私は仕方なしに土下座したしかし、否定はできず

「デコポン。今どんな気分だ?辛いか?嬉しいか?」

もはや、謎の質問...愚問でしかない

なサンクチュアリじゃないか?」 「私の感情は抜きに、 ここはアルミニウムの採掘場なんだろ?立派

それを聞くなり、 タッちゃ んは腹を抱えて笑い出した

地な訳ないじゃないか!アッハハハハッ!!アッハハハハッ! ルミニウムの採掘場だろ?サンクチュアリ?アッハ アッハハハハッ!!デコポン?違うだろ?ここは採掘場だよ。 ハハハッ! ! 聖 ア

な なんだ!!た、 タッちゃんだって土下座してたろ?

夢の世界がぼやけ始めた...そうか、夢が覚めるのか

## ものの記憶

ジャオが運んでくれたんだろうか? 目が覚めると、そこはUFO内に備え付けられたベッドの上だった

あった... 実は光の戦士になる前から、 私にはものに宿る記憶を読みとる力が

しかし、見たいものの記憶などないに等しい

膨れ上がり、 好奇心はやがて使命感に変わり、 後悔になる 使命感はやがて抱えきれないほど

誰もが知り得ないものではなく、 ている場面をのぞき見るような... 誰かが誰かの目をかいくぐり行っ

あまりいい気分はしない...

「どうやら、 ジャオが運んでくれたようだな...腕とかムキムキだ...

はぁ...」

私の、 ムキムキガムの使い手であるとわかってしまった... ものの記憶を読みとる力の所為で、ジャオがかなり熟達した

U
41
ינז
Ι.
Ų
•
_
ノ
$\dot{=}$
フ
₩
<b>11</b> /
18
刀
<i>,</i>
$\Delta$
説
も
Ň
捨
7
きれ
きれが
h
10
な
れない
ιJ
:

せめてあの時、 ジャオの鼓動を確かめるべきだったかな...」

閃きの神とでも言うべき導きがあった...などと早速後悔している私を見かねたか?

ジャオの言っていた、 するメカニズムを閃いたのだ 胸を触ったミトコンドリア細胞異常者を発見

例の白と黒を判別する装置だな...

そして、恥ずかしげもなく、私は叫んでいた

## 判別装置のメカニズムは至って簡単

ミトコンドリア細胞の異常は探知できるので、 にでるミトコンドリア細胞の変化を装置に記憶させれば良い 後は胸を触ったとき

私の力は星の記憶を頼りに、 数多のセックスセンスを分析し

ある種の規定値を見つけだした...

満たさないものが白く表示されるこの規定値を満たしたものが黒く表示され

規定値には煩悩や支配欲、 つまり顕示欲を満たす要素を総合的に計

算してある

性欲とはつまり、 もっと高尚な感覚というわけだ...

ジャオはどこに行ったのか?まさか?おっぱいを...」

早速、 位置を特定した... 私はジャオのミトコンドリア細胞データを駆使し、 ジャオの

く、黒つ!!」

ジャオの位置を示す点が黒く染まっていた... 地図と照らし合わせ、私はジャオの元へ向かった

583

勤修されてそうなジャオにハレンチ疑惑が...

確かに欲求の階級として性欲は高尚だとは言ったが...

まだまだ試作段階だ...きっと何か違う異常があったに違いない...」

ふと、 私は窓の外を眺めてみた...

「えっ?あれっ...」

が...むしろ逆だ... 私はまるで掛け違えたボタンに気付いたみたいな軽い驚きを見せた

重すぎて反応を抑えてしまったのだ

町は隕石群の飛来により、 火の海と化していた..

「バカな...おっぱい何たら言ってる場合じゃなかった」

私は遊び心を一切捨て、 スティー ルアイでジャ オの様子を確認した

「…これは…」

ジャオが何やら女性を覆うように倒れ込み、 の胸に当たっていた... 丁度ジャオの手が女性

この隕石群の襲来で、 ジャオは瓦礫の下敷きになっているようだ...

当たっているというよりは、 ジャオのことだ...気にしているんだろう 触れている程度じゃないか?

ん ?

ジャオが覆っていた女性の体が見る見るうちに男性に変わっていく...

. 白くなった...

ジャオを示す点が白くなっていた

からの... 舘海の奴の女水の効力は切れてよいのじゃが...」「いやぁ...助かったわい。ムキムキガムの効力も切れかけ ムキムキガムの効力も切れかけておった

私はジャオ発見後、 すぐさま現場に行きUFO内に救出した

らDNAに働きかけ、 あの女性らしき相手は舘海で、女水と言う、ミトコンドリア細胞か 男性から女性になれる水を使っていたようだ

そんな舘海も一緒に救出し、今UFO内にいる

らす商品が出回っていて...俺はやけに高額な水だと思いグルメ気取 りに買ってみたんだ..女水。 「昨今、ミトコンドリア細胞に作用し、 軟水というか。 人智を超越する変化をもた 良さそうだろ?」

舘海が私に経緯を伝えている...

そうか... 舘海には軟水に見えたのか

ろう... 女性向けのホルモン劇薬に男水もあるが、 それは硬水に見えたんだ

ぁ あぁ...それは災難だったな...ジャオとは偶然会ったのかい?」

俺はいるんだ...因みに、 さかこんな...あり得ないことすぎるだろ?しかも、 プロー チがあってね...」 「災難?災難と言えば災難だが...地球と連動している気分だよ。 ジャオとは偶然会ったんだ...彼の方からア UFOの中に今

真面目な正確が好評で、 常にクラスのムードメー カーだった舘海。

デコポンよ?どうやら、 隕石がまだまだ熱を帯びておる...」 今回ばかりは再生のしようがなさそうじ

ジャオの見解が正しいやら間違いやら...熱を帯びているから再生は 困難なのか?

唯一の安全な場所。UFO内で冷静すぎるくらいの話し合いが、

地

球の存亡を賭けた話し合いが始まろうとしていた

ちょっとすまん...鍛えたいんだが?」

早速、 が切って落とされた 舘海の意味深な発言から地球の存亡を賭けた話し合いの火蓋

えさせてほしい...」 その歳まで維持し続けているなんて...いや...情けないばかりだ...鍛 「かのような御老体が私を庇い...しかし、 申し分ないほどの肉体を

私とジャオは目を合わせ、吹き出した

な 用するアメリカの新製品なんじゃよ?ムキムキガムと言うんじゃが 「舘海よ?あの筋肉もお主が飲んだようなミトコンドリア細胞に作

ジャオはムキムキガムを舘海に渡した

ムキムキガム...知らなかった...」

舘海はムキムキガムを受け取り、席を外した。

それ以降話さなくなったそして舘海は

れば、 うが... ワシも初めてのことでわからんのじゃよ... 今回はアメリカの 新製品の影響で隕石の受信者が大量生産されたようじゃ...」 して、 いささか無理矢理ではあるが再生...いや、復元は可能じゃろ デコポンよ?この町並み...絶望的じゃな...お主の力さえあ

なるほど...

さすがアメリカと言うわけか...光の戦士が大量生産されたわけか?

いやいや...待てよ

光の戦士など大量生産されるわけがないだろう

血肉の騎士の恩恵を受けているに過ぎない現にジャオだって

## 光の戦士が大量生産されているってのは言い過ぎだ

信者の大量発生とは結びつかない気がするが?」 「確かに...町の復元はできるかもだが...隕石群の襲来に関しては受

顎に手を当て、ジャオが少し考え込んだ

ず うーむ...では、 歴代の光の戦士とは比べものにならんほどの引力を持っておる」 今回の光の戦士は異常なようじゃの...お主と言わ

そう言われてみれば...

私は既に型遅れの光の戦士だ...

それを加味しただけでも、 今回の光の戦士は背筋が凍るほどヤバい...

「た、確かに。この町は壊滅状態だが...今回はアメリカも絡んでる

. 地球が危ういってことだよな?」

ていた 私達は凍てついた沈黙を、 恰も平和ででもあるかのように大事がっ

沈黙はやがて惰性にまで達した...

良いものだ

先の見えない答えを宙に浮かべ、よもや神だ仏だと論ずるよりは、

こうした沈黙こそが近道な気もするが...

ドガーンッ!!

凄まじい衝撃がUFO内に走る

どうやら、隕石がUFOに直撃したようだ...

「罰が当たったか?」」

私とジャオは口を揃えて言った

「お、おい?隕石が直撃したんじゃないか?どんだけ頑丈なUFO

なんだ?」

舘海が話し始めた...

舘海...なんて頼もしい奴だ

いだ 「そうだな...私も強度までは計算してなかったが、 かなり頑丈みた

舘海はつまらなそうにまた黙り込んでしまった

強度までは計算してなかった。 なんてのがまた分からないんだろう

まだ隕石が飛来しておる...このままでは地球が保たんのではないか 「しかし、どうしたものかの?隕石の直撃を凌ぐ云々よりも、まだ

ジャオの言うとおり、 止まない限り再生は始まらない... させ ジャオが言うからには、 隕石の襲来が

次の時代が始まらないんだ...

「ジャオ。 私が強制的に隕石を止めるってのはどうだろうか?」

度は白紙に戻した。 金の盾をもう一度立て直すしかない...

「 じゃ のう... それが考えられ得る最善策であるようじゃな... 」

二人は頷いた

っ た 試しに舘海の側へ目をやると、窓から外を無気力に眺めるばかりだ

さてさて...

ジャオの実働的観念も舘海の所為で核心に極まっているようだ...

私は今地球付近の宇宙空間に居る...

光の戦士と銘打たれて、ここまでできるとは...

宇宙空間において、 なフィルター · が要る... 地球上と同じ働きを自分の体に促すには、 特 殊

これに関しては、 私は全くのノーアイディアであり、 ジャ オから貰

ったスペースタイツ (色はスケルトン) を着用し、 ながら、 地球上と同じライフパフォーマンスを実現させている... 宇宙空間であり

ップに明け暮れていた... 私はやってくる隕石を一つずつ虱潰しに破壊すると言うウォー

なんだか宇宙空間にまで出てきたら、 たからだ.. 金の盾作戦がバカらしくなっ

d G p r a t S O e a t h S a r p a c у 0 d e . C o u ! ! I tights?」 u l d h a d у 0 t a k i n g u m a k e у 0 а u g 0 0 u

球上と同じライフパフォーマンスを実現させているが故に通信も楽 もちろん...スペースタイツはアメリカが作り出した新商品だが、 々というわけだ... 地

イエス。アイゴティット...」

у О ų r e s u p e r h e r O n e v e r mind?

う つ爆破したか? む...しかし、 これほどの隕石が地球にやって来るなんて...星が

はっ!!

「へ、ヘイ?ユーキャンシーザムーン?」

0 n 0 h e jokes a m а s i n g I e l o v e g e n i n е e n t g U

どうやら、伝わってないようだが...

仕方なく 私は自分で月があるかどうか。 確認することにした

## 流星のごとく

地球の衛星として、 存在する月

その月が爆破し、 地球目掛けて隕石を放っているとしたら...

宇宙にでる前の調べでは、 世界各地で隕石の襲来があっているよう

だったが..

月が爆破して、地球全体に隕石が襲来するにはどんな星同士の動き

があったのだろうか?

同時にとはいかないが

説明はつく

もう一つに月が地球を公転する際に少しずつ朽ちていった場合だ...

それも考えられる...

r ņ W e r 0 W ę 0 S m 0 0 n b 0 o n у О u r p i n s p a c e у О . D o u

あれ?月はある...

アメリカからもどうやら、月は既存であると報告されたようだ...

私はため息混じりにまた、 隕石を虱潰しに破壊し始めた

「はぁ…」

根元を突き止めれば、 ったが、月はあるし、 それ以外、 隕石群の襲来は止められると思っていた私だ 太陽系の星々もあるようだ...

ため息は宇宙レヴェルに色濃くなり

どこからともなく飛んでくる隕石群に私は嫌気がさしていた...

て 「私の代の頃はよかったな...勇者タベルが何かと世話を焼いてくれ 今思えば、 勇者タベルが元凶だったと言わざるを得ないが、 起

はずなんだが せめて地球に飛来した隕石群が熱を冷まし、 風化すれば...再生する

その考えそのものが違うのだろうか?

土の勇者たるものが地球にいて...それが根元なのではないだろうか?

星の爆発が根元ではなく...隕石を多量に生み出している者が居たと したら?

なかったのかもしれない... 土の勇者を探すべきだったな...悪魔にして...隕石にしなければいけ

宇宙空間では、 るかのように絶えず生み出す隕石群を壊すことしかできなかった... しかしそれ以上の思慮はなく、 土の勇者が呼吸をす

願うばかりだ」 「勇者タベル...そして、 新しい光の戦士が巡り会い織りなすことを

宙空間にチュー スペースタイツのおかげで体は保温されているが、 ンしているようだった... 心はどうやら宇

## t e a r i S f e a r o f t h e o n e

おる」 名乗る者が今TVで、タベルと地球を救う為に条件があると話して 「現れたぞ!デコポンよ。 ワシも心待ちにしておった..光の戦士と

それに光の戦士またタベルだったか...タベル?

地球を救う為に条件がある?

溜まりに溜まった疲労の所為か... 隕石を破壊しすぎた所為か... というか

早くしてくれ...こっちは隕石の襲来を食い止めてるんだぞ?

ホールに。 か?条件なんて聞いてられない... タベルを悪魔にするんだブラック 「ジャオか?悪いが、 なんとかTV局に繋いで話をさせてくれない

焦りがあったのは確かだ...

ひかし、そこには確かなプライドがあった

とは、 「な、 んじゃからの...そして...デコポンよ?もう一つ条件があるんじゃ」 しておるそうじゃ。 地球を一度殺すことじゃそうじゃ...それほどの再生力を想定 何を言うとるか?新たな光の戦士と勇者タベルが掲げた条件 確かにの...新光の戦士と勇者タベルがそう言う

地球を殺すだって?破壊するってことか?正気なのか? まさか、勇者タベルは先の私との対立を記憶してあり、 した上で...悪魔になる気はないというのか? それを考慮

と再生するわけだな?で、 なるほど...ジャオ、 もう一つの条件ってなんだ?」 わかるようなわからないような...

少し間があったが、 ジャオは意を決したように話し始めた

起きないと言うのは事実のようじゃな」 らは思っておる...しかし、 「デコポン…お主の死じゃ…地球が破壊されればお主も= 死ぬと奴 デコポンよ?お主の死なしには、再生は

そ、そんな...

私の命が地球を救うのか?

そうか...まだ私が光の戦士の力を携えているから...地球がこんなこ

と に :

ないんだな...」 「そうだったのか...それではいくら隕石を破壊しても、 地球は救え

ったんだ すべての事柄が一つに繋がったような... そのような覚悟は前からあ

「デコポン...?デコポン...?」

ジャオの応答には堪えられずにいたが、 私の目から溢れ出る涙は、

私は早速、 向かった 金の盾作戦に切り替え、 勇者タベルと新光の戦士の元へ

構わない...地球の為なら命など...

新たに生み出した移動術ワーピングもこれきりか...」

宇宙を行き来していたのだ... 私は大気圏のストレスを受けないほどの粒子にまで分解し、

その際に地球の磁力に集中することにより、 いうわけだが... 迅速に地球に戻れると

まぁ...良いだろう」

私は甘い判断を自分にした

物だった.. 宇宙から見る地球は美しく、 絵や写真で受ける印象とはまったく別

まぁ...良いだろう...と私は自分に甘い判断をしていたのだった

勇者タベルにやっつけてもらいに行った 私は粒子のまま、 磁力を勇者タベルに合わせ

よしつ...頃合いだ」

私は勇者タベルの眼前で実体に戻った

暖かいというか...湿っぽいというか...じんわりと何か液体が体中に

染み込んでいくような...

シャワー室...

デコポン現るよっ ・キャーッ!

勇者タベルの磁力に確かに従ったはずだが...

そこには、真っ白く透き通った肌をもつ、金髪の女性が真っ青な目

を私に向け、 恐怖におののくように体を隠した...

に現れるなんて...サプ返し?」 「もう...デコポンっ!!あなたを待っていたのだけど...シャワー室

さて...私の時間は止まってしまった。サプ返し?

## 再生不可

今回の光の戦士はまだ、 五歳の女の子なのよ...」

シャワー室から一転して、 私は談話室に通された...

談話室には、 てあった 面談用の机と椅子が対に1:2の割合で7セット置い

私達以外は誰も居らず、 奥から二番目の席に着いた

真っ黒なスーツに着替え終わった勇者タベルは、 スカートから覗く

足をポリポリ掻きながら座った

まぁ...座って、 なんて言うのかしら...加減を知らないというか。

半永久的に地球に隕石が飛来するシステムを作っちゃったのよ... 私が再生の話を先にしてしまったからかしらね?彼女天才だから、

... そのシステムは私にはわからないが、 私の目はまだ黒い

題ではなく、 「土の勇者本人を前に、 結果あなたが隕石となることにより、 こんなことを言うのもなんだが、 再生は始まるの 隕石の問

ではないか?」

核心だったのだろうか?

しばしの時間があった

が、 勇者タベルは心配そうに私をみてきたのだった

念力、気力程度ではあの子には勝てないの。 前に進めたい一心みたいね...でも、違うのよ?あなたの力、発想力、 なたを選べるかどうかね...」 「あらあら... 男なのに以外とラジカルなのね... そう... あなたは話を 要はあの子が私よりあ

壁に苛まれたような。 無理矢理志気を奪われたような...

ホルモントークで男が女に適うわけがない...

私が五歳の女の子に気に入られるわけがないだろ...

スじゃ ないか」 しかし… それでは隕石を半永久的に飛来させるのはナンセン

パンッ

私は頬を打たれ、椅子から投げ出された

彼女の意志を尊重しなくては駄目なのよ?な、何よナンセンスって 「違うのっ!!あなたよりあの子の方が強い力を持っているのよ?

身震いがした..

どこか女々しく抱き寄せてやりたいが...たった一枚の壁がそれ以上

を求めているようだった

連れてくるから...」

私が情けなく頬を覆い見つめていると

たまらなくなったのか勇者タベルは談話室から出て行った

このままの体勢で居ようかな?

私は妙な気持ちになり、

とても悪戯な気持ちになった

五歳の少女じゃないか?フフッ...さてさて...」 「そうだっ!!ケーキなどを用意しよう。天才光の戦士と言えど、

出した 私は早速念じ込み、 サグラダファミリアのようなパンケー キを生み

雪のようにまぶされた砂糖がチョコレー トベースの生地を彩り、 き

っと「食べるのが勿体ない」などと...

「食べるのが勿体ないっ」

確かにケーキを置いた机の椅子から声がした...

ガチャッ

「お待たせ。」

勇者タベルが談話室に入ってきた

は食べたくないって... ププッ 「御免なさいね?彼女キヌって言うんだけどね...土臭そうなケーキ

私は何か閃いたような、 ルを見た 物事が繋がっ たようにケー キのあるテーブ

「ジャンジャジャ キは美味しく戴いたわ!!」 ン!!キヌよ?私はキヌ。 おキヌちゃんよ!

キヌと言う...

議な雰囲気を持っていた。 天才光の戦士は秋田小町のような...その...お菊人形のような...不思 45寸程の身の丈に、 派手な着物を着て

「こ、困ったな...美味しかったかい?」

を見せてくれた

お返しにとでも言わんばかりに満面の笑顔

彼女は私の問いに頷き、

美味しかった!美味しかった!美味しかった!」

何度も言うもんだから、 たんだが... 私はもう一度ケーキを出してあげようとし

もう止せっ! ・貴様つ !!」

七つの声が同時に重なったようなおぞましい声が私の心臓を直撃し

嫌な予感が、すべての力を出し切っても太刀打ちできないような...

程遠い力を感じた

そう...どうやら私の長い夢が覚めるときが来たようだ

## 死んでいた

緯を尋ねてきた わたしはすっかり萎縮していたが、 淡々とキヌは私のこれまでの経

そこから... あなたの伝説は始まったのね...」 「そう...化け物列車で円周率のことを考えてたら、 おっぱいにね...

私とキヌはあのケーキがあった机で話している

返った キヌは涼しげな顔を私に向けたかと思うと、 勇者タベルの方に振り

「残念だけど...このタイムラインは死んでるわ...」

談話室の出入り口となるドア付近に凭れるように腕を組み、 いた勇者タベルは、 それを聞くなり、 居たたまれない顔をした 立 っ て

...そう...彼には次の周期まで残ってて欲しかったけど、 残念だわ」

勇者タベルはドア付近から、 私達のところまで歩み寄り、 私を見て

話し始めた

薬による自殺を図った...そしてここはあなたの夢の続きの世界...わ かるかしら?夢から覚ましてあげたいのよ」 「私からの提案よ?あなたは実はその同窓会の帰りの電車内で睡眠

二人の天使が現れたようだどうやら...

彼女達は私に天国への切符をくれると言っているのだ...

「バカな...私は臨死体験までしたし、 すべて現実だと受け入れてき

た。そんなはずはない...」

勇者タベルは呆れた顔をした

ムトラベルは地球の自転の巻き戻しと早送りにより可能なことを理 「あなた...光の戦士なのに時間の概念もないの?光の戦士ならタイ

かないの...」 解すべきよ?あなたはその同窓会の帰りの電車内に戻り自殺するし

単にラストオーダーを聞きに来る店員のそれでしかなかったのだが... それは曲がりなりにも、 光の戦士として無敵を誇っていた私には、

否定する文句がすぐ浮かばない...

それは不可能なことではないからだった

'さぁ、ほらっ!!一気に行きなさい」

タイムトラベルとは簡単なものだ...

過去に戻ったら最後、そこから元居た現在には帰れない...

原点を探るのは簡単だが、そこから導き出されるランダムな未来( つまり元居た現在)は二度と戻っては来ない...と説明された...二十

邴の初春

私はすでに過去にタイムトラベルしていた...

勇者タベル等は私のタイムラインに依存することで、 ルする前の状態を維持しているようだが... タイムトラベ

はっきり言って、 死ぬには打って付けの心境だ...

としかできないんだろ?そんなの終わりだ...」 のフォーマットな状態から予測された何の味気もない現在に行くこ ら無理に時間を早送りしたら、わたしは何の関与もしてない、全く 「本当に...本当に...元居た世界には帰れないのか?つまり、ここか

勇者タベルもキヌも不思議そうな顔を見合わせ、 私を見た

私達が元居た世界に戻り、 「そりゃ、そうですけど... 様子を見てみますから... それで駄目なら 試しに死んでみてくださいよ?そこから

あなたが死ぬ前に、 この時間帯に戻ってきますよ...」

な 何て奴らだ.

イカレてやがる... 大体女子供に駄目だったかどうか何て判別できる

のか?

死んでみたらわかるなんて...狂ってる

ちょっと待った!!」

えっ?勇者タベルが二人?

どこからともなく、
勇者タベルがもう
つ一人現れた

いかん。デコポンがここで死んだら...駄目だった...」

唖然とする勇者タベルとキヌ

「確かに...駄目だったらこの時間帯に戻ってくるとは言ったけど...

どう駄目だったの?キヌはどこ?」

私が死んだ世界を知らない勇者タベルは、 いる勇者タベルに問い始めた 私が死んだ世界を知って

当番制にしてしまったから...」 「まだなのよ...まだキヌに光の戦士の座が与えられないの...男達が

答えた 泣きながら、 私が死んだ世界を知っている勇者タベルはその問いに

か...この光の戦士舘海からは逃げられないぜ?」 やっぱりか..俺の睨んだとおり、 この時間にタイムトラベルした

次に現れたのは舘海...

私が死んだ未来では、 いるようだ... 光の戦士の座は代わる代わるに立ち替わって

私は睡眠薬の瓶を強く握りしめた自業自得なのか?

張り、 舘海は私が死んだ世界を知っている勇者タベルの美しい金髪を引っ 自分の元へ引き寄せた

その力を永続的に循環させてきたが...もう限界だ。 俺がこの世を支配する」 アハハハハッ... すごい力だ。 光の戦士になる条件でもある五属性の制覇を何度も繰り返し、 光の戦士。 俺達は日夜戦いに明け暮 火の戦士として

に浮き出ていた 舘海は漁師のような赤黒い肌に変わり果て、 血管が体のそこいら中

目は瞳孔が開ききり、血走っていた

それはまさに、狂気のそれであった

バタンッ!

そして、その作用を舘海に移した

タツの業だ...

士...デコポンあなたのクールさがこの世を狂わせたのよ...」 て、 ア細胞が常に過熱し、欲望のままに地球を練り歩く...それが光の戦 そうよ...光の戦士は本来こうあるべきなのよ...ミトコンドリ

私が死んだ世界を知っている勇者タベルは髪を整えながら私に言った

クールさが原因とは...

私の戻らない時間は過去にあるのか...未来にあるのか...

その後、 に帰って行ったが... 私が死んだ世界を知っている勇者タベルは私を介し、 現 在

「しょうがないわ...デコポン...私達も同じ...あのもう一人の私と同 デコポンのいない現在に帰らなければならないわね...」

ため、 私が死んだ世界を知らない勇者タベルも私を介し、 現在に戻ることは可能だが... 過去に来ていた

刻まれることとなる 舘海の無惨な死体とフォーマットされた私の武勇は、 痛ましく胸に PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 ・ンター そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n0766u/

円周率の天才

2011年10月12日15時50分発行